

---

# モンスターハンター 破壊神を破壊した男の物語

ゴリラ軍曹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター

破壊神を破壊した男の物語

### 【Nコード】

N5744R

### 【作者名】

ゴリラ軍曹

### 【あらすじ】

破壊神の異名をもつ凄腕ハンター、ラグナ・ジークフリード。

彼の活躍は近隣の村や街にとどまらず、大陸全土に広まっていた。

そんな凄腕ハンターが送る日々は至って普通の狩人生活。ハンターライフ

しかし突如、狩猟中に不思議な力が覚醒。

その力とはモンスターを擬人化させる能力だった！？

7月22日から第二章に突入！！

## 始まりの序章（前書き）

この作品は駄作、もしくは地雷の可能性あります。

駄作でも、誤字も、地雷も華麗なステップでよければ猛者だけどうぞ！！

猛者じゃなくても大丈夫な可能性があるかもです

## 始まりの序章

外も桜が咲き、少しずつ春が近ずいてきたことを知らせてくれる。しかし、ここジャンボ村は一年を通して暖かく、夏になるとかなりの気温まで上がる。

実際冬のほうがすこしやすい。

だが、季節が変わりゆくのも嫌いではない。

春には桜が、夏には酒場で飲む酒が、秋には食材が、冬には暖かい我が家が最高だ。

そんなのんきなことを考えながらベッドから立ち上がってカウンタ―に向かっている彼の名はラグナ。

明るい赤色の髪に、白い肌。

とがった顎に活気に満ちた目。

顔は二枚目なのだが、雰囲気ので、霸気が全くない。

今はインナー姿だが、本来なら黒い、狂暴な雰囲気、鎧に赤いラインが入った防具をまとっている。

黒い神、または破壊神と呼ばれた、アカムトルムの武具を。

だっ広い家にアイル―四匹と暮らしているのだが、いつも自由気ままに生活している。

「おい、ジライア、朝ごはんある？」

「ご主人、やっと起きたかにゃ？」

「ううん。あんまり起きてないけどお腹すいた」

「ちょっと待ってるにゃ。キッチン担当の三匹に言ってなんか作ってもらうにゃ」

「なるべく早くね。余り物で良いから」

なぜ雇い主が余り物でアイルーが本格的に朝ご飯を食べているのか不思議だが、結局彼はこういう性格なのだ。食べ物はどうもに越したことはないが、実質食べればそれでいい。

細かいことは気にせず、本当に大事なことや、本当に困ったことがあると真面目になる。

いつもふまじめなわけではないが、大体は気が抜けている。数分待つと数品の料理が運ばれてきた。

3匹のアイルー右からミート、ベジタブル、フィッシュ。

自分でもふざけた名前だと思うが、三匹も気に行っているらしく、しかも本当にミートは肉、ベジタブルは野菜、フィッシュは魚専門の猫なのだ。

「今日はベジタブルが中心の料理なのにや。今日もお仕事頑張るにや！」

「分かってる。ジライアはもう食べたの？」

「とつくに食べたにや。それより朝に弱い破壊神ってどうなのかにや？」

ちなみにジライアはラグナのオトモアイルーで、親友でもある。

ジライアと共にくぐっていきた狩場の数は計り知れない。

サラダ中心の朝ご飯を終え、今日も狩りに出る。

ボックスから防具を取り出し、装備する。

だがまだ頭具ヘルムは付けない。

ヘルムを小脇に抱えて、ボックスから、覇剣斧ムルカムトルムを取り出す。

この武器は特注だ。まだこの地方には生産方法が完全に伝わってい

ない。

そしてジライアの防具も特注だ。

オトモアイルーの防具を作ることをしていない地方では珍しいだろう。

そしてジライアの装備している物は空の王者リオレウスの防具だ。

ラグナが装備とアイテムポーチの準備を整え、家を出る。

外はやはり少し暖かった。

鼻歌を歌いながら、子どもや商人、アイルーの雑貨屋や調合屋のジイさんのあいさつに丁寧な答え、酒場に向かう。

と言っても酒場と言うほどの作りではない。

少し開けた場所に木の床を敷き、樽の椅子を置く。簡単な屋根とカウスターを取り付け、食べ物そろえただけの酒場だが、人々の思いが詰まった酒場だ。

ゆっくりカウスターにちかずいていくとパーティがいつもの同じ、営業スマイルで迎えてくれた。

「はあい！今日はどんなご用件で？」

「確か、テロス密林でリオレイアが暴れてるってさっき村長から聞いたんだけど、依頼出てる？」

「密林でのリオレイア狩りですね？え〜つと、ゝゝ。」

かなり厚い依頼用紙の束から必死に探すパーティ。

それを「急がなくていいよ」と笑いながら見ているラグナ。

向こうでは長くなると踏んだのか、ジライアが親方に腕相撲を申し込んで、0.2秒で三メートル先までふっ飛ばされている最中だった。

「あゝっと・・・。あつ！！ありました！！」

「あつた？ならよかった。この頃皆不安がってるって聞いたから」

「ラグナさん、危険度の高い依頼で引つ張りだここですからねえ」

ラグナほどのハンターになると他の街や村から指名して依頼が入ることがある。この場合は近隣のハンターでは手に負えない場合や、緊急な依頼が多く、危険度の高い依頼ばかりなのだがラグナはそれらを片っ端からこなす、凄腕ハンターなのだ。

「このモンスターは指名手配ウォンデットがかけられてます。追加契約金10000zと契約金6000zです」

「ほい」

「気お付けて頑張ってくださいねー！！」

小銭入れから16000zをカウンターに置き、吹っ飛ばされてピクピクしているジライアを呼び、パーティと村の期待を背負い、テロス密林に向かった。

「さーて、今日もお仕事だ」

この時は知らなかった。

行く時の人数より、帰りの人数のほうが増えているなんて。

名前はルナ！今決めた！！（前書き）

記念すべき2話でし！！

暖かい目で、半永久的に見守ってください。  
擬人化キャラ募集中です。

名前はルナ！今決めた！！

最初に船を岸に付け流されないように固定する。

そしたらすぐに狩猟開始だ！！

千里眼の薬を飲み、一時的に嗅覚を跳ね上げる。

そして相手の位置を探り、移動する。

今はエリア10、海に囲まれた小島にいるようだ。

あそこは夜になるといけないから昼間来てよかったな、と思いながら浜辺の道を進む。

サクサクと音を立てて進む。

途中でザザミが地面から出てきたが、ジライアがねじ伏せた。

エリア3に着くと、そこには密林の一部分だけ動いているような感覚があった。

陸の女王リオレイアだ。

ジライアの付けているレウス装備の元のモンスターの雌に当たる。

二本足で腕は翼に進化している。

リオレイアは陸で動くことに特化しているため陸の女王の異名をつけられている。

最初に動いたのはジライアだった。

ジライアの持つ武器は火属性だ。

同じ系統の飛竜種に火属性は効かない。

しかし、ジライアあえて切りかかった。

こちらに気を引くために。

そしてリオレイアのバインドボイス。

「ゴアアアアアオオオオオオッ！！」

音の塊を破裂させたような轟音が鳴り響く。

そしてジライアに向かって突進する。

周りの木々をなぎ倒し、地面に体を擦りつけるように止まる。

しかし、その時には既にリオレイアはペイントボールでマークされ後ろにはラグナの姿があった。

ジライアは小さな体でリオレイアの突進を剣で受け流し、ラグナのもとに戻る。

ラグナは尻尾に2、3度切りつけるとすぐに武器を仕舞い、閃光玉を握る。

立ち上がったリオレイアがこちらを向く瞬間に閃光玉から出ているひもを引っ張りリオレイアの顔面めがけて投げつける。

そして、自分の目を焼かないようにしたのだが、、、？  
一向にリオレイアの唸り声が聞こえない。

それどころか、女の子の声がするのは気のせいだろうか。

そつと目を開けてすぐに後ろを向いた。

「ジライア」。俺知らない内に頭打ったみたいなんだが？」

「ご主人、僕もにや」

「目が痛いよー！何なのよーもおー!!」

さっきから女の子の不満の声が聞こえるがこれは空耳かな？  
きつと波の音だな。うん。きつとそうだ。そうに違いない。  
そう思っつて再び後ろを見るがまた目をそむける。

「なあジライア、あれって何？」

「いや、僕に聞かれてもにや？」

「その一人と一匹！！」

「はい？」

二人同時に振り向いたがなぜか裸の少女が立ってるだけだ。  
何気に気まずいのでここは？

「忍法！ だろんの術！！」

意味不明なことを言いながらラグナは地面に戻り玉を叩きつけ、ベ  
ースキャンプに戻る。いや、逃げた。

「あッ！きつたねえ！待ちやがれなのにや！ご主人！！」

取り残されたジライアがアイルーらしからぬ暴言を吐いてラグナの  
後を追いかける。

取り残された少女だったが。

「なんかよくわからないけど体が小さくなってから、いつも入れ  
ない場所に入れるんだから」

ベースキャンプ

なぜか心拍数が上がっているラグナがベットで寝ころんでいた。

「何だったんだ？ 1回村に帰るのかな？」

そんなことを呟いているうちに地面が盛り上がり、つてきてそこからジライアが出てきた。

「地面潜るのしんどッ!!」

ふらふらとラグナの隣まで来て床に寝ころぶジライア。  
二人に安どが訪れたと思った瞬間。

「やっぱここにいた!!」

ビクウと肩を震わせた1人と1匹。  
エリア3からの入口に人が立ってる。  
もちろん例の少女だ。

「待つてよ!!」

「いや、待つてほしいのはこっちのほうです」

「ひとまずこの毛布を体に巻いてくださいにや」

ラグナはうつむいたまま喋っているが、もう慣れたのかジライアは普通に毛布を渡しに行っている。

「? 良いけど私に何したの? 体はちっちゃくなるし、飛べなくなるしもう散々なんだけど」

いや、だからこっちが聞きたいぐらいだって。という突っ込みは置いておくことにしよう。

というか、彼女は自分が人間になってることにきずいているのか?

「いま君人間なんだけど？」

「そうなの？」

「知らなかったのか、い。」

このままここに置いていくこともできないし、村につれて帰っても大変なことになるし、どうしようか？

「君は何？」

「え？ リオレイアだけど？」

やっぱりか。どうしようか。

まあ、時間はまだあるし、いくら依頼だからってこの子を殺すわけにも行かないしね。

「なんか食べる？」

「お肉」

「僕もお願いするにや」

即答＋肉限定二人前。

せつせと肉を焼き始める。

適度に焼きあがった肉が三つできると二人に渡して座っててべ始める。

「ふう〜。やっぱヘルムは息が詰まるからなんかな〜」

そう言つてヘルムを外すラグナ。

ジライアはヘルムを付けたままでも食べれるのでそのまま食べている。

なぜかこつちをずっと見ている少女に話しかける。

「あれ？ まだ生だった？」

「えッ？ べ、別にそんなことはにやいでしゅ／＼／」

「ご主人？」

なにやら意味ありげににやにやしているジライアを横目になぜかうつむく少女を心配そうに見ながらこんなことを考えていた。

「なんか悪いこと言つたかな？」

皆肉を食べ終わり、骨を埋めてしようがないので、適当にアイテム採取をして帰ることにした。

このまま帰ると契約金とウォンデットの追加契約金が帰ってこないが1600zぐらいでは生活に支障は出ない。

それほど、沢山の依頼をこなしているのだ。

「それで君はどうするの？」

「貴方に付いてくー！！」

「いや、もつと考えたほうがいいと思うけど」

「だめ、／＼なの？」

上目使い＋涙目はやめてください。

「だめじゃないけど、。家狭いよ？」

「ご主人、嘘はイケないにや」

お前はどっちの味方なんだ！？この子が家に来てほしいのか！？  
ご主人より女の子をとるのか！？

「分かったよ。じゃあ親方に頼んで部屋を増やしてもらわないと。  
え」と、名前は？」

「名前？」

モンスターって名前ないのか？

だったら考えないと。なんか女の子らしい名前が良いな。

レイアとかマジありきたりな名前だからな。

何か女の子っぽい名前は、。。

「よし、君の名前はルナ！」

「確か希少種は黄金の月に例えられてたにや。良い名前だにや」

「ルナ・・・？ 良い名前！！」

「それにしてもいつから考えてたにや？」

「今考えた！！」

その後、少しアイテムを採取して帰った。

家族一人追加で。

## 一日の終わり

ひとまず、夜になるのを待って家に帰る。

白昼堂々と毛布にくるまった少女を連れて歩いていたら怪しまれるにきまつてる。

そして、家に入るとキッチンアイルに服を作れないか聞いたところ、作れるらしいので適当な素材で服を作ってもらうことにした。

「疲れた……。ご飯食べてお風呂入って寝る……」

「お風呂って何？私も一緒に入っていいのかな？」

思わず噴き出しそうになったが思いとどまり、ここは優しく説明しよう。

「お風呂ってのは、モンスターで言う所の水浴びみたいなものだけど、人間は男女別に入るんだよ」

「だめ？」

「うっ！……多分……だめ……」

「ご主人ひどい」

一匹いらん猫がいるがあえてスルーしようとしたときなぜかルナが涙ぐんでることに気が付いたラグナはあわててジライアに相談を持ちかける。

「どうしょお？　今まで女の人との接点なんてなかったから対応の

仕方もある方も分かんないよ!？」

「ここはひとまず一緒に入ってやるのが先決にや」

本当か?と少し疑問を残しながら切り出した。

「よし!一緒に入ろう!でもその前にご飯だ」

「ほんとに? ありがとう」

そのあとキッチンアイルーが料理を運んできて それを三人で食べ始めた。

数分後には食べ終わっており、アイルーが風呂を焚いてあった。

「なんか今日は色々あったからな……。疲れた」

湯船に沈みながらぼやいていたラグナだったが、更衣室のドアが開く音がした瞬間隅まで逃げ込んだ。

「うっ!心臓病が!」

とか言っただけで心臓を抑えるラグナだったが、あいにくアイルーがいないのでこの仮病は失敗に終わった。

「ここを入れればいいのかな?」

「そっだね」

ジライア!?!そこにいるのか!?!

「ジライア、俺の代わりに一緒に入ってやってくれないかな？」

「それは無理な相談にや」

「私と入るの・・・いや、なの？」

なぜかいきなり罪悪感に見舞われたのでそのままいること決定。

「じゃあ、ご主人にごによ、ごによ・・・」

「それをやればいいの？」

「いかにも」

なに吹き込んでんだあいつは！！

「ご主人、ルナの体を洗うのは僕が引き受けるにや」

「助かる・・・」

なぜか「あう／＼／＼」とか「くすぐったいよ／＼／＼」とか聞こえたのは気のせいだ。

湯船に誰が入ってくるような感じがしたので、動くのをやめた。少しすると、誰かちかずいてくる。

「えへへえ、ありがとー！！」

と言いながらルナが背中に抱きついてくる。

「んあ？ ななな何が！？」

「だって私を拾ってくれたし」

「いや、あれは当然のことをしただけだし・・・ジライア・・・後で・・・殺す・・・」

そのまま湯船に倒れこんだ。

「え？ えええ！？ ジライアなんか倒れちゃったけど！？」

「全く、ちよつとは免疫をつけようと思ったけど刺激が強すぎたか  
にゃ？」

そのあとアイル―4匹に自分の部屋に担ぎ込まれた。

「死ぬかと思った・・・」

「だ〜か〜ら〜 ごめんにやさいつてさっきから言ってるじゃにゃ  
いか」

「なに吹き込んでるのだから」

そこに顔を赤くしたルナが来た。

「えつと、さっきはごめんね？」

「悪いのは全部このバカ猫だから気にしないでいいよ」

「なんか僕の扱いひどくないかにゃ！？」

「で、悪いんだけどひとつ良いかな？」

本当に気まずそうに聞いてきたので、これ以上何をしようとしているんだ！とジライアを見るとバカ猫もきよんとしている。

「その、貴方の名前ってまだ聞いてないんだけど・・・」

名前も知らない人と風呂に入ったのか！？と内心思っていたが、元モンスターだからしょうがないか・・・。

「何だそんなことが」

「そういえばいつてなかったにや」

「俺の名前はラグナ。ラグナ・ジークフリード」

「僕の名前はジライア、見てのとりのオトモアイルーにや」

よろしく！と腕を差し出すと、ジライアが手を握るのにやと、援助を送り、握手を交わした。

「そういえば下の名前ってほしい？」

「下の名前？」

「ご主人で言うところのジークフリードの部分にや」

「欲しい！！」

「何がいいかな？」

「元はレイアだにゃ」

「レイアと言えば女王様だろ？プリンスはどうかかな？」

「ルナ・プリンセス。いいんじゃないかにゃ？」

「ルナは良い？」

「良いよ、ありがとッ！」

「よし！じゃあ寝るか」

ルナに部屋の位置を教えて自分の部屋に再び戻る。  
武器もほとんど使っていないので、軽く研いですぐに戻る。

「さて、寝るか」

最後にこんなことを考えていた。

「ルナのこと村長にどう説明しよう・・・」

## 再び狩りへ（前書き）

今回は頑張ります，

## 再び狩りへ

ハンターの朝は早い、わけでもない。

早起きをすれば良い依頼を受けれるし、良いことはある。

しかし、ジャンボ村にはハンターは二人しか居ないため、早起きをしてもしなくても変わらない。

「おーい！ラグナ！起きろ、今日は一緒に狩りに行く約束だぞ」

家の外から、正確には隣から声が聞こえる。

人が朝ご飯を食べてるときになんで起きろ？

「ご主人、ジンの野郎が呼んでますにや」

「お前は最初に言葉使いを直せ」

「だれ？」

今まで朝飯にがつついていたルナが聞いてくる。

「ああ、隣さんのハンターだよ。普通にいい奴だけど変わってる趣味がある」

「変わってる？」

「まあ、会えば分かるよ」

そう言って早めにご飯を済ませ、家から出ると村長とハンターが何やら話していた。

ハンターは虫の羽や甲殻を重ねたような防具を着ていて、背中には太刀。

黒光りし、先端にかけて紫色になって行くのがわかる。触れただけでも切れてしまいそうな印象を受ける。

近くに行くと村長がこちらに気付く。

「やあ！」

「こんにちは、村長」

「その子は？」

「まあ、狩猟中に助けた女の子ってことにしといてくれ」

「さすが我が村のハンター殿、狩りの途中に人助けもするとは」

何かだましているような感じがするのがきつい。閃光玉投げたらリオレイアが女の子になってました。

なんて行っても信じてもらえないよな。

そんなことを考えているうちに村長はどこかに行ってしまった。

「ラグナ、本当のことを言おう？」

何やら意味深長に話しかけてくるジン。

何故か虫が好きなジンだが、根は良いやつで、ハンターとしての腕前もかなりのものである。

「レイアに閃光玉投げたらこうなった」

ジンとは古くからの友達で、嘘をつくとすぐにばれる。

「なにその嬉しいドッキリ」

「知らんがな、今日はなにに行く？」

まともな突っ込みが来たが、これ以上何か聞かれても面倒なので狩りの話に持ちこむ。

「確か砂漠の暴君が二頭で暴れてるって依頼があっただけ」

「二頭狩り、ねえ、。」

二頭狩りに2人で行く場合には一人一頭を相手するのが妥当だが、相手が協力すぎる場合は、2人で一頭ずつ倒していく必要がある。かなり危険な相手だ。

「それにしよう」

「分かった」

困っている人がいる以上、解決できる人間が解決する。それがこの時代に生きる人間の考え方だった。

「それじゃあ、ルナは待っていてくれる？」

それまで黙っていたルナが唐突に切り出した。

「私も行くっ！！」

マジかよ。

「ディアブロスって見たことある?」

ルナは満面の笑みで

「ない」

言い切った。

「うん、。女の子を連れていけるような余裕もないし、というかハンターでもない人を狩り場につれていくこと自体ギルドが許すかどうか、。」

「行きたい、。」

「どうしても?」

「うん、。」

少し考えた後にラグナはルナをハンターにすることを決めた。

「ジン、ちよつと待っててくれ、それとその依頼は後回しだ。簡単な奴、例えばヤンクックの下級個体ぐらいの奴受けといて!」

「まあ、良いけど」

「すまん」

そうして、一度家に帰るとアイテムボックスの中からさまざまな武器を取り出した。

「狩り場に行くなら武器を決めないかね」

「うん」

「ジライア！準備してくれ！」

順番に武器を持たせるが、大剣が持ち上げらず、太刀はふらつく。  
ハンマーと狩猟笛も持ち上げらず、結局双剣に落ち着いた。

「最初は基本の武器から、インセクトオーダーあたりでいいか」

「さっきの人と同じ感じがする、。。」

「じゃあ、最初はイャンクックあたりでいいかな？」

「イャンクックってピンク色の奴でしょ？」

「そうだよ」

「なら簡単だね」

「前はリオレイアだったから簡単に思えるかもしれないけど、人になると大変だよ？」

「そ、そうなの！？」

アイテムを整理しているときにふと気になったことがある。

「また閃光玉使うと人になるとかってことはないよね？」

「分かんない。なるかもね」

もしそうだったらこれから閃光玉、一撃必殺の道具になりますか!?

「まあ、良いか。ならないかもしれないし」

ルナにハンター装備一式を着せて出発。

密林に向かう途中でふと気になって聞いてみた。

「そういえばルナって指名手配ウオントレットがかけられてたけどなんかしたの？」

「なんかむしゃくしゃしたから自然破壊した」

思春期!?!?と思いつながら密林に向かう。

途中で軽く剣を振って遊んでいたルナだったが、もう飽きたらしくその辺を走り回っている。

密林に着いて、船を付けると

「最初はランポスあたりとやりあってみるか」

「ランポス？」

「まあついてくれば分かるって」

エリア4からエリア3を抜けて、エリア7に入る。

「あれがランポスだ」

「分かった」

「じゃあ狩猟開始だ」

ジライアが走り出し、まず一匹を切り捨てた。

次にジンを囲んだランポス3匹をラグナが斧モードでズドッ！ズドッ！ズドッ！と3匹を一振りで葬った。

残りの2匹の内、一匹がラグナに飛びかかってきたが、ジーンが一刀両断、ランポスは着地とともに内臓をぶちまけ絶命。そして、最後に残った一匹がルナとやりあっていた。

「えいッ！」

正面から切りかかるが、動きに切れがなく、あまりにも正面からの攻撃なので、よけられた。

次にランポスの噛みつきが来たが横に側転してよけ、起き上がりざまに鋭い斬撃を繰り出し、ランポスの首を落とした。

普通なら首が落ちたところで初心者吐き気に襲われるのだが、さすがに元リオレイアなので平気な顔をしていた。

「どお？」

「相手のすきを見分けることが大事だからね？」

「うん！」

と話している内にランポスが3匹追加していたが、ジーンが一人で始末していた。

エリア5に向かい、待っているとイャンクックが降りてきた。

「大きい!？」

「まあ、人間から見たらね」

ラグナがペイントボールを投げつけ、狩猟が開始した。

イャンクックはバインドボイスを発しないので、そのまま切り込む。斧モードで走りこみ、突くように切りつけ、上に振り上げた瞬間に剣モードに変形。

そのまま上から下に切り下ろす。これだけで耳が砕け、顔には深い傷が入った。

混乱しているのかイャンクックはその場で威嚇し始めた。

「セイヤアアアアアアッ!!」

イャンクックが頭を下げた瞬間、頭に剣モードのまま武器を突き刺し、威力を倍加させる。

そして最後に閃光が迸り、イャンクックは動かなくなった。ほとぼし

狩猟が終了し、ベースキャンプにゆっくり歩き出したラグナ。だが、

「おい、お前一人で狩ったら練習にならんだろうが、。。」

そうだった!と落ち込んでいるラグナに軽い風が当たった。

自然の風ではない。

何かが起こした風だ。

空を見ると青が降りてきた。

「イャンクック亜種だ!!」

「ちょうど良い」

「え？何？」

「さっきの立ち回り見てたでしょ？あれをマネて狩ってみて？」

「分かった！」

と、言ってもスラッシュアックスと双剣の立ち回りは違うし、さっきは力技でねじ伏せたただけだ。

今ラグナにできるのは閃光玉や音爆弾で援護するぐらいだ。

そして、イヤンクック亜種が地面に降り立ち、ルナに突進を開始した。

とっさによけるが、軽いかすめて体制を崩してしまう。

そして、突進しようとした瞬間に、ラグナが閃光玉を投げる。

「ルナ！閃光玉投げるから目をつぶって！！」

まばゆい光が放出して、相手の目をくらませるはずだった。

「なにこのデジャブ」

「お前には便利な力があって良いな。俺も瞬間移動ぐらいあったら良いんだけど」

瞬間移動と擬人化は別のカテゴリだろ、。

「まぶしいよー！！」

「また人間になった、。」

前と同じような光景が広がっていた。

青髪の少女が視力が回復しないまま歩きまわるのでこけている。

「ジン」

「こんなこともあるのかと服を持ってきてた!!」

「ナイスジン!!」

ルナに頼んで、服を着せてもらい、話をしようかと思ったのだが、  
どうやらこの狩り場には他にも大型モンスターがいるようだ。

「俺はちよつと始末してくる。ベースキャンプに行つててくれ」

「閃光玉は使うなよ?」

「分かつてるつて」

そのあと、閃光玉を使わずに、イヤンガルガとドスランポスを狩り、ベースキャンプに戻った。

中々、閃光玉を使わないとなると、初心に戻ったような感じがして中々面白かった。

そして、ベースキャンプに戻るころには空に雲が出始めた。

「なんか曇ってきたよ?」

「そつだね」

「あッ！ラグナが帰ってきたぜ」

エリア1のほうを指さしジライアが言った。  
そこにはラグナの姿があり、速足でちかずいてきた。

「どうなった？」

「また一人追加」

「よろしくお願いしましゅ／＼／」

天然？と思いながらあることに気が付いた。

「名前は？」

「ラグナが考えて」

「無いのね、分かった」

クツク亜種だろ？クツク、／＼、。  
いやクツクはなんか間抜けな名前だな、／＼、。

「リトとかは？」

「リト？」

「良い！かわいい！！」

「良いじゃねえか」

「どうかな？」

「かわいい！ありがとうございますー！」

「いやぁ、名前考えただけだよ」

そう言つてヘルムをとる。

「ほえ／＼／／」

「ん？」

「な。なんでもないです／＼／」

「早く帰ろう。なんか海も荒れてきた」

と、そこに一人の男がやってきた。

大きな船だ。

恐らくギルド関係者。

「大変だ！！今ここに鋼龍が向かつてる！！」

「クシャルダオラ！？」

「ああ！なぜかは分からないが、急激に移動を開始して、もうすぐそこまで来てるー！！」

「今から俺が狩ってくる。皆をジャンボ村まで送ってくれ」

「無理だ！！古龍だぞー！！」

「心配いらない。こいつはあの『破壊神』だぜ？」

その瞬間雷が轟いた。

男の表情が変わる。

「あんたがあ の、『破壊神』を破壊した男？」

「分かつたら早くしてくれ。これ以上海が荒れたら 皆の安全が保証できない」

「分かつた！！皆乗ってくれ！！」

皆が船に乗ったのを確認して、ヘルムをかぶり、歩き出す。

まともにやり合って五分五分の勝負。

今回はイヤンクックを狩りに来たので、準備が万端ではない。しかし、やるしかない。

英雄になりすぎた者は、皆の期待にこたえなければいけない。

「さって、お仕事お仕事♪」

鼻歌を歌いながら、明るくふるまい、嵐のテロス密林に入って行った。

自然災害に匹敵する龍のいる、密林へ。

## 鋼龍VS破壊神（前書き）

擬人化キャラクターを募集します！！

こんな駄作に、キャラクターを考えてくれる方、よろしく願います！！

## 鋼龍VS破壊神

この世界にたった2人だけ特別な能力を持った人間がいる。  
その1人、ラグナ・ジークフリードは自然災害に匹敵する龍と命の  
駆け引きをしている。  
命の削り合いだ。

「あつぶねえ!!」

彼のすぐ横を風の塊が通り過ぎ、岩の壁を砕いて止まった。  
あんなのを喰らったら一発で意識が持ってかれる。  
そうならもう、命は無い。

「いつまでも守りじゃイケねえよなあ!!」

相手はブレスを撃った瞬間硬直する。

その隙を狙って切り込む。

しかし、風の壁が邪魔で、うまく切れない。

なおかつ攻撃が当たってもそれ程ダメージを与えられない。  
いかに鉄壁の防御を崩すか、という飛竜種とは全く違う戦い方を強  
いられる。

「さて、そろそろ本気でいきますか」

そう言って、ブレスをステップひとつでよけ、背を屈めてちかづく。  
前転で距離を詰め、起き上がりざまに、剣モードで切りつける。  
ちょうど、甲殻に沿うように。  
少し、傷つき血があふれてくる。  
クシャルダオラは後ろに飛び、距離をあける。

こちらを確認すると猛然と突進してくる。

しかし、ラグナは前に進む。

ラグナはぎりぎりのところでよけ、すれ違いざまに斧の刃の付いていない部分でわざとクシャルダオラの頭を殴り、はじけた斧を弾かれた衝撃を利用、そのまま遠心力と自分の力を乗せ、通り過ぎるクシャルダオラの後ろ脚に切りつける。

甲殻や鱗をもろともせず、霸竜の素材を使った超重量の斧はいとも簡単にクシャルダオラの足を引き裂いた。

その巨体が倒れ、頭が地面に着くほど下がった。

「オオオオオオオオオツツツ！！！」

斧の重量と自分の力を存分に使い、∞の形に振り回し頭に切りつける角をへし折り、片目は潰れ、多数の傷が入った。

そしてフィニッシュの振りおろしで、大きな傷が入ると立て続けに、そこへ剣モードで突きを入れる。

一気に刃が体内に入り込み、クシャルダオラも雄たけびを上げる。

「悪いがここまでにさせてもらおう！！！」

傷口に柄の部分まで強引に押しこみ、レバーを引き属性を開放させる。

剣先から閃光が迸り、剣が唸る。

最終的に閃光から爆発に変わり、獲物の頭も、ただの肉の塊になった。

剥ぎ取りを終え、疲れが溜まりそのまま寝てしまった。

どのくらい経ったのか分からないが、一晩寝てしまったようだ。起き上がるうとした時お腹が鳴った。

「お腹すいた、。」

「じゃあ、なんか食べますか？」

「うん、頼むつて、ん！？」

あわてて声のした方を見ると、そこには何故か裸の猫耳少女が立っていた。

「誰？」

とてもシンプルな質問だった。  
閃光玉を使った覚えはないし、大体全員ジャンボ村に向かったはずだ。

「え？ここに住んでるアイルーだったんですが、貴方をベースキヤンプまで運んできて、タンカから降ろしたらいきなり光に包まれて、こうなっちゃいました。」

あわててポーチを見ると閃光玉の残骸が入っていた。  
恐らくタンカから雑に下したので、破裂したのだろう。

「なつちやいました。」とかつて言われても、ひとまず毛布で体を隠してください」

「いや、凄かったですね、昨晚の死闘！！」

「だから早く毛布を」

何故か目をキラキラさせてちかずいてくる自称アイルーに毛布を差

し出すのだが一向に気にせず、ラグナの手をつかんで語りだした。

「古龍相手にひるまず、逆に相手の硬さを逆手にとって相手の甲殻を砕く！！感動しました！！」

「あの、毛布を」

「で、私は決めました」

「分かったから毛布を」

「私もハンターに成ります！！」

沈黙。

「ということで、私を貴方のオトモアイルーにしてください！！」

ぺこり！と頭を下げてくるのだが、実際女の子をオトモアイルーにしているところを想像するより、自分がギルドナイトに血祭りにあげられているところが最初に頭に浮かんだ。

「今自分が人間になつてることに気付いてますか？」

「私人間なんですか！？」

「まあ、一応」

じゃあ、オトモアイルーになれないじゃん、。と落ち込んでいるこの子だが、この子は一体何がしたいんだ？

「人間なら本家のハンターになれば良いんじゃないの？」

「その手があったか!!」

と、一瞬立ち直ったが、また落ち込み始めた。

「貴方と一緒にないと狩りに出ても意味ないじゃん、」。

「なんか言った？」

「なんでもないです!!」

じゃあ、何か方法は、。  
ん？待てよ？

「なんか既に付いて来ることになってない？」

「もちろん貴方に付いてきますとも！もちろん!!」

「まあ良いけど、名前は？」

「仲間からはツカイツパと言われてました、大佐!!」

「多分それは君の役割だから」

「じゃあ、なんか親からシャロンと呼ばれてたような気がします」

「俺はラグナ・ジークフリードよろしく!!」

「よろしくお願いします」

「じゃあ、ひとまず毛布を巻こうか」

そして村に帰ると村人のほとんどが暖かい歓声で迎えてくれた。

この辺一帯は緊急避難警報が発令されていたらしい。

しかし、ラグナが狩りに出ていると聞いたら誰も村を出なかった。それ程信頼されている証でもあった。

そして、ルナが泣きながら走ってきたので、暖かく受け止めてやった。

ただいま！と。

## 鋼龍VS破壊神（後書き）

なんか終わっちゃったような雰囲気だけどまだ終わってません！！  
まだまだ続きます！！

## 緊急通達（前書き）

擬人化キャラ まだまだ募集中でし。

## 緊急通達

3人が狩りにも慣れてきたころ、その知らせはやってきた。

この頃ジャンボ村も暖かくなってきた。

温暖期がचाかずいてきたのだ。この村は川に囲まれており、自宅の裏の土手で釣りができる。

今はそこにジンと2人である。

シャロンとルナ、リトは着々とギルドポイントをため、街に出しても恥ずかしくないほどに成長していた。

「この頃、なんかもの足りないな、。、。」

目をつぶっていたジンがいきなり話しかけてきた。

てっきり寝ていると思っていたので竿を落としそうになった。

「どうした？ いきなり」

未だに竿が曲がらないラグナは話のほうに意識を向けた。

「だってこの頃あの3人の訓練とか、昇格試験とかで中々俺達に見合った獲物を狩ってねえじゃん」

ハンターには昇格試験らしい依頼が、一定の質力を認められたら届く。

その依頼を達成しないと、次のハンターランクに上がれない、というシステムだ。

「確かにそうだな。でも、いきなり下級ハンター3人を強力な飛竜

の前にほつり出すわけにもいかないだろ？」

「まあ、そうだなあ」

ジンの竿が少し動く。

次の瞬間激しくしなる。

「でも、あの3人も初心者ってわけじゃ無いんだから、簡単な依頼を3人で行かせたらどうだ？」

立ち上がって、体全体で竿を引くジンを横目に自分の竿を見た。  
ピクリとも動かない。

「もうじき良いかもね、それも。そしたら2人で狩猟に出れるもんね」

「そういうこと、、だッ!!」

やっと釣り上げたジン。

釣れたのはカクサンデメキンだった。

拡散弾LV3や大タル爆弾Gなど作れる、中々の必需品だった。

「じゃあ、さっそく言って来るね」

「おう！任せたぞ！」

家に帰ると、何やら中が騒がしい、。  
少々不安が残っていたが、家に入る。

「ただいま、、。」

「ええ〜!？」

「人はみかけによらないのです、ですです」

キッチンからがやがやと声が聞こえる。  
無性に良いにおいがする、

「ジライア〜!居る〜?」

家の奥に向かって叫んでみたが、なぜかどたと複数の足音が聞こえてくる。

そして、アイルー4匹+元モンスター3人が走ってきた。

「ちょっとこっち来て!!」

「ん?どうした?」

ルナが強引にラグナをキッチンに引きずって行く。  
リトがアワアワしている。一体何があったんだろ?

キッチン

そこにはいつもアイルーがいつも作っている料理より、さらに豪華な料理が並んでいた。

「凄いな!! 三匹とも、今日はなんかの祝日か!？」

元気の無い、見慣れたキッチンアイルーが何故か身支度をしている。

「やっぱり、猫は人間にはかなわないのかにや、」。

「ご主人 今までありがとうございましたにや。良いコックさんを見つけたにやね、。。」

「僕たちはこれから 猫ばあのところに行つて くびになつたつて報告してくるにや、。元気でにや、。。」

ひとまず家から出てこうとしていた三匹を捕まえて キッチンにほつりこみ 鍵を閉める。

「まずは 説明してくれる?」

「あのね 最初は私とシャロンで、。。」

ルナが最初から話し始めた。

数時間前

「ねえ 人間の女の子つて皆狩りばつかしてるの?」

シャロンとジライア ルナがカウンターで飲み物を飲みながら雑談を繰り返している。

「人間のおんにやの子は狩りなんてしないにや」

衝撃の事実発覚!!

愕然とするルナを放置してシャロンが続ける。

「じゃあ 何してるのです?」

「うん、。お料理、とかかにゃ？」

いつの間にか回復したルナが料理の話にがつついてきた。

「それができると男の人に気に入ってもらえる？」

何故かにやにやしているジライア。

そして、白々しくこう言う。

「確か、ご主人は家庭的な女の子が好みって言ってたような気がしないわけでもないにゃ」

「家庭的？」

次はシャロン。

少し興味があるのか真剣に聞いて来る。

「掃除・洗濯・料理、とかにゃ」

なるほど、メモメモと何気にメモをとっているルナに対し、シャロンは余裕の笑みで食ってかかった。

「それぐらい当然ですよ」

「なにおう！！」

「いつも料理や洗濯、掃除など押し付けられていましたからね！！」

なぜにドヤ顔？

ジライアはそつと耳打ちした。

「このままだと、ご主人はシャロンのことがお気に入りになるかもにゃ〜」

「それはさせぬ！！ちょっとキッチン行つて来る！！」

これは面白いことになってきた、しめしめ。とジライアがルナの後を追う。

そのあとにシャロンがスキップをしながら追う。  
途中でこけたが、。。。

キッチン〜

「おやめください、ルナ様！！」

「無理です！！」

「最初から出来るほど料理は甘くありません！！」

「ええい！うるさい！どけ、この無礼者！！」

すっかり信長気分を味わっているところに何故かおでこを抑えたシヤロン登場。

「敵はキッチンにあり！！」

貴様は明智光秀か！！と内心ビビってるジライアだが、面白そうなのでそのまま居ることにした。

「全く、何やってるんですか？」

「ね、猫耳！？」

「同じ匂いがする！！」

「まさか、新しいキッチンアイルー！？」

その後、見事な手つきで、猫三匹で作る料理を軽く圧倒した料理を作ったシャロン。

おかげで、キッチンアイルー解雇されたと思った。と、言うことらしい。

「誰に気に入られたかったの？」

その場の空気が凍りつく。

今で分からなかったのか、お前は！！という空気だ。しかし

「さ、さあねえ？」

必死にごまかそうとするルナ。

シャロンは既にどこかに逃げ去っていた。

「ねえ、だれ？」

「緊急です！！」

シパアン！！とドアが砕けかねない勢いで開いた。ドアの向こうには、ジンとパティが立っていた、

「おいラグナ！ドンドルマが老山龍ラオシャンロンの通行ルートに当たつたらしい。二週間後に防衛戦があるから、お前と俺指定で依頼が来てるぜ？」

老山龍とは、全長70Mオーバーの歩く山のようなモンスターだ。

その、通行ルート上に村や街があると、通行するだけでも大きな被害が出る。

それを防ぐのが砦だ。

通行ルート上に砦を建設し、通行ルートを変えさせる、または引き返させる。

そして、出来れば討伐する。というものだ。

その、砦の防衛戦に参加するよう、要請が来たのだ。

「もちろん行くさ！！2人は留守番頼む！！リトにも言うておいてくれ！！」

リトはボウガンを使っているため、弾の買い出しや、必需品を買いに行っている。

そう言つて、荷物をまとめると、すぐにジンと2人でドンドルマに向かうための船に飛び乗ってしまった。

と、言つても一本でドンドルマまで行く船はまだ出ていない。

なので、少し遅れてもすぐに追いつくと、ラグナから聞いたことがある。

そして、3人も支度を整え、パティにあることを聞いた。

「防衛戦つて、公式な依頼出てる？」

旅路の途中で（前書き）

擬人化キャラ募集中でし！！

## 旅路の途中で

揺れる荷台に運ばれること二日。

特に天候も崩れることもなく、雨も降らずに船から降り、途中でドンドルマに向かう商人の竜車に乗せてもらい、ゆつくりドンドルマに向かっている。

まだまだ、ラオシャンロン老山龍が街を通過するまでには時間がある。

ゆつくり昼寝でもするか、と思いつつながら空を見上げる。

青い空、白い雲、そして赤い雄火竜リオレウス！！

「ん！？」

慌てて確認する。

悠々と空を飛び回る雄火竜リオレウスはこちらを見据えながら大きく迂回して、戻ってきた。

どうやら竜車を引いているアプトノスを狙っているようだ。

「リオレウスだ！！ 貴方は隠れていてください。行くぞジン」

「久しぶりの相手だな！！」

「が、頑張ってください」

商人を近くの岩場まで避難させると、2人でリオレウスに立ち向かう。

先ほどまで大人しかったアプトノスが急に暴れだした。

危険を察知したのだろう。

それに合わせて商人も悲鳴を上げる。

商人にとって商売道具と商品を積んでいるあの荷台は命に等しいほ

ど大切に違いない。

「それならなおさら守らなくちゃ!!」

商人のほうに煙玉を投げ、商人の安全を確保する。

そしてジンが前に出て、リオレウスの様子をつかがう。

「おい! 降下を始めたぞ。もうじき奴の蹴りが来るぞ!」

「分かった!!」

急いでジンのところまで駆けつけると、一瞬リオレウスを見て、また商人のほうを向いた。

リオレウスの飛行からの蹴りは一直線上に長く進む。

と、言うことは商人とラグナ達が一直線上に居る場合、どうにかして、雄火竜を止める必要がある。

そして、皮肉なことにこのままリオレウスが降りてくればアプトノスと荷台はばらばらになる可能性が高い。

「やばい! このままじゃ荷台が粉みじんになるぞ!？」

「閃光玉で止める!!」

そうやっていきなり走り出したラグナ。

滑るように滑空してくるリオレウスに閃光玉を投げつける。

そして、まばゆい光に包まれる。

2人は自分の目を焼かないように目をかばうが、一瞬の隙が出来た。

「ソゲフツ!!」

「うう、。。」

ラグナに頭突きをするようにして、空から少年が降ってきた。頭突きをお腹で受け止めたラグナは意味不明は言葉を発してその場に倒れこんだ。

「おいおい、。。」。また閃光玉で人になりましたってか？」

ジンが呆れた様子で近づいてくる。

お腹を押さえながら立ち上がったラグナはかなり表情が厳しかった。

「今日の朝のリュウノテール、戻しそう、。。」

「分かった分かった。まずはその坊主を運べ」

何度か吐きそうになっていたラグナだったが数分で収まり、少年を荷台に乗せた。

そこで、不思議に思ったことが、

「商人の人は？」

「そっぴゃあ、みかけねえなあ」

先ほどの岩場まで戻るが、やはり居ない。

岩場の後ろが森になっているが、森に隠れたのだろうか？警戒しながら森に入ると、商人の声が聞こえてきた。

「ひッ！ひい、。。」

何かに脅えているようだが、どこに居るのか分からない。

「何処に居るんだあ？」

「ちょっと探してみよう」

少し奥まで行くと商人がうずくまっていた。  
所々傷があつたが無事のようにだ。

「あんた達、助けてくれえ！」

今にも泣きそうな顔をしている。  
よほどのことが有つたのだろう。

「何が？」

「影が！影が動いてるんだ！！」

すると、ラグナの後ろで何か動いた。  
ラグナが振り返っても何も居ない。  
ジンも警戒態勢に入る。

「なんだ？」

「分からない」

2人は少しずつ離れていき、周りを調べ始める。  
鋭利な刃物で切られたような木。

そして、ジンがふと森の奥を見ると、二つの赤い光が漂っていた。

ナルガクルガ  
「迅竜！！」

そういうと、ジンは身を伏せた。  
それと同時にジンが確かめていた木が斧で切り倒されるように倒れた。

体のつくりは原種、ティガレックスなどに似ている。

迅竜の翼には太刀のような得物が付いている。

あんな物を当てられたら、真っ二つになってもおかしくない。

「ラグナ、商人を安全なところに!!」

「分かった!!」

ジンがナルガクルガを抑えている内に商人を荷台まで走らせる。

そして、ジンのところに駆け付けたが、なすすべも無くただ翻弄されているだけだった。

「閃光玉で!!」

「まで!これ以上人間にしてどうする!! お前が面倒見なくちゃいけないんだぞ!？」

「ジンや僕の命には代えられない!!」

「、、まあ、お前の稼ぎだったら楽勝か、、。」

ニヤリ、と笑いそういうことだ、と言っ言葉と閃光玉を放つ。

まばゆい光を発してナルガクルガを光で包む。

そして2人が目をあけると、気絶した少女がまた、倒れていた。

旅路の途中で 弐（前書き）

今回はナルガ娘中心の話です。

## 旅路の途中で 弐

「ああ、腹減ったなあ」

意識が戻り通ある。

誰かが誰かと話しているのが聞こえる。

「しょうがないよ。一気に人数が増えたんだから、節約しないと」

「でもよお、草食竜ぐらい狩っても良いじゃん」

「そうすると、このアプトノスが暴れるのでやめてもらえますか？」

と、言う会話が聞こえる。

張りついたように開かないまぶたをあけると、誰かの背中だった。兜はとっているが、鎧を着ているらしく、ごつごつしている。

「だれ？」

思わず声が出た。

たしか人間3人を相手に戦っていたはずだ。

その内の一人が光る玉を投げ、そのまま意識が無くなった。

「おお、やっと起きたか。もうチョイで街に着くから待っていてくれ」

見知らぬハンターはそう言った。

「ジン人に優しくするなんて珍しい!!」

光る玉を投げたハンターが話かける。

「うるせえ！」

少し照れながら自分を運んでくれているハンターが答える。  
この二人は仲が良いらしい。

「腹減ってねえか？」

「少し、い。」

なら、ちよつど良い、と自分のポーチから干し肉を出して、全部く  
れた。

中々お腹が減っていたのでおいしかった。

食べ終わったところを見計らって赤髪のハンターがこう言った。

「今、自分が人間なのにきずいてる？」

「え？ 人間？」

「やっぱりきずいてなかったのかあ、い。」

何やら意味深長になにか言っているが、よくわからない。

「俺はジン、で、あっちの優男がラグナ。そんでもって、ラグナの  
ちっこくなつたみたいな奴がリオン」

ジンと言う人に言われてきずいたが、ラグナという人のそのまま小  
さくなつた人が居る。

唯一違うのが、背の小ささと髪形だけ。

「よろしく、。。」

もともとそういう性格なのか、人みしりをするタイプなのか分からないが、あまり話さなかった。

「君はこれからどうする？」

「どうするって？」

「どうするかってのは、このままラグナにお世話になるか、適当に知識を付けて自分一人で生きていくかってことだ」

この後どうするか？

このまま一生モンスターに戻れないのか？

それならこの人間について行くのが無難だろうなあ。

「貴方について行きたい、。。」

「ん？ 俺え！？」

「ちょうど良い、ジンが面倒見てあげれば？ 家じゃあ家計が苦しいからさ」

「嘘つけ！！お前、超稼ぎ良いくせに！！」

さあ、知らないなあ？とトボケるラグナに殴りかかろうとするが、元ナルガクルガの少女が乗ってるため腕が使えない。

「それを言うならジンも稼ぎ良いじゃないか！」

お前と比べたらカスみたいなものだろ！と反論していたが、ラグナには勝てないと判断したのか、急に元ナルガの少女を説得にかかった。

「俺ほど一緒に居て面白くない人間は居ないぞ？ ヒマな時はいつも釣りが昼寝だし、掃除できないし、飯はなんとか作れるけど、そんなにうまくないし」

「それでも良いよ？」

「良いじゃないか！な？この子もこう言ってることだし」

分かったよ、。としつぶしつぶ了解しているジンを見ながらホッとしているといきなりジンが切り出した。

「名前は何か良い？」

「名前？」

何それ？と聞き返すと答えるのに困っていたが、なんとなくわかるように説明してくれた。

「自分で決めるか？」

「あんま分かんないから、ジンさんが決めて」

「決めてやるから、さんって言うな」

そんなことを言いながらラグナと名前を決めてくれているジン。

ラグナは気の良い人で、ジンは言葉使いはちょっと荒っぽいけど、心は優しい人だった。

「よし、決まったぞ！」

「うん？」

よくわからない返事をしていたが構わずジンは続ける。

「名前はナルだ。良いか？」

「ナル、。、。ありがとッ！」

「よし、あとちょっとだ」

照れ隠しに前を向いているジン。

荷台は荷物でいっぱいなので、皆歩いていた。

かなり歩き日も暮れてきたところに不幸にぶち当たった。

「ランポスの群れだ」

「ああ、しかもリーダーが2匹も居やがる、。」

普通、ランポスの群れはリーダー、ドスランポスが一匹だ。しかし、なぜかこの場所には2匹居る。

テリトリー争いなのか、群れを大きくするためなのか分からないが、ここにハンターが出ていくと全モンスターの敵意はハンターに向けられる。

だが、ジンとラグナは一人でもこの状況を打開出来る実力の持ち主

だ。

なぜここまで足止めを嫌っているかと言うと、もちろんハンター以外の人間が3人も居るからだ。

一人で狩るのと、誰かを守りながら狩るのは難易度が全く違って来る。

しかも、ランポスはチームワークが良いモンスターとして知られている。

余計に厄介だ。

「どうする？」

「ここは俺が気を引くから、お前らが先にいけ。後ですぐ行く」

「分かった。ありがとう」

「気にすんな。困った時はお互い様だろ？」

そう言っただけでナルを背中からおろすと、兜をかぶりなおし、ランポスの群れに突っ込んだ。

次の瞬間にはすでに数匹のランポスを仕留めていた。

「ウリアアアアッ！！」

遠心力をたっぷり乗せた黒光りする鋭利な長剣が次々ランポスの命を狩り取って行く。

「今の内に！」

ラグナに手を引かれて、その場を走り抜ける。  
闘志漲るジンの背中を見ながら。

そして、数分走ると2、3匹追いかけてきたがラグナが切り捨てた。ジンのことが心配になったがラグナいわく、あいつの腕はランポスごときに遅れをとるようなもんじゃない！だそうだ。

安心していいのか心配した方がいいのか分からないが、ジンを信じよう。

旅路の途中で 参（前書き）

ジン中心のお話です。

## 旅路の途中で 参

「なんか変なのひき取っちゃったなあ」

ランポスの群れに向かいながらつぶやく。

今までは好きな時間に起き、好きな時間に飯を食べ、好きな時間に好きなことをして生きていたが、家に誰か増えると、そいつの時間に合わせなければならぬ。

「ま、いつか一人暮らしも飽きてきたころだし」

自分の好きな時に好きなことをやれるのは良いが、話す相手も居ない、というのがさびしかった。

アイルーを雇う、という手もあったがアイルーに家事を任せっぱなしというのも少し気がひけたので雇っていない。

「はあッ！」

走っていた足を止め、背伸びをするように太刀を背中から抜き、その勢いをそのまま斬撃に回す。

振りおろし、突く、後ろに飛びのきながら横に切る。

これでやっと数匹仕留めただけだ。

「一回使ってみるかあ」

次は閃光玉を投げ、周りのモンスターの動きを止める。

ラグナのように人間にはならなかった。

ランポスは目がくらむとその場でふらつくだけの種類だ。狂暴なモンスターになると動きまわるモンスターもいる。

ふらついているランポスは無視し、自指すはリーダー、ドスランポス。

横から二回切りつけ、剣をひねりながら突く、そのまま跳ね上げるように左上に切り上げる。

ここで、ジンの闘志が最高に高まった。

「セイヤアアアッ!!」

雄たけびを上げ、鬼人斬きじんぎりを放つ。

右から左にかけて遠心力をたっぷり乗せた刃がドスランドスに襲いかかる。

次は突き、左から右にまた、会心の一撃をお見舞いする。跳ね上げるように右下から左上にかけて斬りつける。

そのあと、一瞬で二度斬りつけ大きく振りかぶり、縦の一閃。

それで一匹目のドスランポスが崩れ落ちる。

普通ならここで終わる鬼人斬だが、ジンは止まらなかった。

体を思いきりひねり、大きく足を踏み出す。

そして、次の瞬間、自分を中心とした刃の渦が一瞬の内に十数匹のランポスの命を狩り取った。

大回転斬。

この地方では使われていない技だ。

ラグナのスラッシュアックスと同様、違う地方の技だがラグナが違う地方の太刀の秘伝書を取り寄せてくれた。

その結果、この技を会得したのだ。

「ふう、。目が回った、。」

慣れねえ技は使うもんじゃねえなあ、と言いつつもかなりの数を一撃で減らしたこの技は中々使える。

しかし、この技は勢いを付けすぎるため、一度剣を鞘さやに戻す必要がある。

その一瞬の隙にもう一匹のドスランポスが飛びかかってきた。

「ゴフツッ！」

言葉にならない痛みが横腹を駆け抜ける。

ギアギアとうるさいランポスの鳴き声を聞きながら立ち上がる。しかし、立ち上がった瞬間、空が曇った。

「あん？」

上を見ると、大量のランポスが飛びかかってきていた。空が見えないほどに。

「そりゃツねえだ、ろツ！」

前転を三度繰り返し、どうにか安全地帯まで逃げたが、まだまだランポスは残っている。

これだけの数をまとめるには、リーダーがいなければ不可能だ。早くドスランポスを仕留めなければ徐々に体力を削られて、最後には命まで落とす危険がある。

「オラアアア！」

周りのランポスを仕留めつつ、ドスランポスの位置を確認する。群れの中心にいるらしく、赤いとさかが群れの中心に出てる。

また、閃光玉を取り出し、周りのランポス動きを止める。

「早く終わらせてドンドルマに行くんだよッ！」

ドスランポスまで駆け寄り、頭を真正面から切り裂く。  
頭のとさかが裂け、鱗が逆立つ。

続けて鬼人斬を頭に叩き込み、大回転斬。

目が見えるようになったドスランポスはジンを追いかけてくるが、  
動いた瞬間、頭が落ち、そのまま動かなくなった。  
リーダーを失ったランポスの群れは散り散りに散って行った。

「目が回る、。、。」

大の字にその場で倒れたジン。

ポーチから回復薬を出し、一息に飲み干す。  
少し経てば体は楽になっているはずだ。

「ああ、ラグナに追いつかないといけないのか」

ドンドルマに向かっていているはずだが、相手は竜車。  
走って行けばすぐに追いつくはずだが、今走るのは無理がある。

「どっこいしょッ!」

もう年かな?とぼやきながら立ち上がり、ラグナ達が行った道をた  
どって行く。

道と言っても雑草がない部分が延々と続いているだけだが。  
少し行くと、誰かが戻ってきた。  
ナルだ。

「大丈夫!?!」

かなり息切れをしていて、足もふらついている。

「いや、お前のほうが重症だろ、。。。」

「だ、大丈夫、。。。」

「しょうがねえなあ。ったく」

ナルをおぶるとまた歩き出した。

ジンも相当疲れているはずなのに、何事も無いように歩き続ける。

「あの、。。。」

「ん？」

「ケガとか無い？」

「大丈夫だってえの。心配してくれてありがとな、。。。」

「うん」

実は内心こいつが死ぬと色々困るからなのだが、。。。

何故かずっと心配してくるナルだったが、少し経つと寝てしまったらしい。

「ああ、なんか変なのひき取っちゃったなあ」

そのあと夕方にはラグナ達に追いつき、ドンドルマに向かい始めた。  
後、二日。

なにも起きないことを願っていた。

## 旅路の途中で 終（前書き）

今回はすんげえどうでもいい話なので、ヒマな方だけどうぞ。

## 旅路の途中で 終

ジャンボ村を出て一週間。

今日の夕方にはドンドルマに着く、というところまで来た。しかし、ここで奴らに追いつかれてしまった、。

「やっと追いついたあゝ!!」

「早すぎますよ」

「このくらい楽勝なのです!」

どこぞの竜車に乗ったルナ達に追いつかれてしまった。実際追われていると思っていなかったが、なんでここに三人が居るのか不思議だった。

「なんで追ってきたの?」

「てめえら家で待ってるって言っただろ?」

何故か怒っているジン。

三人に驚いてナルはジンの後ろに隠れてしまった。

リオンもラグナの隣にぴったり張りくっついていてる。

「なあ! その少女?」

女顔のリオンを見て混乱しているシャロンにジンが教えた。

「こいつは男だ」

「じゃあ 少年！そこは本来私のポジションなのです！！」

「何言ってるの？アタシのポジションにきまつてるんだから！！」

2人が醜い争いをしている内にナルとリオンにあいさつを済ませたリトがもう一方のラグナの腕に抱きついた。

そのまま ラグナ達が乗っていた竜車のほうに三人も加わり、計七人になり、かなりにぎやかになった。

「ねえ、リオン君って元は何だったの？」

「、、リオレウス」

一応答えたが、相手が少し耳が悪ければ聞こえないほど、小さい声だった。

「リオレウス！？ すごい！」

リトは元イャンクックなので耳が良い。

恐らくモンスターの時の特徴は引き継がれるようだ。

「べ、別に生まれたのは偶然だから、凄くないよ／＼」

「偶然でも凄いです！ 空の王者ですよ！？カッコ良いです！！」

リオンが仲良くやれそうで安心しているラグナ。

心をふさいでいたので、皆とうまくやれるか心配していたのだ。しかも、リトに少し気があるようだ。

「良かった良かった」

「お前は何一人でニヤついてんだ？」

いつの間にかジンが近くまで来ていた。

隣には手をつないだナルが居た。

「ジンもナルにメロメロなことだし、良かった良かった」

「お、おい！！俺は別にメロメロじゃねえ！！」

ラグナに殴りかかろうとしていたジンだったがハッ！となってナルを見る。

「ジン、は私、のことが嫌い、の、なの？」

半泣き状態でジンの袖を握っているナルが居た。

「い、いや、そう言う訳じゃねえけど、ここでお前のことを好きって言うってロリコン扱いされるし、嫌いって言うって女の子を泣かしたうんぬんかんぬんってことになるだろ？だからえーと、うーんと、」

完全にパニックってるジンを放置し電車の開いているスペースに飛び乗った。

もうじきドンドルマに着く。

「ジン、そろそろ降りる支度しといたほうがいいよ」

「おう、分かった」

その後すぐに街に着き、まずは宿を探す。  
数ある宿の中から、そこそこの宿に決めた。

「じゃあ、明日から三日間は自由行動だから」

皆に明日からの予定を告げて、自分の部屋に入る。  
ちなみに2人部屋を3部屋とったが、ジンが余ってしまったので彼は一人部屋をとって部屋に入って行った。

「で、ハンターにことにしたんだね？」

ラグナ&リオン部屋の「コマ」。

「うん」

リオンがうなずく。

「じゃあまずは、ジャンボ村に帰るまでドンドルマで腕を磨くといいよ。ここなら初心者ハンターが沢山居るから、自分と同じぐらいの実力を持ったハンターを組むことで、連携の基礎を学ぶんだ」

ハンターには基本的に上下関係は無いが、ハンターランクHRが低い者はランクの高い者に敬意を示すのが暗黙のルールになっていた。  
もちろんランクが高い者はより強力なモンスターと対峙することになる。

反対にランクが低い者は簡単な依頼しか受けられない。  
ハンターの安全と、向上心を持続させるやり方だ。

「でも、武器は何にすれば良い？」

武器と防具はポリシーが無ければ命に等しい物だ。  
安易に人に聞くことは命取りだが、最初はどのようなも  
なく、武器は限られてくる。

「最初はハンターシリーズ、武器は自分がこれだ！って思っ  
た武器が一番だと思うけど」

「、、大剣が良い」

「良いねえ。まだ僕の周りで大剣使いは居ないから我流で狩り  
の流れを作らないといけないけど、パーティの攻撃の中心になる武器だ  
から、流れト立ち回りは自然と体が覚えるよ」

「、、うん」

最終的に武器は見つかったバスターブレイドを持たせ、見た目は  
それっぽくなってきた。

「なんか話が盛り上がって眠気が無くなっちゃったなあ」

「うん」

その時ノックが聞こえた。

ラグナがドアまで行き、外をのぞくとジンが居た。

「あれ？ どうしたの？」

「久しぶりに酒飲みにいかねえか？」

どうやら旅の途中には酒を飲めなかったのがかなり負担だったらしい。

「良いねえ。リオンはどうする？」

「、、行く」

「よし、じゃあさっそく酒場に行こうぜ」

三人は一度宿を出て、酒場に向かった。

適当に注文した料理を食べながら、夜遅くまで話していた。その夜は久しぶりに、夜が更けるまで語り合った。

## 仲間作り（前書き）

今回はリオンのお話です。

## 仲間作り

対老山龍戦を一週間後に控え、街の空気がピリピリしている。しかし、緊張しているのはこの街でも中堅クラスのハンター達。達人は自分の実力を把握し、他のハンターと協力すればこの街を守りぬけることを知っている。

初心者には防衛線に参加させてもらえないので、自分の部屋で寝てようが、特産キノコを採っていようが関係ないのである。

そして、今リオンが居るのが初心者区。

一部を除いてHR1〜30までのハンターが集まる場所だ。

一部と言うのはHR500以上のハンターが出入りすることがある。なんでも秘伝書を使い、新たな技の領域に達したものが初心に戻って自分を鍛えなおすんだとか。

リオンは初心者なので、簡単な依頼を仲間を集って居るのだが、自分と気の合う仲間を探すのは難しい。

なおかつ気が合っても連携がうまくとれなければ意味がない。

最終的に気が合い、連携が取れる仲間を探さなければいけない。知り合いなら細かいことは大丈夫なのだが。

「、、、、ふう」

リオンの手の中にある紙には、初心者集めれ！一週間組める仲間募集！とかいてある。

それを壁に貼り付ける。

少し待てばこの紙を見た人が声をかけてくれるかもしれない。

なるべく掲示板の中心に張りくつつけると近くのテーブルに着き、飲み物を頼む。

今までは他者と話すのは好きではなかったが、人間になってからは話すのがだんだん好きになってきた。

空を飛ぶ時はずっと一人、暮らしていくのもずっと一人、特に仲間も欲しいと思つたクトも無かつた、自分を超える生命に遭遇しなかつたからだ。

そんな中、一人の青年に出会い、一人の心ひかれる少女に出会つた。他の皆とも出会い、沢山話もした。

皆と居る楽しさを教えてくれた皆の力になりたい。そう思いハンターになつたのだ。

一刻も早く腕を上げて、一流のハンターにならなければ。

「すみませえん」

ハツと顔を上げるとそこには2人組のハンターが居た。2人とも落ち着きが無く、少し周りを気にしている。

「張り紙を見たんですけどお」

「ああ、張り紙を」

考え事をしていたためすっかり忘れていた。

改めて2人を見ると、自分と差が無いハンターだと分かつた。

最初に話しかけてきたハンターはチェインシリーズ。

読んで字のごとし、鎖帷子<sup>くさりかたびら</sup>を基本とし、急所には鉄板<sup>プレート</sup>を付けた防具だ。

武器はカギズメ状の片手剣、アサシンカリング。

2人目はレーザーライトシリーズ。

こちらはいかにも鎧といった感じの防具だ。

武器はハンマー。

金属製の棘が複数着いたハンマーだ。

確かスパイクハンマーとか言つたハンマーだ。

「貴方があの張り紙の主ですか」

ハンマーのハンターがこちらを見ながらつぶやく。  
話しかけているというより独り言だろう。

「初心者歓迎って書いてあったんですけどお、私達でも大丈夫ですかあ？」

「大丈夫ですよ？ 何か不安定要素でも？」

「いえ、初心者すぎるかなあって思いましたえ」

話し方によらず気を使うタイプらしい。

「さっきの張り紙の主はお前か？」

2人の後ろから2人の男がちかずいてきた。  
大きな体系に似合った防具を付けた2人組だ。  
一人はディアブロシリーズにティタルニア。  
砂漠の暴君の角を使った防具に桜火竜の大剣。  
もう一方はグラビシリーズにレックスハウル。  
強固な鎧竜の防具に絶対強者ティガレックスのヘビィボウガン。  
2人ともかなりの腕だ。

「何か用ですか？」

リオンが尋ねるが何を分かり切ったことを聞いているんだ、と言う顔で聞いて来る。

「初心者歓迎って書いてあっただろ？」

ディアブロシリーズの男が最初に話し始めた。

「だから来たんだが、そのパーティだとなあ」

三人を見降ろして笑っている2人組。

どうやら自分たちより下級のハンターの手伝いはしないハンターらしい。

しかし、。

「君達こんな奴より俺達と組んだ方が良いよ」

「そうそう、ギルドポイントも早くたまるし。俺達と組まない？」

いきなり2人を引き抜こうとするが2人は動かない。

「お断りしますう、すいません」

「私もお断りです」

2人もやはり連携目当てでパーティを探していたらしい。  
リオンはホッとしたが男2人組はイラつき始めた。

「良いから来いよ」

「こんな奴よりは断然いいぜ？」

強引に引き抜こうとする。

だが、やはり2人は動こうとしない。

「良いから来いって言ってんだろ!!」

とうとう怒りだしたディアブロシリーズの男。

「ははッ！おい見ろよ。ロリコン野郎がナンパしてるぜ!!」

「今の君にはその言葉は自分にも刺さるんじゃないの？」

聞き覚えのある声が二つ。  
ジンとラグナだ。

「あれ？ リオンじゃないか。どうした？」

ラグナがリオンにちかずいた時、周りの空気が変わった。  
初心者区はハンターランク1〜30と500以上でなければ入れない。

と、言うことは500以上ということになる。

「おい、あいつ見ろよ。確か破壊神を破壊した男だぜ？」

「そうだ、ラグナ・ジークフリードだ」

周りから話し声が聞こえる。  
よほどラグナは有名ならしい。

「何だお前？」

ディアブロシリーズの男がラグナを見てすごむが第三者から見れば一方的にディアブロシリーズの男が押されているようにも見える。

「ごめん、その子も嫌がつてるみたいだし、勘弁してくれない？」

ラグナの鋭い眼光で睨まれた男2人はその場を走って逃げだした。

「なんでてめえだけ有名人なんだよ」

ジンがつまらなそうにその場を後にする。

そのあとを追いかけてラグナも居なくなる。

まるで嵐が通り過ぎたようだ。

「今の人お知り合いですかあ？」

今まで脅えていたハンターが聞いて来る。

「そうだ。僕の兄貴みたいな人だよ」

「ララ」

「ん？」

何かを言ったので慌てて聞き返す。

「私の名前はあララ。よろしくですう」

続いて後ろのハンターも名乗った。

「リンだ」

「リオンです。よろしく」

仲間は三人。  
後一人を待っただけだ。

打倒 大怪鳥イヤンクツクー!! (前書き)

リオン中心のお話です

## 打倒 大怪鳥イヤンクックー！

「ふう。やっと着いたかあ」

独特な形の防具をまとったハンターが岸边に船を固定する。

「長かったですねえ」

ララが船から降り、自分の荷物を下ろし始める。

それを後ろから手伝うリン。

どうやらこの二人は仲が良いというより、何かの上下関係があるらしい。

「らしい」と言うのはまだ詳しいことは聞いていないためである。

「おいリオン！早く支給品わけちまおうぜー！」

そして彼女。

独特の形の防具をまとったハンター。

名前はルウと言っらしい。

防具はボーンシリーズ。モンスターの骨をそのまま防具にした感じだ。

武器はライトボウガン。初心者向けのクロスボウガンだ。

「この近くにラグナの村が、。。」

この日、ギルドの船に乗せてもらったため、三日で着いた。残りは三日。

しかし、ラオシャンロンのことがあるので迎えは制限時間を過ぎても来ない。

代わりにジャンボ村で待避せよ、らしい。

「ラグナって誰？ お前の女？」

知識の乏しい初心者ハンターのルウやララ、リンにはラグナの名前を出しても分からなかった。

そこで一度ジャンボ村に立ち寄ってもらい、ラグナを紹介したかったのだ。

いや、本当はラグナに初めての仲間を見せたかったのだが、。

「僕の兄貴ってとこだよ」

それだけ言々と自分の荷物をまとめると支給品をポーチに入れ、みんなの支度が終わるのを待った。

「じゃあ、始めましょう」

先頭がリン、次にリオン、ララ、ルウの順番で並び、密林に入って行った。

まずはエリア1と言われるエリアに入る。

坂道を登りエリア2に。

エリア2は広い場所で良く大型モンスターもあらわれるが、今は姿が見えない。

左に曲がり、また坂道を登る。

次はエリア5だ。

ベースキャン  
ここはBCから来れるが、断崖絶壁を登らなければいけないのでやめた。

イャンクックはエリア1にもエリア2にも行く可能性もあるからだ。  
まあ、ララが登れないと駄々をこねたからなのだが、。

「ここにもいないですねえ」

「そうだな。始めたばっかだ。時間はまだまだある」

そう言つて洞窟に向かい始めた。

エリア6と言われるエリアなのだが、この密林は三つの環境がある。名前道理の密林、浜辺、洞窟なのだが、このエリアは洞窟だ。

中にはランポスの巣があり、ランポスが大量に徘徊している場合がある。

しかし、そこに行くことは無かった。

「来た」

リオンが空を見上げた。

ピンク色の甲殻。

青い翼膜。

独特な形のくちばしに、大きな耳。

大怪鳥 イヤンクツク。

「行くぜえ！！」

男勝りな雄たけびを上げてルウがペイント弾を撃ち込む。

翼膜に当たり、甲殻と同じ色の液が付く。

ペイント弾もしくはペイントボール、ペイントビンはペイントの実からとれる強烈なおいの液を球体、弾丸、ビンに詰める、などして大型モンスターにぶつけ、遠くにいてもおいで居場所をつかむ道具だ。

荒い風が地面を駆け抜け、着地とともに地面を揺らす。着地と同時に頭にスパイク状の鉄球が振り下ろされた。

「フッ!!」

リンがいち早く着地地点に移動していたのだ。

イャンクックは頭の衝撃も気にせず、威嚇を始める。  
しかし、威嚇している内にララが宙に舞った。

「セイヤアアアッ!!」

剣を振り下ろしながら着地、体をばねに、剣を上には振り上げる。  
そのまま二回斬りつけ盾で殴る、最後に斜めに一閃。  
そして横に転がった。

その瞬間、後ろから土煙を上げながら大剣が振り下ろされた。

「セリヤアアアアッ!!」

リオンの溜斬だ。

限界までひねったからだから出された力+大剣の重力。  
二つが重なり、イャンクックの耳の片方を斬り落とす。  
ここまでは打ち合わせ道理。  
ここからが正念場だ。

いきなり走り出すイャンクックだが、一撃離脱を基本としているの  
で誰も巻き込まれることは無かった。

「ルウ!!」

「あいよッ!!」

レオンがルウの名前を呼ぶと、狙撃をやめて違う弾を装填した。  
数発うち、イヤンクックがルウに突撃し、押しつぶそうとした瞬間  
最後の一発。

最後の一発が当たった瞬間、イヤンクックが痙攣し始め、動けなくな  
った。

それを見計らい、ルウがイヤンクックの顔面めがけて連射を開始し  
た。

リンが足を砕き、ララが尻尾、リオンが翼膜を切り裂く。  
かなり体力を削ったはずだがまだ倒れない。

「もうじき麻痺がとける！！」

リオンが叫ぶとほぼ同時に自由を取り戻したイヤンクックが待避し  
ていたララに向かって火炎液を吐き出した。  
どうにか盾で防いだが体制を崩した。

それに追い打ちをかけるように突撃を開始した。

「ララ様ッ！！」

リンが叫ぶが、叫びもむなしく突撃に巻き込まれ、動かなくなった。

「いったん引くぞ！！」

ルウが三人に呼び掛ける。

そして隙をつき、いったんベースキャンプに戻った。

「リン、ララを見ててくれないか？」

ルウが話してくれるが大丈夫だろうか？

「貴女達はどつするのですか？」

「ちよつくら狩つて来る」

「イヤンクツクを？」

「当たり前だ」

ただそれだけの会話で終わった。

そして2人は狩り場に戻る。

おそらくララは気を失っているだけだ。

しかし、もう一度狩りに出れるか、と言つたら無理に近い。  
恐らくトラウマになっているだろう。

ケガも表面上は問題ないが、どこか捻つたかも知れない。

「早めに終わらせる」

「あいよリーダー」

次は崖を登り、エリア5へ。

しかし、ここよりもっと先、エリア6にいる。

「いた」

リオンが大剣の柄に手を伸ばす。

そして、走り出し、目の前でため始める。

敵は寝ていたのだ。

大型モンスターは眠ることで体をいやす。

と、言うことはかなり弱つているということだ。

「セリヤアアアアッ！！」

縦に一閃。

鉄の塊から削り出した刃物がイャンクツクの頭を切り裂く。

溜斬が当たり、相手が起きる前にルウは撃ち始めていた。

しかし、起きた瞬間イャンクツクが怒り出した。

そしてルウに向かってはしり出した。

ルウは弾を再装填しているため、回避が出来ない。

「あ、死ぬかも」

そして目をつぶり、衝撃に備えたが思った衝撃は来なかった。

代わりに洞窟の中にガイイイインッ！！”！”と言つ金属音が響いた。

「油断、、するな、、、」

目をあけるとリオンが大剣でイャンクツクを受け止めている。

「あ、、あ、、」

パニックになっているルウを横目にイャンクツクと向き直ると、再び剣が振り下ろされた。

「これ以上、仲間はやらせない」

そして、狩りは終わった。

帰りの船

「ジャンボ村ってえどんなところなんですかあ？」

ララはすっかり良くなり、話せるようになったが、まだあちこち痛むらしい。

無理をせずに休暇を取るらしい。

リンは泣いて喜んでいた。

「僕も初めてだよ」

リオンはイャンクック討伐の後にルウにパートナーになってくれと頼まれたが、パートナーは既に決まっているので、お断りした。

「僕もすごく楽しみだ。ラグナの第二の故郷」

期待に胸を膨らませて、ジャンボ村に着くのを待っている。  
それ程ラグナの気に行った村が気になるらしい。

「楽しみだ」

## 老山龍 襲来！！

それは不安と恐怖、自然の猛威と共にやってきた。

全長70Mオーバーの歩く自然災害、ラオシャンロン老山龍。

通過するだけで近くの街や村に深刻な被害をばらまいて行く。

そして今も確実にそんな怪物がモンスタードンドルマにちかずいていた、。

「バリスタの弾は出来るだけ持つておけ！！」

「撃龍槍の準備は出来てるか？」

赤や青の金色刺繍の入った服や幅広帽子をまとった者たちがせわしく走り回っている。

彼らはギルドナイト。

闇のハンターと言われているが、モンスターではなく対人間のハンターだと言う噂が流れている、。

しかし、彼らはかなりの腕前を持っていなければ勤まらない仕事であるのも事実、かなりの腕前ということになる。

「注目よろしいだろうか？」

一人のギルドナイトが砦の高台に登り、ハンター達の注目と沈黙を同時にやってのける。

他のギルドナイトより金の刺繍が細かいことから、他のギルドナイトより威厳、風格共に上の人物であることが分かる。

「今回の防衛戦の相手だが、古龍観測所からの報告だと剛種、各地の村ではG級と言った方が通りが良いか」

その言葉は沈黙に恐怖を織り交ぜた。

モンスターは通常個体、上級、G級の三種類に分けられる。

通常個体同士の子供は普通だが、通常個体でも特に強力な個体同士の子供は、さらに強くなる。

その強い個体が上級、そして上級の中でも特に強力な個体同士の子供。

最強個体、G級モンスターの誕生だ。

しかも、古龍はもとも強力な存在、それに強力な個体同士の個体。周りには絶望的な空気が流れていた。

しかし、

「久しぶりじゃねえか、こんな防衛戦に参加できるなんてよお!!」

一人のハンターがわざと声をあげた。

そしてもう一人のハンターがそれに続く。

「失敗したら大陸一の街、ドンドルマが無くなるんだからそんな嬉しそくに言っちゃあだめだよ」

「そう言ってるお前も嬉しそうな顔してるぜ？ 破壊神よお？」

2人の会話を聞いて周りがざわついた。

破壊神、というワードに反応したのだろう。

「破壊神だってよ？」

「マジか！？ 俺初めて見たぜ」

「もしかしたら今回行けるんじゃないか？」

そんな声も出始めた。

有能なハンターが居ると、周りのハンターの士気も上がる。英雄にはこういう役目もある。

そして、希望を与えることもまた役目の一つである。

「じゃあねえ、やるかー!」

ジンが無理やり周りを盛り上げる。

周りの士気が上がり、やれるという気持ちを高ぶらせる。

沢山の期待を背負い、防衛戦までの時間をジンとの雑談で潰すことにした。

「やっぱセレナさんのこと思い出したでしょ？」

ラグナは皆の最終エリアに来ていた。

ここにはバリスタ、大砲、そして最終兵器の撃龍槍もここにある。

その撃龍槍のスイッチのある場所はバルコニーのようになっている。そこにジンは居た。

ラグナの声でやっと気づいたのか、少し驚いた顔をしていた。

「ん？ まあな」

セレナは最初の防衛戦に参加した街の行商人の一人娘だ。

両親が家にいないことがほとんどで、一人で家の店を営んでいる。

しかし、彼女の店はいつも大繁盛だった。

恐らく彼女目当てで来ている客が居たからだろう。

基本無口、無表情で必要最低限のことしか喋れない、一人を除いて。

「おめえもか？」

「うん」

「チッ！セレナはお前がお気に入りだったからなあ」

基本無口、無表情の彼女もラグナと話している時は表情豊だった。  
彼女にしては話していたし、沢山笑っていた。

「今度会いに行かなくちゃね？」

「そうだなあ」

ジンはセレナのこと気がなっていたらしいのだが、他の客と同じように必要最低限のことしか話してもらえなかったらしい。

「よし！もうじき行くよ？」

「なあ、今回の奴は前のやつかな？」

「さあね」

そう言ってラグナが砦の中に消えていく。  
少し経ってからジンも砦の中に消えていった。

## 第一エリア

ここも大きなバルコニーのようになっている。

角笛が鳴り響き、周りがざわめいた。  
ラオシャンロン

老山龍がついに現れたのだ。

珍しい四足歩行のモンスターだ。

赤い甲殻に、一本の角。

分厚い甲殻や鱗には並みの切れ味では対抗できないだろう。

「で、でかい!？」

「ガンナーはここで出来るだけダメージを負わせる!！」

その声の後、一斉にボウガンの弾や矢が飛び交う。

しかし、分厚い鱗の前には効果は薄い。

拡散弾の爆発は背中に積もった塵を飛ばすだけにとどまり、弓矢は甲殻を軽く削るだけ。

貫通段や貫通矢は貫通せず、浅く刺さるだけ。

他の弾は効果は期待できない。

下手すれば兆弾してくるかもしれない。

しかし、積み重ねが大事だ。

諦めればそこで終わり、一生負け犬だ。

もちろんドンドルマも、そこに住まう人々も全て消える。

「剣士陣はエリア2へ」

ギルドナイトに続きエリア2へ。

ここは地上で直接やりあえる場所だ。

ここからが本番。

「ずっと考えてた。自分の力がもっと有れば、あんなことにはなつて無かつたんじゃないかって」

ラグナの隣で太刀の柄を握り締めているジンがつぶやいた。

「あの時は駆け出しだったけどよお、今は違う」

その時、地面が揺れた。

地面を殴りつけるような音と共に山が現れた。

「技術と体力を付けて、最前線で戦える」

良く良く見ると、老山龍の角が半分からへし折れている。

ラグナとジンはなぜ折れているのか知っている。

撃龍槍がぶち当たり、へし折れたのだ。

もう、四年も前の防衛戦の撃龍槍で。

「行くぜラグナ!!」

「分かってる!!」

2人が全ハンターの先陣を切った。

それに続くハンター達。

ジンの太刀筋が残像を残しつつラオシャンロンの顔を切り裂いて行く。

ラグナの超重量の斧が、切れ味鋭い剣がラオシャンロンの腹部を切り裂く。

ハンマー使いや大剣使い、双剣やガンランス使いと言ったアタッカーが足を狙う。

狩猟笛が演奏し、ライトボウガンで鬼人弾、硬化弾を仲間に打ち込む。

少しずつ、少しずつ積み重ね、撃退すれば良い。

しかし、

「硬つてえ!!」

「刃が通らんツ!!」

やはり並みの攻撃では刃が立たない。

足に刃が通らない者は腹部に回ってもらった。

「後退しろツ!!」

誰かの掛け声を聞き、後ろに下がる。

そこには全員分のオオタル爆弾Gが置いてあった。

合計60個。

これをくらっても平然としていたら士気が落ちるだろが、仕方ない。

そして、。

「いまだツ!!」

ラオシャンロンが顔が爆弾の上に来た瞬間、ボウガンの弾が一つの爆弾に向かって発射された。

音の暴力とはまさにこのことだ。

音だけで吹き飛びそうになる。

それに加え爆風、熱風がこちらまで届く。  
だが、

「マジかよ、。」

ラオシャンロンは平然と歩いている。

まるで自然の脅威を見せつけるように。

「まだだ、これからだ」

ラグナとジンは構わず斬りかかる。  
つられるように他のハンターも斬りかかる。

「まだまだこれからだあ！！なあラグナ！！」

2人の闘志は周りにも影響している。

だがまだ足りない。

もう一息、この老山龍を狩るにはもう一息足りない。

「こいつを狩らないとセレナに合わせる顔がねえ！！！！」

初防衛戦は失敗に終わった。

かなりの腕を持ったハンターが居たし、設備も悪くなかった。

ただ、相手が悪かった。

剛種老山龍。

期待していた撃龍槍も角を折ることしかできず、他のハンターのちからも及ばなかった。

結局街を守り抜くことは出来ず、16歳だったセレナも冷たくなつて見つかった。

「やれることをやる、じゃあ駄目なんだ。やれないことをやれるようにする。」

その後も激闘は続いた。

一部のハンターはラオシャンロンの足に吹き飛ばされ、昏倒した。

一部の者は自分の得物が使い物にならなくなり、撤退。

その中でも、ジンとラグナは戦った。

失った尊い命のために。

最終エリア

残り人数13人。

最初に30人居たのが半分以下になってしまった。

相手には攻撃する意思が無くて、不運な事故で撤退する者が多い。

そして、ここを守り抜かなければ街は終わる。

ドンドルマはミナガルデと対をなす街だ。

これほどの街が落ちると、膨大な被害が出る。

それだけはなんとか阻止をしないとイケない。

例え老山龍に敵意が無くて、も狩るしかない。

「皆良くここまで戦ってくれた。あと一息だ頑張ってくれ」

ギルドナイトの男も先ほどから戦闘に加わっている。

人出が足りないのだ。

しかし、ここはハンターランクの低いハンターも居る。

バリスタや大砲の弾を運ぶかかりの人たちだ。

そこにルナ達の姿があった。

「ラグナだあ！！」

「やっと会えたのです」

「こんなとこまで来て良かったんですか？」

そんな三人だが、きつちり装備を整え、依頼も受けたらしい。  
しかし、ラグナはほとんど話すこと無く、その場を去った。

そして、ひとつの決断を下した。

「ジン、ちょっと良いかな？」

「なんだあ？」

ジンを呼んで考えを言う。

「お前それで良いのか？ 周りがなんていうか分からないぞ？ い  
や、それ以前にギルドナイトが動くだろうな。この場で殺されるか  
もしんねえぞ？」

「それでも、やんなきゃ。あの三人を巻き込むわけにはいかないじ  
やないか」

そして、ラグナはある作戦に出た。  
自分に出来る最高の作戦。

砦耐久度40%

かなり砦に負担がかかってきた。  
もうじき潰されてもおかしくないパーセントだ。

「撃龍槍を使うぞ！！」

ギルドナイトの男がハンマーでスイッチを殴りつける。  
すると、水蒸気が大量に発生し、四つの鋼鉄製の槍がラオシャンロンを貫く。

しかし、二本は相手の硬さに耐えきれず、へし折れた。

ひるむことなくバリスタ、大砲の援護射撃が続けられる。  
だが、甲殻に弾かれるばかり。

周りのハンター達も諦めかけてきた。

動きにキレが無くなり、攻撃に威力が乗っていない。

これ以上は戦っても勝てない。

しかも、抑えるのも難しくなってきた時、ラグナがラオシャンロンの前に出た。

「まだ早いんじゃないか？」

「早くしないと砦が落ちる」

そう言いつつ、閃光玉を空高く放り投げた。

老山龍 襲来!! (後書き)

## 破壊神もう一人

ラグナの閃光玉がラオシャンロンの目の前で炸裂した。  
周りのハンター達は自分の目を焼かないように目をつぶる。

「おい！何をやっている！！」

「あんたほどのハンターならこいつに閃光玉は効かないことぐらい分かってるだろ！？」

周りからの声は無視する。

早くしなければ大変なことになる。

目をつぶっているハンターの間を縫うように駆け抜け、どんどん小さくなっていくラオシャンロンの元に駆けつける。

ジンから貰ったカンタロスの羽で作ったグラサンが役に立った。

「ジン！！」

「分かった！！」

あらかじめ打ち合わせをしておいたジンが閃光玉をもう一つ空に投げける。

これで他のハンターに擬人化を見られる可能性を低くする。  
しかし…。

「やっと見つけたぞ！！ もう一人の能力者！！」

その声と共にラグナの横腹に衝撃が走り、からだ意識が吹き飛んだ。

「おい！！ラグナ！！」

「後、三泊四日…」

「ふざけてんじゃねえ！！」

ガツンッ！と頭にジンの拳が降ってきた。

その衝撃で目を覚ましたが、痛みで何かを忘れているような気がした。

「例の作戦はどうなった？」

「例の作戦？」

少し経ってやっと頭が起きてきたころ、やっとラオシャンロンのこととを思い出した。

「そうだ！！あの時…」

意識が飛ぶ中で確かに聞いた言葉。

「やっと見つけたぞ！！もう一人の能力者！！」

一体誰なんだろう？ やっと見つけた？ もう一人の能力者？  
分からないことばかりだ。

心配そうに元ラオシャンロンを探すジンだがやはり見当たらない。

「どうしよう…」

とにかくその場を後にし、宿に帰った。

ジンとナル、他の三人に声のことを話した。

「ってことはテメエの他にモンスターを人に変える能力を持つ奴が居て、そいつがラオシャンロンを連れていったってことか？」

ジンが今までのことをまとめる。  
間違っでは居ない。

「なんで拉致っつたの？」

「何処で拉致っ言葉覚えたの!？」

ジンがナルに説教をくらわせている間に、残りの四人で話を進めた。

「なんか僕のこと探してたみたいだったけど、なんでだろ？」

結局防衛戦のことはラグナの知名度に拍車をかけた。  
五人の報酬を受け取り、ジャンボ村の帰路についた。

「結局何だったんだろうね？」

「知らん!！」

また護衛をさせられているジンはかなり不機嫌だった。  
竜車の荷台の上で昼寝をしようとした、その時だった。  
竜車が止まった。

首だけ持ち上げ、先方を見ると五・六人のハンターが立っていた。武器を見るだけでかなりの凄腕ということが分かる。

「ウカムシリーズ…」

ラグナの防具、アカムシリーズと対をなす防具だ。見た目は目立ってはいない。

そのハンターは後ろに立っている。しかし、存在感は明らかだ。

「どうしたんだい？ あんた達も乗ってくかい？」

竜車の主がハンター達に問いかけるが返答はない。

「もう帰るのか？ 兄弟」

明らかに女性の声だ。

そして明らかにラグナに話しかけて来ている。

「誰だ？」

ジンがまさかという顔でこちらを向くが、知るはずもない。

アカムトルムが黒い神と言われている。

ウカムルバスは白い神と言われている。

ラグナはアカムトルムを狩ったハンターとして、この大陸に名をとどろかせた。

その対をなすモンスターを狩ったハンターだ。

だが、ラグナと同じ技量を持ったハンターも少なからず居る。

自分とほぼ同じ実力のハンターの友達はかなり居る。

名前ぐらいは知っていてもおかしくはない。

しかし、ウカムシリーズのハンターはこの大陸には一人しか居ないはずだ。

しかもその男はもう死んでいる。

なのになぜこの女性は兄弟と言ったのか？

防具の関係で兄弟と言ったのか？

「ま、知らなくても仕方ないか。母親が違っただから」

「母親？」

母親は自分が幼いころに死んだはずだ。

父親は狩りに出てそれから帰ってきていない。

幼い時は兄弟が居るとは聞いていなかった。

「名を名乗れ」

珍しくラグナの気が立っていた。

親の、特に父親の良い話を聞いたことが無かった。

常識知らずで、すぐに女を家に連れ込んでいた、と言った話ばかり聞いていた。

しかし狩りの腕はかなりの腕前で、人間離れした身体能力を持っていたらしい。

「私？ 私はロク。ロク・ジークフリード」

「俺と同じ……」

「名前は言った。じゃあ次は私の願いを聞いてもらっわよ？」

「なんだ？」

するとロクの周りに居たハンター達が戦闘態勢に入る。  
ロクがちかずいて来てこう告げる。

「死んでくれる？」

次の瞬間には相手五人は武器を取り出していた。

相手はヤンガス、バサルS、ディヤブロス、モノデビル、ウカムシリズ。

どう見ても勝ち目はない。

特にロクとモノデビル。

モノデビルは白銀の英雄の証。

恐らくジンと同じ、それ以上の実力。

「ギルドでは人間同士の武器を使った争いは禁止されてるけど？」

どうにかラグナはま逃れようとするが無理だった。

「ギルド、ね。人を狩るハンターを抱えてる組織がそんなこと言ってもねえ」

次の瞬間、隣で火花が散った。

例のモノデビルのハンターとジンの武器が重なった。

「む？ やるな……」

「てめえ、不意打ちとは卑怯じゃねえか！！」

モノデビルのハンターが大剣に対しジンの太刀は遅れをとらない。  
それを見たラグナは後ろを向き、竜車の主に行くように伝えた。

「良いの？ 2人だけで」

挑発してくるロクに対しては何も感じなかった。  
しかし

「ジャンボ村、だっけ？ あの村を潰すのも良いなあ」

その瞬間、ラグナの頭から何かが吹っ切れた。

「お前ら、壊すよ？」

「やっとやる気になったか？ 兄弟！！」

ロクを一瞬で抜き、後ろで控えていた三人の内、一人を斧の一撃で昏倒させる。

思いきり武器を振りぬき、遠心力を最大限乗せた斧で腹を殴っただけだ。

バサルSシリーズのハンターがくの字で吹き飛んだ。

防具を付けていなければ死んでいた。

これで一人減った。

後四人。

「このやろおー！！」

厄介なのがこの二人。

双剣とランス使いのハンター。

最初に双剣ハンターが切り込み、離脱。

それと入れ違いでランスハンターが攻撃してくる。

「連携は良いけど、やってることは関心しないな」

双剣ハンターが切り込んできた瞬間、斧を振り上げる。

一対の剣を上弾き、斧を振り下ろす。

脳天に一撃。

また一人、減った。

「チッ！ 俺一人でも！！」

突撃してくるランス使い。

しかし、破壊神に無謀にも向かって来るとは…。

「俺はロクに用があるんだ」

針のように鋭い槍が猛スピードでラグナの心臓に向かって来る中、ラグナは軽くステップを踏むだけでそれをよけ、一瞬で剣モードに変形、相手の槍に叩きつける。

一瞬でランスを砕き、そのまま敵を切り刻む。

これで、残るはロクのみ。

「さすが兄弟！！ そうでなくっちゃ！！」

ロクは崩刀ウコトカムルバスを引き抜き疾風のごとく切りかかってきた。

命の削り合いが始まった。

## ジークフリード家の過去

斬撃の軌跡がきれいな半円を描く。

細身の長剣が分厚い大剣に当たり、火花を散らす。

しかし、斬りつけた反動で態勢を崩してしまふ。

そのすきに、大剣が風を切り裂きながらジンを襲う。

どうにか側転でよける。

相手が自分の武器の重さに引つ張られている内に切りかかる。

だがモノデビルの白い角を切り裂くことは出来ず、相手にダメージを与えられない。

その後も斬り合いは続く。

「お前の目的はなんだ？」

「俺の目的はラグナを殺すことだ」

何を分かり切ったことを、と切りかかってくるモノデビル。  
受け流し、胴体に切りつけるがあの装甲は傷すらつかない。

「何のために？」

「ラグナの父親を知っているか？」

どうやら話してくれるようだ。

少し距離をとり、剣を鞘におさめた。

「奴の父親は偉大な人間だった。噂では悪い噂さしかなかったが、噂とは大体そういうものだ」

確かに噂は大きな話になることが多い。  
良い話と悪い話が流れている人物はまず居ない。

「奴の父親はモンスターと人間のハーフ。そしてラグナの母親は人間だ。ロクの母親は……モンスターだ」

「あ？」

意味が分からない。

モンスターと人間のハーフも意味が分からない、なおかつハーフのハーフ？

と、言うことはロクには三分の二、モンスターの血が流れている。

ラグナは三分の一、モンスターの血が流れている。

これが擬人化の能力の原因なのか？

「名前はジークフリードしか分かっていない。周りになジークと呼ばれていたあの男は何も喋らない男だった」

懐かしそうに語り出した男。

「今から二十年前のことを話してやろう」

二十年前

「はぁッ！はぁッ！」

コcott村に滞在していたジークは周辺ではちょっとした有名人だった。

レウスシリーズに身を包み、タクティクスを背負っている姿はまるで、覇者。

ジークフリードにふさわしい姿だった。

今は砂漠に居た。

白い一角竜を狩りに来たのだ。

「ふう……」

水筒の水を少し飲み、また歩き始める。つもりだった。しかし、地面が揺れ、下から白い塔。白い角が突き出てきた。

「ヤバッ！！」

回避で距離をとるが、引っかけられ吹き飛ぶ。

落ちた場所から走って逃げる。

不意を突かれた。

一度立て直す。

そして、時間稼ぎに使った閃光玉がきつかけだった。

いつもよりまぶしい光があたりを包む。

そして目をあけるとそこには一人の男。

これがきつかけだった。

その男は元モンスターだと言い張り、その男をかくまったことで周

りの見方が変わった。

その後もクエストに行くごとに少女を連れて帰って来る。

そんなことが続き、次第に周りから女癖があると言われるようになった。

しかし、そんなことは無かったという。

誰にでも優しく話しかけ、どんな相談でも乗り、自分で解決出来る悩みはなんでも解決した。

そんな優しく、頼りになり、無口な男だったという。

そして、そんな中結婚をめぐって少女達の争奪戦が始まったという。そんな中間と結婚したジーク。

村長に頼み込み一夫多妻制にしてもらったらしい。

本人は嫌がったが、中々楽しい生活だった。

そして、黒龍に挑み、帰ってこなかった。

「と、こんなところだ」

語り終わった男は溜息をついた。

「ロクは父親を恨んでいた。絶対帰ってこれない狩りに出て、自分と母親を置いて死んでいった父親を」

「じゃあなんでラグナを」

殺そうとするんだ？と聞く前にこたえられた。

「父親のような状況になってるからだ。優しすぎ、強すぎる」

「だから自分と同じような人間を作らないためにつてか？」

いくら自分と同じような人間を作らせないためと言っても、人殺しまでするとは…。

「それだけではない！！　これ以上モンスターを人間に変える能力者が増えたらどうなる？」

「悪用する奴らが出てくるなあ」

そう言うことだ、とうなずきながら剣を取り出す男。

「しょうがねえ。やるしかねえか！！」

2人は同時に走り出した。

そして交差。

剣と剣がぶつからずに互いの胴を通った。  
倒れたのはモノデビルの男だった。

「名前は？」

ジンが尋ねる。

「ジークの心友であり元モノブロス亜種　アレキスだ…」

「俺はジン　ラグナの心友だ」

「互いに面倒な心友を持ったな」

「確かに」

苦笑いを浮かべながらジンも倒れた。  
その後、2人とも浅い眠りに就いた。  
起きたころには大変なことになっていることも知らずに。

## 黒龍伝説

「その程度じゃあ僕は殺せないぞ？」

ロクの剣に斧を引っかけ、剣の軌道をそらす。  
相手の態勢が崩れた瞬間に斧で肩に一撃。

「うるさい！！」

でたらめに切りかかって来る、だが剣モードでロクの剣を受け止め、  
受け流し腹に一撃。  
倒れそうになるが、どうにかしゃがみこむところで留まるロク。

「兄弟同士で殺し合って楽しいの！？ もうやめようよ……」

「うるさいって言うてるでしょ！！」

立ち上がり際に剣を振り上げてくる。  
しかしラグナはそれを顔を動かすだけでよける。

「ちょっと眠ってもらおうよ？」

腕を振り上げて、ロクの頭めがけて振り下ろす。  
直撃を確信したその時、

「妹を本気で殴るのは関心出来ないな」

いつの間にか2人の間に入ってきていた男がラグナの拳を止める。

「誰だ!!」

ロクが殴りかかろうとしたが、一瞬であしらわれた。

「親父を殺した張本人だ」

真黒な防具。それに劣らぬ黒い髪。

武器はタクティクス。

確か2人の父親が使っていた武器だ。

「俺はアス。ミラボレアスだ」

最初は何を言っているのか分からなかったが、次第にロクが口を開いた。

「嘘だ。私と住んでいた元モンスター達は自分たちの他に人間になった者はいないと言っていた」

男はそうだった、と呟きながら付けくわえた。

「お前の仲間は嘘を言っちゃいねえよ。ジークが最後の狩りに出てからだからな。俺が人間になったの」

そう言えば父親は黒龍を狩りに出て帰ってこなかった、と聞いている。

それなら話は通る。

「ジークは俺が殺した。優しすぎたんだな。俺が人間になった瞬間、攻撃するのやめやがった」

馬鹿な奴だよなあ、と笑いながら語るが、ロクとラグナは今にも切りかかるうとしていた。

いくら馬鹿な奴でも、父親を殺されて怒らない奴はいないだろう。

「俺はあいつみたいだな神の力を持つ奴らを殺して回ってる。ちなみにお前ら2人で最後だ」

と、言うとき背中から真紅に染まり、金色に輝く牙が光るタクティクスを取り出した。

「まあ、死んでくれ」

今までは見えなかったが、背中にライトボウガンを持っていたようだ。

神ヶ島だ。

現代の技術では作れない、古の武器だ。  
強力な拡散弾をばらまく破壊兵器だ。

右手にタクティクス。

左手に神ヶ島。

モンスターだった時の力は人間になっても少し残ると分かっていたが、ここまで強力ということは、元の力が計り知れないほど強力だったということか。

「今殺される気は全くないのでお帰り願おう」

「私もこいつを殺すまで死ねないので」

「すぐに殺してやるよッ!!」

大剣はハンターで無ければ扱えないほどの重さで、ハンターでも両手で使うのがやっとのはず。

しかし、この男は片手で軽々しく振り回す。

なおかつ神ヶ島で拡散弾をばらまくことで、攻撃の隙がない。

「化け物めッ!!」

「その化け物の娘に言われたくないな」

太刀で切りかかっても大剣で弾かれ、斧はよけられ、剣は大剣と互角だが、ボウガンで近ずけない。

しかもスピード。

武器を二つも持っているとは思えない速さで動く。

ボウガンの反動も受けていないように見える。

そのとき、アスは散弾を放り投げ、ボウガンを振り、空薬莖を捨て、弾丸を装填する。

その動作を一瞬で済ませ、ボウガンが火を噴いた。

「あッ!!」

ロクの足に当たり、倒れる。

防具のおかげで傷は無いが、反動で倒れたのだろう。

「妹とつたあ!!」

倒れ終わる前にアスはロクの前に現れ、タクティクスを振り上げる。

「やらせるかああああッ!!」

ラグナはポーチから毒投げナイフを取り出すと、アスに投げつけた。そんなものでどうにかなるとは思わなかったが。

しかし意外な効果を発した。

ちようど良くアスの頭に向かって飛んで行ったナイフをよけようと、頭を動かした瞬間、一瞬の隙が生まれのた。

「何だ？」

こちらを振り向いた瞬間、ロクが太刀を振りぬいた。血しぶきが飛び散る。

「あいつの子供にしてはやるじゃねえか。今日はこの辺にしとくか」  
するとアスは人間とは思えない速さでこの場を去って行った。

傷ついたロクに近づき手を差し伸べる。

「大丈夫？」

しかし、ロクは殺氣立っていた。

「なんで助けたあッ!!」

「なんでって、それは君が妹だからかな？」

## 怒り狂う金獅子

焼けつくような暑さと、目を焼くような赤が延々と続く場所。狩り場の中で最も過酷な場所の一つと言われているこの火山にラグナ達は来ていた。

この火山は人工的に作られたと言われている、人間と龍、飛竜ではなく龍との大規模な決戦で出来た山らしい。そしてその決戦で使われた武器がまだこの火山のどこかに残っていると。

「それにしても熱いなあ」

後ろを見ると三人。

リトとジン、それと妹のロクが付いてきている。

ロクは何故かアスとの戦いの後から口をきいてくれない。

「早くするのです！！　じやないとリオン君達が…」

ここに来たのはわけがある。

さかのぼること二日。

やっとドンドルマからジャンボ村に帰ってきた時のことだった。

ジャンボ村へ

「大変だああああ！！！」

土煙を上げながら村長が走って来る。

ちょうどその時は皆で船から荷物をおろしていたところだった。

ロクがアレキスと話し合い、この村に住むことになったのでロクやアレキスの分の荷物も運び出していた。

「ど、どうしたの!？」

「あ、気にしないで。村長はリアクションが良い人だから」

どうにか村長をなだめる。

「で？」

「リオン君達のパーティが火山にイーオスの間引きに向かったんだ  
!！」

「いや、で？」

「リオン君達が火山に向かった後に火山にラージャンが居るって報告が入ったんだ!！」

「よし!火山に向かおう!！」

ラグナは雑貨屋に走って行き、小銭袋から小銭のシャワーを雑貨屋のアイルに浴びせると、商品棚の回復薬とクーラードリンクをポーチをぶち込むとパーティの場所まで走って行き依頼を受け、ロクとジンを引きずりながら村から出ていく。

「待ってください!！」

後ろを振り向くとリトが立っていた。

「私も・・・私も連れて行ってください!!」

今はこの三人で行くのが最善だ。

実力的に見てもリトはこの三人に劣る。

「見てるだけならいいよ？」

危険ならばリオン達を探す側に回ってもらえばいい。

そう言う条件で参加させることにした。

そして今に至る。

未だにリオン達は見つからない。

「まだ見つからないの？ もう死んだんじゃない？」

冗談半分で言ったロクの言葉にいち早く反応したのはリトだった。  
リトが振り向いて何かを言おうとした瞬間、獅子が現れた。

「きたぜ!!」

「見ればわかる」

「リトは皆を探して!!」

リトがエリアの出入り口に向かって走り出した。  
ライザン  
金獅子の様子がおかしい。

何もしていないのにひかりを纏っている。  
しかも光の量が尋常じゃない。

これは・・・。

「兄貴！！ G級だ！！」

「分かってる！！」

三人は一斉に自分の得物を取り出し、構える。

「狩りの時間だぜ！！」

次の瞬間にはラージヤンは光の槍を撃っていた。  
グラビモスの熱線ブレスに似ているが、威力は比べ物にならない。

「ジンは左翼、ロクは右翼から、僕は正面から行く！！」

その声と共に三人は動きだした。

ジンは防衛戦の後、神嵐と呼ばれるようになった。

その座名にふさわしい動きで標的の左の死角に回り込むと、太刀を抜き放った。

その一方、ロクは指示道理に右側に入り込み、荒削りに太刀を振う。  
まるで獰猛な猛獣が哀れな草食獣を狩るように。

「セイヤアアアッ！！！！」

重量と腕力を存分に使い斧を振り下ろし、剣モードで切り上げる。  
十字に切りつけ、回避でその場から離れる。

しかし、黄金の衣に包まれた獅子には全く効果は見えない。

「積み重ねだ！！　積み重ねが大事なんだ！！」

切りかかりながら叫ぶラグナ。

彼は本気を出せていない。

リオンは無事なのだろうか？

この疑問がラグナの頭の中をぐるぐると回っていた。

そんなこともお構いなしに金獅子は襲いかかって来る。

両腕を左右に振り回すラリアット。

その場で回転したり、隕石のごとく振って来る。

そのような猛攻を耐え、反撃。

流れは完全にこっちに有った。

それを、

溶岩に半分溶かされたバスターブレイドを見るまでは。

## 獅子の猛攻（前書き）

なぜに前回二話更新しちゃったのか・・・。

## 獅子の猛攻

こっちに有った狩りの流れは完全に相手に傾いた。

ラグナの動きは完全に鈍り、ロクはリアットで大ダメージを受け、ジン一人で押さえてくれているが、長続きはしないだろう。

「ひとまず引こう。あの子がパーティを見つけているかもしれない」

ラグナの肩を借りて歩いているロクがうめくようにつぶやいた。

「ジン！！ 引くよ！！」

「簡単に・・・言ってくれるぜ！！」

ラージャンの攻撃を避けながら少しずつ出口にちかずいていく。2人は既にベースキャンプに向かっている。

「さて、ずらかるか・・・」

戻り玉を地面にたたきつけ、その場を後にした。金獅子の咆哮を聞きながら・・・。

BC

一瞬密林の浜辺を思わせる風景だったが、やはりここは火山のベースキャンプだった。

密林と同じような船もあり、そこには計六人。

一人足りない・・・。

リオンが居ない。

ラグナに近づき様子を聞く。

「皆の退路を切り開くために自分がおとりになったらしい・・・」

「カッコつけすぎだろ、そりゃあ」

その後リオンの帰りを待っている未だ帰っていないとのことだった。

船に備え付けてあるベットに座り、海をずっと眺めているリト。見ているだけでも痛々しい。

「おい、ラグナ」

「分かってる。ロク」

「兄貴が行くなら私もいく」

「ブラコン？」

「崩すぞ？」

「すみませんでした・・・」

三人は再び火山の中に戻って行った。  
金獅子舞う、紅の舞台に。

火山・頂上付近

まるで来ることを知っていたように、奴はいた。  
金の衣を身に纏い、乱舞のごとく襲いかかってきた。

光を纏った一撃必殺の腕が三人に襲いかかる。  
土煙を巻き上げ、火山岩を粉碎し、壁に亀裂を走らせ、やっと止まる。

「あれ喰らって生きてたなんてしぶといなあ、ロク」

「うつさい、集中しろ」

ジンに蹴りを入れ、三人別の方向に走り出すが、それと同時にラー・ジャンも走り出す。

ラー・ジャンはジグザグに走り、誰かに当てようとするが、流石は歴戦のハンター。

ラグナは回避し、ロクは走って逃げる。

ジンに至ってはすれ違いざまに一撃。

刀の威力と相手の速度で重い一撃、そのまま追いかけて止まったらここに一撃。

既に動体視力に関しては人間の限界を超えているような動きをやつてのける。

「そこどけえええ!!」

ロクがジンの後ろから太刀を抜き放ち、縦に一閃。

荒削りに金獅子の毛を刈りとり、皮膚を引き裂き、肉を断つ。

その場で気刃斬りをすり出す。

力強さとしなやかさが合わさった、強力な斬撃にたまらずラー・ジャンは後ろに跳びのく。

「兄貴!!」

「分かった!!」

下がったラージャンのそのまた後ろにラグナはいた。

前の2人に目が行っている内に斧を抜き、円を描くように振り、加速を付け、獅子の足を断ち切る。

アキレス腱を断ち切ったのか分からないが、金獅子が初めて金の衣に土を付けた。

「すげえぜラグナ」

「流石兄貴!」

動けなくなったように見えた2人が大胆にも正面から近づいてくる。しかし、金獅子の王者は甘くは無かった。

腕の力だけで立ち上がり、倒れるのも構わず2人に殴りかかって来る。

「あぶねえ!!」

「えッ!？」

殴りかかって来る直前に横跳びに口クをつかむが、予想以上に口クが重かったため倒れこんでしまった。

「お前、おめえんだよ!!」

「私じゃなくて防具が重いのッ!!」

ラージャンは自分の拳の重さに引きずられ、倒れた。

そのすきにラグナが切り込み、剣と斧を変幻自在に使いこなし、標

的を切り刻む。

すぐに2人も立て直し、三人で切りかかる。

一部分を集中攻撃、傷口を広げる。

そして・・・

「セリヤアアアアッ！！！」

斧を傷口にねじ込み、めりめりと傷口の組織を強引のはがし、その場所に剣モードで突きを入れる。

レバーを引き、剣の先から光が迸る。

帰り血を浴び、漆黒と紅を基本色とした防具が獅子の血で赤く染まる。

そして最後。

セットされていたビンが暴走、膨張し爆発。

ライジャンを内側から破壊、金獅子が崩れ落ちる瞬間だった。

「ありがとう、ジン。ロクを助けてくれて」

「へへ、テレくせえじゃねえか」

「でも兄貴、こいつ私のこと重いつて行っただぜ？」

その後もジンとロクは元気に殴り合いをしていたが、ラグナは火山を走り回っていた。

そして、エリア8と言われる場所に来た。

そこに・・・。

「リオン！！！」

「ラグナ？」

ラグナをそのまま小さくしたような外見の少年、リオンが座っていた。

ハンターシリーズの所々が碎けて、頭から血が出ていた。

「なんで逃げなかったの？」

「ラグナから貰った剣を壊しちゃったから・・・」

その後リオンを連れ、ベースキャンプに戻り、皆を安心させた。

「もぉ！！ カッコつけすぎなんだからッ！！」

涙目でリオンを説教しているリト。

リトのほうが背が低いのだが、何故か見上げて説教をしている。

その内にリオンのパーティの皆とあいさつをしたが、何というか個性的なパーティだった。

しばらくジョンボ村に滞在するらしいのでぜひ村に貢献してもらうことにした。

「村に帰るのがたのしみだなあ」

新しい生活の予感を感じていた。

ここにしか無い物（前書き）

すごく短いです。

ここにしか無い物

「眠い・・・」

目を擦りながら階段を下りていくラグナ。

家を改築してもらったので、ラグナの家はさらに大きくなり、既にプチホテルに代わっていた。

「皆はもうご飯食べ終わってるにや」

溜息をつきながらラグナの前をいくジライア。

それについて行くラグナだが、先ほどからあくびを連発している。

「みんな早起きだなあ」

「ご主人がお寝坊さんなだけにや・・・」

2人がキッチンに向かうと見知らぬ顔。

誰？と思いながら自分の席に着く。

ジライアがご飯を運んできたところでその子のことを聞く。

「あの子誰？」

と見知らぬ子を指さす。

「ん？ 誰？」

「知らないんかいッ!!」

バシンッ！とジライアの頭を叩くと、ひとまず見知らぬ女の子に近づいた。

「ええ、つと、君は誰？」

「ロクから聞いてないの？　ロクはいい加減な性格のよーだ」

ロクと知り合いということは敵ではないようだ。

独特な話し方だが、この子も元モンスターなのだろうか？

「お、い、兄貴。マカライト貸してくれ」

「駄目だよ。ギルドでレア度3以上のアイテムの受け渡しは禁止されてるでしょ。それよりこの子は？」

上の階まで吹き抜けになっている。  
その吹き抜けから顔を出したロク。

「ああ、その子？　兄貴が自分で人間にした子じゃん。ラオシャン  
ロン」

「ああ、なりゆほど！！」

「にやるほど？」

「いや、なりゆほど」

「頭が悪いの？」

「兄貴は悪くないよ！？　このバカ猫が悪いだけ」

「僕の扱いひどくないかにゃ？」

名前はロクが決めたらしく、ララ。  
リオンのパーティにも同じ名前の子が居たが、大丈夫だろう。  
部屋は後2部屋しか空いていない。  
これ以上は増えたら本気でヤバイ。

「まあ、よろしくね」

「誰がここに住むって言ったの？」

「えッ！？住まないの!？」

「いえ、住みます」

「どっちだよ・・・」

そのご、ロクにララを部屋に案内させた。

釣り場へ

リオン、ジン、ルナ、シャロン、ラグナと言う微妙なメンツがそろい、思い思い釣りを始めていた。

「この村もにぎやかになってきたなあ」

「なんかジジイ臭いのです」

「全くつれない・・・」

「こんな時間がずっと続けばいいのにね」

「そうだねえ」

全員がこんな時間が続くと思っていた。

やっと落ち着いた時間。

しかしそんな時間が続くとは保証はどこにもないのだった。

## 緊急事態

この世界には人間には届かない、大自然そのもの、古龍。

風を操り天候自体を変えてしまう龍、炎を変幻自在に操り王族に例えられる龍、自分の姿を消し幻と言われる龍、山のごとく体を持つ龍。

さまざまな伝説の中、ひとつ歌になっている古龍が居る。

最もスタンダードで最も狂暴、最も強く最も恐れられている龍、黒龍。

黒龍一匹の気まぐれで城が落ちた。

その時代最も優れた技術を持ち、最強と謳われたシュレイド城。今はそのシュレイド城に黒龍が住みついているという。

沢山の伝説の中で最も恐れられた伝説だが、他の伝説も恐ろしい力のこと記されている。

しかし、古龍は共通の力が有った。

それは、擬人化。

モンスターから人間に代わるこの行為は一度人間になったら元には戻れない、という技だ。

龍人族の学者は笑ったが、この話は筋が通る。

いくら凄腕ハンターが古龍を狩っても、生体が解明されない。

この技は実在する技なのだ。

そして、人間になった雌の龍の原点が一人の人間の男に恋をした。

2人は出会い、恋に落ちた。

2人で住むようになり、子供も出来た。

その子供は大きくなり、ハンターになった。

名前はルーツ・ジークフリード。

母親から貰った名前だった。

そして現代。

2人のジークフリードの血を引いた子。

ラグナロク。

この世の終わりを意味する2人の名前は、2人が近くにいるほど共鳴した。

しかしその共鳴にきずくこと無く時は流れた。

もうじき、もうじき世界の危機が訪れる。

その時は着々と迫っていた。

効果の逆流。

そして原点の二頭の龍が誕生する。

この二体が世界を崩し、破壊し続ける。

誰にも止められない。

誰にも・・・。

ジャンボ村

「ラグナ」

「ロク!!」

村の中をせわしく走り回るジンとアレキス。  
今朝から2人の姿が見えないのだ。

村人の数人が夜中に2人の姿を見たいらしい。  
何やら深刻そうな話を2人でしていたらしい。  
そして、今。

村の何処を探しても2人は見当たらない。

しかし、意外なところから2人の手掛かりが見つかった。

「お二人なら別々の狩りに出かけましたよ？」

酒場の前を通った時にパティが教えてくれた。

2人とも密林での狩りだが、依頼は別々の物を受けたらしい。しかし何故夜中に、しかも一人で狩りに出たのか？

積もる疑問を押し殺し、村で2人の帰りを待つことにした。

2人の腕ならこの周辺のモンスターなら遅れはとらないだろう。そうと分かればアレキスと2人で酒場で朝食をとることにした。

2人を探していて朝食をとっていなかったのだ。

適当に注文しようとした時、一羽のハトがカウンターに止まった。

「ちッ！ 邪魔だ、どっか行け！」

ジンがハトを追い払おうとするが、慌ててアレキスが止める。

「まて、伝書ハトだ」

「そうですねえ。こんな小さな村に周囲のギルドナイトから通達ですな」

少し暴れるハトからようやく手紙を取り外すし、手紙に目を通すとパティは目を見開いた。

時間が経つにつれ歯がカチカチと音を鳴らし、顔色が悪くなっている。

「どうした！？」

ジンが心配そうに聞くと、パティはいきなりカウンターの後ろにか

けていった。

「緊急事態発生！！ 緊急事態発生！！ 直ちに避難してください！！」

何かを使い村中に響いた緊急事態警告。それを聞いたジンとアレキスは驚いた。

「何かあったのか？」

戻ってきたパーティにアレキスが反射的に聞く。

「この村の近くに覇竜と崩竜が現れたそうです。現在は、二頭はいる周辺を荒らしているだけらしいのですが、いつこの村に来てもおかしくないそうです」

話を聞いて2人は言葉を失った。

2人は出かけて今はいない。

この村に2人以上のハンターはいないだろう。仮に2人がいたとしても勝てるかどうかは分からない。

「早くみんなを避難させろ！！」

「わ、分かった」

ジンは村人やルナ達を避難させに行き、アレキスが詳細を聞くことにした。

「それがおかしいのよ」

「何がだ？」

何もかもがおかしい時、もっとおかしいことは？。

「それが、二頭が現れた場所って2人が狩りに出た場所と全く同じなんだもん……」

「な！？」

既に2人は戦っているのか、それとも2人が二頭なのか。

未だに分からないことばかりだ。

ひとまずこのことをジンに知らせ、とにかく2人で様子見に行くことになった。

みんなは村から避難させ、ドンドルマに続く道に向かわせた。

大きな道なら逃げ場と、ハンターが居る。

そして、出発。

「道具はいつものでいいな」

「ああ、行くぞ」

本来、火山の最下層に現れる霸竜、雪山の最深部に現れる崩竜。

なぜ二頭が、密林で、2人と同じ場所で現れたのかは分からない。

しかし、一度確かめたかった。

本当にいるのか。

そして、ラグナとロクはいるのかを。

## 密林のモノクロ

ここが密林なのか目を疑った。

木々は倒れ、土地は荒れ、浜辺は消えた。

草食竜、鳥竜種の死骸がそこらじゅうに落ちている。  
洞窟が崩れ、所々凍りついている。

「ヤバいなあ」

エリア3に来たところでジンが感想を述べる。

静かに波打つ音だけが聞こえる中、地響き。

足元が揺れ、少し離れたところに黒い影。

覇竜アカムトルム。

「こいつがラグナかも知れないって奴だろ？」

「確かな」

こちらが戦闘態勢に入る前に相手が動いた。

アカムトルムはこちらを向き、口をあけた。

鋭い牙、強力な顎、そして、轟音。

音が衝撃になり、2人に襲いかかった。

ソニックブラストと言われる技だ。

覇竜の強力過ぎる鳴き袋だからこそできる技で、その音ですべてを破壊する。

倒れている木々を巻き込み、吹き飛ばす。

そんな中、2人は必死に回避をしていた。

どうにかあたらないように走っていたが、何処から何処までダメーシが有るのか分からない。

音だから攻撃範囲が分からないのだ。

「自然破壊が大変だ」

「ひとまずコイツを止めるぞ！！」

突進してくるアカムトルムに対し、2人は左右によける。  
しかし、あまりにも相手が巨体なため相当走らなければよけきれない。

それだけでも体力を消費してしまう。  
だが、相手は待ってくれない。

「コツコツやっても、もう一体と合流されちまうなあ」

「速攻でいくのである」

アカムトルムを追いかけ、背中から一撃、だがあまりの硬さに弾かれる。

アレキスの破壊力も、ジンの鋭さも効かない。

しかし、後ろ脚だけ刃が通る。

あまりにも動くのでピンポイントで攻撃するのは無理だが、隙を見て攻撃するぐらいなら出来る。

「閃光玉行くぞ！！」

「了解した」

まばゆい光があたりを包む。

アカムトルムが視力を失っていることを確認すると、腹にもぐりこみ、斬りつける。

甲殻をギヤリギヤリと削る音が響く。

アカムトルムの体には巨大な、それこそ、それだけで武器になってしまいうような棘が何本もついている。

無傷で近よるのは無理だ。

多少の傷は我慢する。

一撃で動けなくなる技はどうにか避ける。

まるで漆黒のメイスのような尻尾を振り回すアカムトルム。  
タイミングを見計らい、攻撃を避け、斬りかかる。

しかし、

「やはり無理だー!!」

「それでもやるんだよー!!」

攻撃は弾かれ、少しずつ傷が増えていく。

これでは一方通行だ。

勝ち目がない。

しかし、やるしかない。

村のために。

「んんんッセイヤアッ!!」

ぎりぎりまで捻った体を一気に戻す。

嵐のごとく斬撃がアカムトルムに襲いかかり、あらゆる部分をスタスタに引き裂く、はずだった。

ガィィィインッ!!と金属音が響く。

ジンが顔を上げるとアカムトルムが無造作に牙で太刀を受け止めていた。

まるでその攻撃を知っていたかのように。

「コイツやつぱり・・・」

「逃げるッ!!」

いつの間にかアカムトルムが右手を振り上げていた。

そして周りの物まで巻き込みながら、破壊しながらジンに襲いかかる。

避ける暇も無く直撃したジンはゴムボールのように数回バウンドすると、壁際まで吹き飛んで止まった。

「致し方あるまい。使つか」

アレキスは自分の命と言っても過言ではない剣を地面に突き刺し、体に力を込め始める。

モンスターの時に紅玉を持っていた者は一時的にモンスターだったころの力を得られる。

これはアレキス自身が発見した力だ。

だが、長くは持たない。

「さあ、始めようか!!」

その時、地面が割れた。

そこから出てきたのは、氷山。

いや、モンスターの背中。

崩竜ウカムルバス。

白と黒の神が並ぶ密林。

しかし緑は既に破壊しつくされ、今見えるのは白と黒。

破滅のモノクロ。

二頭は共鳴し合い、密林に響き渡った。

「二対一とは卑怯ではないか？」

そう言いながらも、二頭に立ち向かうアレキス。

ジンも秘薬を飲みどうにか立ち上がり、アレキスの後に続く。

一頭相手でも苦戦していた。

それが今は二頭。

勝ち目は無い。

今のままでは無かっただろう。

しかし、密林に複数のハンターが向かっていた。

## ラグナロク

どうにか崩れかけの洞窟に逃げ込み、二頭の追撃をまのがれた二人。しかし、安心はできない。

あの二頭なら洞窟を崩すことなど簡単にやってのけるだろう。

「洒落にならん強さだなあ」

アレキスの肩を借りながら歩いてきたジンが腰を下ろし、ため息と弱音を吐く。

「二頭ではどうしようもないな」

奮闘していたアレキスも体力をかなり消耗し、疲れ切っていた。ジンが自分の太刀に砥石を当て、切れ味を回復させ始めたところに、洞窟が揺れた。

「あいつらか？」

「だろうな」

二頭が外で見境なく暴れているのだ。

「ギルドからの増援は来ないらしい」

「ああ、HR以前に人間の力は及ばない、とかなんとか」

前代未聞の二頭狩り。

腕の立つハンターはギルドの宝だ。

それをわざわざ殺すようなまねはしたくないということなのだろう。  
沈黙があたりを支配する。

そして二人が再び立ち上がり、二頭の元に向かおうとした時、人影が見えた。

その数4。

動きからしてハンターだろう。  
二人に希望がこみ上げてきた。

「ギルドからの増援は来ないんじゃないかなかったか!？」

「そのはずだが・・・」

洞窟から急いで外に出ると、四人のハンターが二頭と対峙していた。

「ジンさん！ アレキスさん！ 無事でしたか？」

ルナ、シャロン、ララ、リトだった。

「バツキャロウィー！ お前らには荷が重すぎる!!」

「引き返せ!!」

急いで四人の元に駆けつける。

どうにか持ちこたえていたが、やはり今の四人では勝てない。  
一方的に押されているだけだ。

「嫌だ!! だってこのアカムトルム、ラグナかもしれないんですよ?」

「だったらなおさら引けないのです！　です！」

「まったく、どんだけ世話を焼かせるの？」

「こちらは私たちが押さえます！！　お二人はウカムルバスをお願いします！」

確かに一頭ならどうにかなるかも知れない。

四人もアカムトルム一頭ならどうにか持ちこたえられるかもしれない。

少しずつ、流れはこちらに傾いていた。  
ほんの少しずつ。

「セリヤアアアッ！」

アレキスがウカムルバスのスコップのような顎に大剣を叩きつける。  
積み重なることに顎に小さい亀裂が入る。

「ハアアッ！！」

ジンの太刀が荒削りにウカムルバスの甲殻を削り取る。

すでに足の甲殻がなくなり、組織がむき出しになっている。

これならば行ける！！

そこでふと、攻撃が止まった。

今攻撃してるのは、ロクじゃないのか！？

殺してしまっているのか！？

しかしこれ以上被害が出るようなら、ギルドが重い腰を上げるだろう。

一瞬の迷いが命取りになる狩場で、他の命の心配をしていたジンの浅はかさを、ウカムルバスは見逃さなかった。

立ち上がり、掃除機よろしく周りの空気を吸うと、プレスとして口から放出された。

周りの地面が凍りつき、割れる。

かわすことはたやすかった。

しかし、考え事をしていたジンは凍結範囲を考えていなかった。氷の足を取られる。

「おわッ!？」

まさに一瞬。

ジンが転び、しりもちをつく前にウカムルバスの剛腕がジンに襲い掛かる。

しかし、ジンも負けてはいられない。

まさに疾風。

一瞬の内にウカムルバスの腕から逃れると、反撃に移った。

刃は通らない。

ただ、削り取るだけ。

そう。

相手の甲殻と命を削り取るだけ。

強引な攻撃を重ね続けた結果、ジンの太刀は切れ味を失い、ジンの握力をも奪った。

しかし、やるしかない。

「まったく。ロクってここまでじゃじゃ馬だったか？」

「重度のブラコンなだけだ。じゃじゃ馬ではない」

「それはそれで十分危険だと思うぜ？」

二人は次第に息が合うようになり、少しずつこちらが有利になってきていた。

一方四人は、

「セイヤアアアアッ！！」

防御を捨て、攻撃に徹した一対の剣を携えた狩獵の方法。スタイル  
双剣。

一対の剣は相手を容赦なく切り刻む。

鉄壁の壁とすべてを突き崩し、撃ち壊す歩く要塞。  
ガンランス。

鉄壁の防御ですべての攻撃を跳ね返し、砲撃機能を兼ね備えたガンランスで標的を打ち砕く。

一撃、威力、破壊力で並ぶものはなく、すべてを潰す超重力の鉄槌。  
ハンマー。

重量を存分に生かした攻撃で相手の頭を打ち、脳振とうを狙える、まさにパワーアタッカー。

針のごとく繊細かつ、重火器に劣らぬ火力の後方支援。

ライトボウガン。

精確無比の狙撃で仲間を支援し、相手の状態異常を引き起こすパ―ティの要。

だが、切り刻んだはずの甲殻は傷つかず、逆に剣が刃こぼれし、要塞はさらなる猛攻に耐え切れず、超重量の鉄球は無残にひしゃげ、弾丸はいくら撃つてもはじかれる。

「相手がラグナかもしれないって分かってたから手加減してたけど、これじゃあ本気で行っても相手にならないじゃん!!」

「一時撤退しましょう!!」

「向こうの二人も頑張ってるのにこちらだけ引くことはできないのです!!」

「馬鹿なの? そんなことで命を落としたら馬鹿みたいじゃないの?」

ここで引くとジンとアレキスが二頭同時に相手にしなくてはならない。

そうすれば四人が来た意味がない。

だがラグナが戻って来た時、誰かが欠けていて喜ぶだろうか?

「ララさんの言うとおりです! 閃光玉行きます!!」

「分かった、洞窟の中に避難しよう」

「二人も早く避難するのです!!」

二人が振り向きうなずき合ってこちらに向かってくる。

そして二頭に向かって閃光玉を投げる。

まばゆい光が辺りを包む。

二頭の悲鳴が聞こえてくる。

そのうちに六人は洞窟に向かった。

どうにか洞窟に入ると外が騒がしくなりつつあった。

「どうしようもない。てか、あの人たち人間に戻るの」

「と、言うことを想定して持ってきちゃったんだよねえ、これ」

ララが愚痴をこぼすとララがポーチからごく普通の閃光玉を取り出した。

一同は雑草か石を見るような目でルナを見た。

「そんなもん一個でどうにかなるなら苦労は」

「なるほど!!」

「せめてセリフを最後まで言わせてくれ」

アレキスがポンと手を叩く。

いまだにわかっていない無知どもに説明する。

「恐らくその閃光玉はラグナの物であろう?」

「当たり前!!」

「その閃光玉を使えば二人を人間に変えられるかもしれないってことか?」

「そういうことだ」

「なんで最初から使わなかったんだよ!!」

ジンが怒り半分、あきれ半分でため息をつく。

それを見たルナは慌てて言い訳をする。

「だって私たちが使って効果があるとは限らないし、副作用が怖いし……」

「いいから今からすぐにためしに行くぞ。何個持ってきた？」

「一個」

「剥ぎ取り用ナイフで解体してやろうか？」

「だってこれ一個しかなかったんだもんッ！」

本気で困った。

二頭を一個の閃光玉で人間に戻すには相当の技術が必要になってくる。

動きの速いジンが最適だが、失敗は許されないこの場面ですぐ引き受けることはできない。

だが

「誰かがやんなくちゃいけねえんだろ？ だったら俺がやってやる」

ジンが申し出た。

そして作戦会議の結果、圈を使う作戦になった。

「アレキスが圈でほかの連中は隠れてる」

「そんな！ 私たちも何かやりたい！」

「圈が何人もいたら狙いが分散して失敗するだろうがよお」

いいから隠れて待ってる、と二人は洞窟から出て行った。  
外は燃えるような夕焼けだった。

二頭はエリア10にいた。

崩れた神殿が異様な雰囲気醸し出している。

波の音が異常に響く。

不意に二人が走り出した。

狙いは二頭の視線をこちらに向けること。

「てか、入り口にいれば二頭ともこっち向くんじゃね？」

素朴な疑問を抱く今日この頃。

「う、うむ・・・」

その手があったか！と黙り込むアレキス。

「じゃあさっそく」

二頭は二人が話しているうちに分かれ、ウカムルバスは地中に、アカムトルムはブレスを放ってきた。

これではウカムルバスに閃光が届かない。

「一筋縄ではいかないか・・・」

2人はエリア3に戻ろうとするが、振り返って足をとめた。

「ヤベエ！！ 満ち潮だ！！」

このエリアは小さな島がそのままエリアになっている。  
そしてこのエリアに来るためには道が一本しかない。  
しかも砂でできた不安定な道だ。  
その道は満ち潮になると沈んで渡れなくなってしまう。  
つまり狂暴な竜二頭と楽しく殺し合いをしながら一晩過ごさなくてはならないということだ。

「おいッ！」

「楽しい一晩になりそうだな」

「うん、そうだね♪　じゃねえだろうが!!」

「うむそうだな。女性が一人しかない」

「もう、疲れた・・・」

地面を割りながらウカムルバスは迫って来る。  
アカムトルムもその巨体を武器に迫って来る。

「行くぞ!!」

二体の攻撃をかいくぐり、崩れた神殿の壁際まで走り抜ける。  
振り向くと二頭がそろってこちらに向かって来る。

「もらったアアアアアッ!!」

閃光玉を空高く放り投げる。  
稲妻にも似た光があたりを包む。

「やったか!？」

「らしいな」

二頭のほうを見ると2人が倒れていた。  
赤い髪の男と、銀髪の女。

「連れて帰るぞ」

「いかにしてこの島を出るんだ？」

「そうだった・・・」

「でもロクは裸だぜ？」

「見ないようにすれば良いだろう」

ラグナとロクを遺跡の残骸で出来た屋根で濡れないようにし、2人は火をおこし始めた。

火を付けふと周りを見渡した時、目にとまったものがある。

祖龍、災龍、黒龍の伝説の遺跡。

「アスって奴黒龍だったよな？」

「ああ、この遺跡だとあいつの姉に当たる龍が二頭いることになるな」

「ぞつとしねエな」

ラグナとロクが気が付いたのは村に着いてからのことだった。  
ラグナの家で気が付いた2人は何故かモンスターになる前夜のこと  
も覚えていなかった。

## 旅立ち

密林での事件以来、ラグナとロクは人々から恐れられて、近寄られなくなってしまうた。

「なあ兄貴」

「なに？」

事件以来、ロクはラグナの部屋にこもりっぱなしで、外に出ようとしない。  
以前の覇気がないと逆に話にくい。

「お腹減った」

「そんなこと言われても・・・」

苦笑いを浮かべながらジライアを呼ぶ。

「呼んだかにゃ？ご主人」

「何か食べる物持ってきてくれないかな？」

「かしこまりましたにゃ」

ジライアが出て行った後に自分も腹が減っていることにきずいたらグナ。

「じゃあ僕は皆に伝えなきゃいけないことが有るからキッチンで食

べてくるね」

ソファアから腰を上げ、キッチンに向かう。

「あッ・・・」

ロクがひそかに声を上げたがラグナには聞こえなかったらしく、そのままキッチンに向かってしまった。

一人うつむいたままのロクー一人が残った。

キッチン

リオン、ルナ、ジンの3人が食事をとっていた。

「あ、ラグナおはよ」

ラグナも軽く返すと空いている席に座る。が注文はしない。3人の食事が終わるのを待って、全員に集合をかけた。

「今日はみんなに言うておかなくちゃいけないことがある」

「なんだよ。改まって」

ジンが茶化すがラグナは笑わない。

「実は、僕とロクで村を出ようと思うんだ」

一瞬の沈黙。

「え！？ 何！？」

「ロクは心に深い傷を負ってる。自分のしたことに責任を感じて周りの人たちに合わせる顔が無いらしい。このままじゃロクが駄目になってしまう。だったら心を開いてくれる僕とロクで何も知らない村に行ってやり直そうと思うんだ」

淡々と語るラグナ。

自分の息子のことを話しているような優しい顔で語るラグナを見て、誰も反論はなかった。

しかし

「じゃあこれからはラグナに会えないの？」

振える声でルナが聞く。

「ロクの様子が良くなったら会えるよ。それまでは会えないけど」

ごめんねと言いながらうつむくラグナ。

「いいんじゃないの？」

ジンが言う。

ラグナが顔を上げる。

「自分の身内を守るのは当たり前だが。それ以上にお前は優しすぎる。いくら言ってもお前はもう決めてるんだろ？」

他のみんなは黙っているが目はジンに同意している。

「ありがとう、みんな……。本当に、ありがとう!!」

荷物をまとめ、ロクを説得し、数日後に村を発った。

行き先は決めていない。

しかし、田舎で困っている人がたくさんいる場所と決めてある。

これから2人は沢山の困難の壁にぶち当たる。

だが2人と仲間の力が有れば大丈夫。

しかしここからの話は追ってお伝えするでしょう。

では、その時まで。

## 旅立ち（後書き）

一応一章完結です。  
ネタがたまったら二章も書くつもりです。  
では、その時まで。

## 一章 登場人物      ネタバレ注意（前書き）

第一章の人物紹介です。

ネタバレ注意

## 一章 登場人物      ネタバレ注意

名前    ラグナ・ジークフリード

防具    アカムシリーズ。

武器    覇剣斧ムルカムトルム

身長    175 cm

体重    65 kg

男性    19 歳

覇竜アカムトルムの防具を纏った凄腕ハンター。

ジャンボ村には物心ついた時から住んでいた。何故・何時からなのかは自分にも分らない。

武器は別大陸からわざわざオーダーメイドで取り寄せたスラッシュアックス。

別名「破壊神を破壊した男」「破壊神」などと言われ大陸中に名を轟かせたハンター。

名前    ジライア

防具    アカムシリーズ

武器    覇剣ネコカムトルム

身長    90 cm

体重    30 kg

男性    4 歳

ラグナのオトモアイルー。

かなりの凄腕で一人でリオレイアとやりあうほどの腕前。

名前    ジン・ブルーストーム

防具    ランゴSシリーズ

武器    黒刀参ノ型

身長    172 cm

体重 62 kg

男性 19 歳

ラグナとは古い付き合いでラグナがハンターになるといったときに一緒にハンターになったのかジンである。

虫好きでいつもランゴスシリーズを纏っている。

かなりの凄腕。

名前 ロク・ジークフリード

防具 ウカムシリーズ

武器 崩刀ウコトカムルバス

身長 154 cm

体重 47 kg

女性 15 歳

崩竜ウカムルバスの防具を付けたハンター！。

ラグナとは腹違いの兄妹でラグナのことを兄貴とよんでいる。

ラグナロクのと一氣に人が変わりしゃべり方もほとんど片言になつてしまった。

名前 ジークフリード

防具 レウスシリーズ

武器 タクティクス

身長 不明

体重 不明

男性 35 歳で死亡

周りからはジークと呼ばれ親しまれていた。

上の名前は自分では語らず周りの人間も知らなかった。

ココットの英雄に黒龍と戦うことを許されたただ一人のハンター！。

名前 ルナ・プリンセス

防具 レイアシリーズ  
武器 インセクトオーダー改  
身長 162cm  
体重 48kg  
女性 見た目15  
初めてラグナの能力の餌食? になったモンスター。  
元はリオレイアだった。  
勝気な性格だが一定上の恐怖には弱腰。

名前 リト  
防具 バサルシリーズ  
武器 ジェイドストーム  
身長 145cm  
体重 43kg  
女性 14歳  
ラグナの二人目の被害者? 元イヤアンクック亜種  
気弱な性格で自分の意見があまり言えない。  
意外に器用でライトボウガンを巧みに操る。

名前 シャロン  
防具 ディアブロシリーズ  
武器 近衛隊正式銃槍  
身長 162cm  
体重 51kg  
女性 16歳  
どこか抜けた感じのする少女。元アイルー  
打たれ強さと根性を併せ持つパワフルな奴  
「〜です!」が口癖。

名前 リオン

防具 ハンターシリーズ  
武器 バスターブレイド  
身長 165cm  
体重 53kg  
男性 16歳  
元リオレウスの男の子。  
ラグナの小さくなったような容姿をしているが性格は似ていない。  
意外に無愛想。

名前 ナル  
防具 なし  
武器 なし  
身長 142cm  
体重 37kg  
女性 13歳  
ラグナの被害者。元ナルガクルガ。  
何故かジンのことを気に入っている。  
基本無口。

名前 ララ  
防具 チェーンシリーズ  
武器 アサシンカリング  
身長 156cm  
体重 47kg  
女性 15歳  
リオンの初めての仲間。  
どこかのお嬢様らしいのだが詳しいことは分からない。  
いつもリンが目を光らせて見張っておる。

名前 リン

防具 レザーライトシリーズ

武器 スパイクハンマー

身長 162cm

体重 50kg

女性 16歳

リオンの初めての仲間。

ララのことをお嬢様とよびいつも周りを見張っている。

気難しい一面もある。

名前 ルウ

防具 ボーンシリーズ

武器 クロスボウガン

身長 165cm

体重 52kg

女性 16歳

勝気な性格でさばさばしている。

性格とは裏腹に正確に射撃をする。

名前 アレキス

防具 モノデビルシリーズ

武器 角王剣アーティラート

身長 175cm

体重 70cm

男性 26歳

ラグナの父・ジークによってモノブロス亜種から人間になった。  
ロクの味方に付き、ラグナを殺そうとする。

名前 ララ・シャングリラ

防具 暁シリーズ

武器 ブラックスミス

身長 145cm

体重 45kg

女性 15歳

ラグナの被害者その6

一時的にはロクにお世話になっていた。

口癖は「ゝなの？」

一章 登場人物      ネタバレ注意（後書き）

第二章もよろしくお願いします！

## ココット村

森に線を入れたように続く一本道をアプトノスが引く竜車に揺られること三日。

うつそうと生え茂る木々の間の道をゆっくりのんびりと揺られていた。

がたごとと揺れる馬車が不意に止まる。

竜車の主が荷台に乗っている二人に問いかける。

「これ以上行くなら追加でゼーをもらうけどどうするよ?」

荷台には二人以外に大きな荷物が沢山つまれている。

おそらく商品だろう。

異様な格好、体の全身を覆うほど大きなローブをまとった二人の内男が軽く首を横に振る。

「そおかい。またどこかで会えるといいね」

そういつて営業スマイルを浮かべ商人は竜車を二人が荷台から降りたところで前進を始めた。

降りた二人はすぐ近くにあつた看板を見上げた。

狩猟の原点・ココット村へようこそ！

と書かれていた。

村の中をのぞくと二人の村人が何かを話し合っているのが見える。

その近くには露店・その奥には武器屋があつた。

村全体がゆっくりとした雰囲気の流れ、決して豊かではないだろうが村人は楽しそうだった。

それを見ていた二人の少女が男のローブの裾を引っ張った。

「ここが気に入った？」

男がローブ姿の少女に何気なく聞く。

コクンとうなずく少女の手を引き村の奥、集会所の前にいる老人に向かつて歩き始める。

誰に聞かなくてもある要件を聞くには大抵あの雰囲気老人に聞くのが一番だ。

その老人のところまで行くのに周りの景色を見渡した。

木々に囲まれたのどかな村で、老人の手前で大きな道は二手に分かれて小道へと続いていた。

恐らく今とおっているこの道がメインストリートだろう。

五分程度かけゆっくりあるき老人の前で立ち止まる。

腰を曲げ、かなり小さい杖を支えにしているかなり小さな老人だ。

「すみません。この村の村長さんで合ってますか？」

老人は目だけをギロリと動かし二人をたっぷり時間をかけみると目を伏せ、やっと口を開いた。

「いかにも。して、ワシに何か用かの？」

眼光鋭い老人に少しひるむ男だがすぐに気を取り直し本題に入る。

「実は少し用件がありました」

もう一度老人は目を開いた。

今度は二人をじっと見つめて続けた。

「ゆうつみ」

「じつは、わけあってこの村に移住したいのですがよろしいですか？」

そう。

この二人は少し訳ありで住む場所を探している。  
もちろん条件付きで。

「いな、なぜじゃ？」

「それを言わなければダメですか？」

男は声を濁らせた。

なぜなら男の頭の中には移住の理由の発言「移住失敗の構図ができていたからだ。」

「言いたくなくてもよい。腕の立つハンターの移住を断る理由がないからの」

一瞬男は息をのんだ。

「なぜハンターだと？」

老人はニヤリと笑う。

「アカムトルムとウカムルバスの防具を着た一般人なんぞおらんで」

男はため息をついてロープを脱いだ。

この村長の前では意味がなく、熱いだけだ。

「俺はラグナ。ラグナ・ジークフリード」

「あの『破壊神』か」

正直この名前は使いたくなかった。

1月前のラグナロクのことを聞かれると移住を取り消されるからだ。少なくとも今まではそうだった。

村長は少し考え、少女に視線を向ける。

「するとそちらのほうはロクかの？」

何故か笑いながら名前を呼ぶ村長。

その笑いも孫に向けるような優しいものだった。

「は、はじめまして。ロクでしゅ」

まさか、噛むとはな。

「初めてではないかの」

「？」

意味深な言葉に小首をかしげるロク。

「お主ジークの倅<sup>せがれ</sup>じゃろ？」

「は、はい」

村長は返事を聞くと目を伏せ一つ大きなため息をついた。

「奴には大きな借りがある。今ここで倅に反しておく手もなきにしもあらず、じゃなあ」

長く白い顎鬚をもてあそびながら眉間にしわを寄せる村長。  
またダメか、と気を落としていたラグナにうれしい誤算が。

「最初から彼奴<sup>ジーク</sup>の倅と言えばよいものを。お主ら二人を歓迎しよう  
」！

## 緊急要請

結局ラグナロクの張本人二人が村に移住してきたことに反対するものはいなかった。

逆にハンター達は気軽に接してくれた。

大陸中に名を轟かせたハンターが自分の村に移住してくるなんてことは稀だ。

しかもラグナの名前を聞き、この村に新しくハンターが増えるかもしれない。

そんな期待のハンターが来てからいつも酒場は大賑わいだ。

しかしそんな喜んで迎え入れてくれるハンターばかりではない。

たとえばこの村で一番の実力を持つパーティや個人のハンター。

危険だが報酬の高い依頼は当然腕のいいハンターに受けさせる。

その定石<sup>セオリ</sup>のため今まで自分たちの思うがままに依頼を選んできたハンター達はラグナとロクと言う自分以上の実力者を嫌っていたのだ。時に無駄に誇りが高く自画自賛、すぐにケンカになるハンター。

こういったハンターからもよくからまれる。

プライドが高いハンターはほとんどの確率でパーティを組んでいない。

他人の力などなくとも自分一人で生きていけると思っている人間だからだ。

今日も酒場で一人のハンターに絡まれた。

周りの仲間<sup>ハンター</sup>がそのハンターを言葉で集中砲火したため涙目で酒場を走り去ったのだがこういうハンターが後を絶たない。  
そんなに嫌われているのだから？

「今日は適度にリオ夫妻の狩猟でも受けよつか」

ラグナはロクの顔色をうかがいながら依頼を受ける。

ロクに負担がかかりすぎない程度に依頼を選ぶ。

内心ラグナはロクに狩猟をやめてほしかったのだが、ロクは頑なに断った。

どういう信念があるのかわからないがどうしても狩人<sup>ハンター</sup>として生きていきたい様子だった。

「・・・うん」

いつものように小さく首を縦に振ると新しい自分たちの家に帰り支度をとりに戻る。

そしていつもの習慣になっているのは集会所から出てすぐ左にある樽底をくりぬいて作った掲示板を見ていくことだ。

ここには村人の悩み事や探し物や依頼にはならないちょっとした頼みごとが書かれている。

ラグナとロクは時々この掲示板の依頼を受けることがある。

報酬は村人の信頼と感謝の気持ち。

この二つはお金で買えない大切なものだ。

今日は特に重大なこともなく平和だ。

「よし。じゃあ予定通り依頼をこなそう」

そう言って自分たちの家に戻る。

平和な道をゆつくりと歩きながら自分たちの家に向かう。

二人の家は村の入り口近くにあり、そこまでは歩いて五分弱かかり、それまでゆつくりと穏やかな雰囲気を楽しむのが二人の楽しみになりつつある。

「うーん。ペイントボールをもつじき無くなりそうだなあ」

そんなことを言いながら自分のアイテムボックスをガサゴソしているといつの間にか支度を終えたロクがラグナの部屋のまえで待っていた。

「ああ、ゴメン。行きに解毒薬買って行っていいかな？」

「・・・ん」

自分のポーチから解毒薬を取り出しラグナに渡してくるロク。どうやら自分の分を分けてくれるらしい。しかし

「ダメだよロク。万が一に備えてたくさん持ってなくちゃ」

ピシヤリと言い払うと少しシヨンボリした表情でうつむくロク。

「でも、ありがと。気持ちだけでうれしいよ」

弾かれた様に顔を上げるとラグナが笑っていた。

思わずロクも笑顔になる。

そして集会所に向かう途中で雑貨屋で解毒薬を買っていると一人の男が村に転がり込んできた。

男は所々傷を負っているがそれより気が動転して言いたいことが言えず口をパクパクしていた。

「やばい！近くの『森丘』で商人が襲われた！！ しかもそれを聞いた若手のハンターが『森丘』に向かっちゃった！！」

それを聞いて最初に動いたのはロクだった。

ロクは転がり込んできた男に駆け寄り事情を聴いていた。

「俺ら商人のキャラバンは森丘を抜けてこの村に来るはずだったんだが途中で『ランポス』の群れに襲われて慌てて逃げるうちに広い場所に出ちまったんだ。そしたら『リオレイア』と『リオレウス』がいてキャラバンはバラバラに。そんで逃げてくる途中で若手のハンターに捕まって事情を話したらそいつも森丘に向かっちゃった・・・」

商人が話終わる前に後ろにいたラグナを振り向いた。

「・・・兄貴」

「分かってる！」

そのまま集会所に全力疾走。

依頼を受けてできるだけ早く電車を走らせ森丘に向かった。

一人でも多くの命を救うために。

少しでも希望になるために！！

## 無謀と勇気

竜車を飛ばし三時間。

まだ商人が無事でいることを願って竜車から飛び降りる。

地図はいらない。

ベースキャンプからエリア1に向かいながらポーチから千里眼の薬を引っ張り出すと一息に飲み干す。

薬独特の苦い味が口いっぱいに広がるがすぐに効果が表れる。

ラグナの嗅覚が恐ろしいまでに高められ二頭の飛竜の居場所を特定する。

「たぶん二頭とも巢を守るためにエリア5に居る。今のうちに商人の人たちを助けに行こう！」

商人の場所はバラバラに逃げすぎて特定できない。

手当たり次第に隠れていそうな場所を探すしかない。

「別行動しよう！ 僕はエリア1から6まで探すからロクは7から12まで探して」

早口で説明しながらエリア2と9の分かれ道に着いた。

「分かった。商人の命優先で行動」

「分かった」

ログナはそのままエリア2に、ロクはエリア9に向かった。

エリア9

地面に日の光が当たっている部分のほうが少ないほど木がうつそうと生えている森。

こちらは森丘の森の部分に当たる。

特にこちらのほうが隠れやすい場所が多い。

うつかり見落としがないように慎重に、しかし効率よく探す。

探しはじめ数分が経った頃、静かな森の奥から声が聞こえた。

「あッ・・・」

うつそうと生え茂る木の根に足をとられないように走る。

どうにかたどり着くとそこにはチェーンシリーズにアイアンソードと言いついかにも初心者ハンターが複数のランポスから二人の子供を守っていた。

すぐさまそこに参戦するロク。

啞然とする新米ハンターを尻目に二頭のランポスの頭を太刀で横なぎに引き裂いた。

仲間がやられたからか、新しいハンターが来たからかギャアギャアとうるさいランポスの数、残り三頭。

内二頭が怪我を負っている。

恐らくは新米が付けたものだろうが余計に怒らせてしまっているようだ。

「・・・ごめんね」

その場で太刀を抱え込むように力をためる。

ランポスが警戒しながらじりじりと距離を詰めて、一定の位置を通り越した瞬間三頭は同時にロクに襲い掛かった。

それと同時に自分を軸にしてコマのように回る。

太刀の遠心力と自分の腕力、斬撃の嵐によって一瞬にしてランポス三頭は見るも無残な姿になった。

新米は何が起きたの分からないような顔をしていたが気を取り直すといきなり口々に噛みついてきた。

「なんだよお前！ 俺一人でも大丈夫だったのに何で邪魔したんだよ！」

今にも殴りかかってきそうな勢いで口を睨みつけてくる。

「・・・？」

何を言われたのか分からない様子の口は首をかしげる。

「大人は全員俺のこと臆病って言いやがって！ だからこうしてハントーになってリオレウスを狩れば皆を見返せると思ったのに！ いいか、今から俺はリオレウスを狩に行く！ 邪魔するなよ！」

そう言い放ち歩き出す少年。  
わけがわからなかったため一言忠告。

「・・・貴方はリオレウスを狩れない。貴方が弱いから」

ピクツと耳を動かし立ち止まった少年。  
少し肩が上下している。

「なんで・・・なんで大人は皆やってもいないことを無理って決めつけるんだよ！！」

振り返り今にも殴りかかりそうな勢いで口を胸ぐらを掴む。

「・・・貴方何歳？」

「今年で16だ」

「・・・今は15歳？」

「なんだ？悪いかよ」

「・・・私も十五歳」

沈黙。

同じ年の女の子があそこまでの実力を持っていることに驚いたのと同時にいきなり自分が恥ずかしくなってきたので黙り込んでしまう。

「貴方のしていることは勇氣の示<sup>しめ</sup>じゃない。ただ、死に行くだけの無謀な行為。勇氣と無謀は違う」

自分と同じ世代とは思えない重い言葉。

一年前から死ぬ気でハンターになるために訓練を積み、やっと思いでハンターになった。

大人を見返すためにハンターになったという自分の物とはくらべものにならないほどの決意と信念を持ってこの少女はハンターになったのだと少年は直感した。

「じゃあ、私急ぐから子どもたちをベースキャンプまで連れて行ってあげて」

「お、おい。お前の名前は？」

「ロク。ロク・ジークフリード。ココット村に住んでる。」

ジークフリードの名前を聞いた瞬間、少年は目を見開いた。

「ジークフリードってココット村のジーク!？」

コクンとうなずく。

「すげえ！ ジークって言ったら黒龍に立ち向かうことをココットの英雄に許された唯一の人だぜ!？」

「そして帰ってこなかった・・・」

そこまでこの周辺では有名人なのかなぜか顔を赤くして語る少年をロクは一言で黙らせた。

エリア5

生臭い臭気と焦げ臭いが漂ってくる。

思わず鼻を覆いたくなるような臭いだが目の中の状況を見たらそんなことはしてられない。

わずかな隙間に十数人の人間が逃げ込みリオウスとリオレイアに襲われている。

所々に丸焦げになった焼死体とバラバラになった死体が転がっている。

「マズイなあ・・・」

いくらラグナと言えど二頭の飛竜を同時に相手にするのは難しい。

一対一で最強を誇るラグナにとっては一対多数は専門外なのだ。そうしている内にも商人が襲われそうになる。

細い隙間の奥へ奥へ逃げ込んでいるが子供や老人を優先しているのなかなか奥へ聞けずにいた。

「よし！ロクと約束もしちゃったし、やるか！」

商人の命が優先。

その言葉を思い出し、ポーチから閃光玉を取り出しかけ、やめる。またあの能力が発動したら大変なことになる。それならば・・・。

「ブオオオオオッ！！」

ベルトに振ら下げてあった角笛を高らかに吹き鳴らす。

二頭が弾かれた様にこちらを振り向く。

女王と王者には怒りを、商人には希望を与えるハンターの誇りの音。

「俺が二頭をひきつけます！その内に逃げてください！」

商人たちはこれでもかと言うくらいに首を縦に振るとタイミングを見計らいながら一人、また一人と逃げ始めた。

もちろん二頭の飛竜はこちらに集中しているため商人どころではない。

「ふう。お仕事お仕事」

背中からスラッシュアックスを取り出す。

火花を散らしながら斧先がスライド、柄の部分が伸び真の姿があらわになる。

スラッシュアックス・覇剣斧ムルカムトルム。  
この地方では使われていない武器だ。

「ゴワアアアアッ!!」

音の塊の暴走。

辺りに反響しさらに大きな音に聞こえる。

リオレウスのバインドボイス。

この音を聞くとハンターの実力云々の前に本能的にしゃがみこんでしまう。

巨木をも簡単になぎ倒すリオレイアの突進、直撃を受けたら間違はなく焼死体になるリオレウスのプレス。

恐ろしい攻撃をバインドボイスの硬直から解かれた瞬間、ぎりぎりがわし反撃に移る。

商人が全員避難したのを確認するとポーチから閃光玉を取り出し地面にたたきつける。

恐ろしいほどの光が周りの視界を白一色に染める。

二頭とも目が眩んでいる内に片方を集中砲火すれば・・・。

あれ？

何かを忘れているような？

## 親心

ベースキャンプは大量の避難者により混雑していた。

応急処置などはテントの中で行われ、無傷の物はテントの外で仲間と生き残った喜びを噛みしめ、その一方でキャラバンの主は人数確認を行っていた。

いまだに名簿の名前に丸が付かない者も多い。

テントの中で応急処置を行っているのは口ク。

自分の傷は自分で治すハンターは医療技術に関しては素人よりよっぽど詳しい。

だがハンターにとってかすり傷程度でも商人にはかなりの大ケガに感じるらしく大の大人が半泣きで治療を受けていた。  
そんな大人に交じって子どもが一人、近づいてきた。

「お姉ちゃん、ハンターだね？」

一種の憧れと尊敬と共に怒りと悲しみをに満ちた瞳でこちらを見つめてくる少女。

後ろの大人たちがざわついた。

その内容は「カーテスさんの娘さんだ・・・」「目の前で両親があらんなことになるなんてなあ・・・」と言う言葉が大半だ。

恐らく親を殺された恨みを晴らすために

「お願い！ 私に・・・私にハンターを教えて！！」

予想通り。

身内・または恋人など大事な人を奪われハンターになるのは珍しいことではない。

またそういったハンターは怒りで我を忘れてすぐに死ぬことも珍し

いことではない。

それを知っているロクは慎重に口を開く。

「・・・私は止めない。けど教えることもしない」

「なんで！？ 私はただ両親の無念を晴らしたいだけなの！！」

今にも泣きそうな眼でこちらの顔を覗き込んでくる。

その悲しみの痛さは分らない。しかし怒りは分かる。痛いほどにわかりすぎる。

だからこそ自分が止めなければ。

この怒りの悲しき連鎖を。

「なんで？ 貴女の両親は貴女がハンターになることを拍手喝采満面の笑みで祝福してくれるの！？ 違うでしょ！？ 貴女の両親が貴女に何を望んだのかはわからない。でも、これだけは言える。ご両親は決して貴女にハンターになってほしいなんて思っていない。自分たちが作り上げた商人としてのプライドと客の信頼を守り、そして何より貴女の幸せを願ってたんだと思う。それが」

そこで言葉が切れた。

自分でも何を言っているのか分からないほど次々に言葉があふれてくる。

あつて数分の大人たちもロクの性格を少なからず理解していたはずだが度胆を抜かれたかのように押し黙っている。

「それが・・・親だもの」

静寂に包まれたベースキャンプには、少女の泣き声だけが響いた。

エリア5

まばゆい光に包まれ数十秒、いつもより長く光が続き、やっと視界が確保できるとお約束の子供が二人倒れていた。

「ああ、やつちゃった・・・」

額に手を当てやれやれと首を振るラグナ。

ちなみにこの洞窟にはラグナしかない。

小さく呟いたはずの言葉が意外に反響し、かなりの音量になってしまった。

それで目を覚ました片方の子供、と言っても実際は15〜6歳程度だろうか。

ロクと大体同じ年に見える少年はこっちを見るなりいきなり

「おはよ。今日もいい天気だね」

いや、ここ洞窟だけど!?

い、いかん。取り乱した。

落ち着けラグナ。

自分で自分をなだめると少年のほうを向き直ると改めて

「こんにちは。俺はラグナ。一応ハンターだ」

「ふん。ハンターさん」

独り言なのか話しかけているのか分からない。

少し黙っているとまた「ハンターさん」と呼ばれたので一応返事をする。

「なに？」

少年はにっこり笑うと

「お名前を教えてくださいませんか？」

「ラグナだっつの！！ 30秒前に名乗ったばかりかぞー！？」

「あれ？そうだった？」

「はぁ・・・」

やれやれ、本日2回目の首を振る。

もう一人のほうはまともでありますように。  
心の中で祈りながらもうに近づく。

「あ、そういえばお前の名前は？」

もう一人は少し遠くで擬人化してしまったので歩きながら今話をしていた少年の名前を聞く。

「ボク？名前なんてないよ」

「ふん」

いつもと変わらず名前なし。

飛竜ってどうやって呼び合ってるんだろうな。

そんなことを気にしながらもう一人のほうにたどり着いた。  
そして何かおかしいことに気が付いた。

「ん？ リオン？」

今はジャンボ村で絶賛活躍中。 第1章 リオン編を参照

巷で噂の期待の新人パーティのリーダー・リオンにそっくりなのだ。リオンも元はリオレウス。

もしかしたら兄弟や双子の可能性もある。

だいぶ先になるだろうが次リオンにあつたら知らせてやろう。

「おゝい」

ペシペシとほつぺたを叩く。

早く起きてもらわなければ、様子を見に来た商人に見つかったら大変だ。

「ん・・・」

ゆつくりとまぶたを開ける少年。

しばらく焦点が合わずにいたが、数秒たつとこちらを少年の目が捉えた。

「に、人間！？」

「やべえ。モンスターとして当然すぎる反応を初めて見たような気がする・・・」

ズザザッ！と後ずさりをする少年だが、ふと足を止めた。

「俺人間になつてる！？」

改めて自分の足や手を見て驚いていた。  
何か罪の意識を持つがそれはしょうがない。  
誰も命を落とさずに済んだ。

「それは俺が原因だ」

すると少年はこちらを鋭い眼光でにらみつけてきた。

「どういう原理で俺が人間になったのか知らないが、どうしてくれるんだ？」

「と言うと？」

「人間の姿でどうやって生きて行けと言っただって聞いてんだよ！  
！」

激昂するのも当たり前だろう。

今までは空を支配する者だったのが今は地べたを生きるために這いずり回る人間に成り下がったのだ。

「心配するな！俺が何とかしてやる！！」

「あの、ボクは？」

「ん？」

気まずそうな顔で先ほどの少年が立っていた。  
どうやら自分を取り残されることを心配したらしい。

「任せとけ！俺は稼ぎが良いからな！」

そこで二人の少年を見比べる。

「ん？少年？」

「ん？なんだ？」

先ほどから気になっていた。

リオレウスとリオレイアが人間になったのならどちらかが男でどちらかが女になる。

しかし男の子しかいないことが気になっていたのだが……。

「もしかして、女の子？」

最初に目を覚ました子を見ると

「やっぱり皆、ボクのこと男の子って言うんだね……」

涙目で崩れ落ちた。

そんなこんなでベースキャンプに戻り、商人たちと合流した。

ベースキャンプ

「兄貴！」

ラグナの姿を見て真っ先に飛びついてきたのはロクだった。

人目を気にせず実の兄に飛びつくのはこの年ではさすがにラグナも照れくさい。

「けが人は？」

「一通りの応急処置をしておいた。あと、私たち兄妹きょうだいに弟子入りしたいって子が数人いる」

少し驚いた。

さすがに小さな村でもハンターの村。

例のラグナロク事件のことはほぼ全員の村人が知っていた。

それを知っていて快く村に迎えてくれた人々へ、少しでも恩返しができるばと考えていたのだが、掲示板の悩み事を解決するぐらいしかすることがないと思っていた。

しかし、新人ハンターの教育と言う手があった。

優秀なハンターは足りないことはあっても多すぎるということはない。

そんな優秀なハンターを教育する。

これは村にとっても、自分たちにとっても都合のいいことだ。

「分かった！村に帰ってゆっくり考えよう！」

その後、村に着くまで商人を護衛、村に着くなりお礼の言葉と品物を押し付けられ大忙しになった。

そして、例の二人のことは村長に打ち明け、どうにかかくまってもらった。

数日後にはラグナ達の家を増築するらしい。

その後は十人まで住める大きな家にする。

もちろん教官の真似事のことと村長に相談して、許可も下りた。

後は二人の腕で優秀なハンターを育てることだ。

村のためにも。

## 黒龍の男

「ウリヤアアッ！！」

雄叫びを上げながら骨を削りだして作った巨大な得物・ボーンスラッシャーを小型肉食鳥竜種・ランポスに向かって振りかざす。

それを軽く左によけながら噛みつきを入れるランポス。

負けじと少年は獰猛なランポスの犬歯を右腕の小手で軽くあしらうと、蹴りを入れて敵との距離をとる。

相手の数は3。

普通に戦っているのは消耗戦になりこちらが不利だ。

しかし今は一人ではない。

心強い仲間が二人いる。

「レティア！」

相方の名前を呼ぶと自分の後ろにいた少女が身をかがめて飛び出してきた。

緑色のショートカットがよく似合っているボーイッシュな美少女だ。手には一対の剣。

左右非対称なそれは黒光りした得物だった。

ツインダガーを構えた少女は1頭のランポスの下にもぐりこむと舞う様に1回転。

ランポスの頭が少女の隣に湿った音とともに落ちてきた。

「リオルグ！」

少女が少年の名前を呼ぶ。

ランポスの注意は完全にレティアに向いている。

少年は走りながら抜刀。

1頭のランポスの頭に荒削りの骨の大剣を振り下ろし頭を砕いた。続けて横に振りまわりもう1頭の首をへし折り、最後のランポスも力尽きた。

ランポスの剥ぎ取りを終え、エリアの奥に目を向ける。

視界の奥にはもう一人の仲間・ラグナがいた。

ラグナの前にはおおきなピンク色の死体。

大怪鳥イヤンクック。

その大きなクチバシと耳が特徴的な初心者登竜門のモンスターだ。リオルグとレティアの2人がランポスとやりあっている内に狩ってしまったらしい。

「あんたが狩っちゃ俺たちの練習にならんだろ」

ぶちぶち言いながらラグナに近づいていく。

「テヘ」

「殺してえ・・・」

黒が基調の赤いラインの入った触れただけでも怪我をしそうな禍々しい防具を着て、なおかつ大人の男がテヘとか言ってもぶっちゃけ殺気立っただけだ。

「ラグナ、こっちの依頼は終わったよ」

遅れてやってきたレティアがラグナに現状報告をする。

この頃異様にレティアの機嫌が良いとリオルグは感じていた。

モンスターだった時からの付き合いだからわかるのだが、この頃、

とくにラグナと一緒に狩猟に出る様になった頃から機嫌がいい。  
なぜだ？

「もう15匹も狩ったのか。初心者にしては上出来だな」

そんなリオルグの心情をよそにいつもと変わらないラグナ。  
少しむっとなるリオルグ。

「そんなことは良いからとっと帰ろうぜ」

棘のある言い方で帰ることを促す。

ラグナもさすがにリオルグが不機嫌なのにきずいた。

「なんかお前不機嫌じゃないか？」

「お前には関係ない！」

自分でも理不尽だとわかっていても、自分でも分からないこの感情  
をどう抑えろと言うのだろうか。

小首をかしげるラグナとレティアだがすぐにベースキャンプに向か  
う。

2人が居なくなっただ後、リオルグはその場に座り込んでしまった。  
どうしようもないこの感情をどうにかしたくて。

「はは！ 浮気されたのがそんなに気に食わないのか？」

聞き慣れない声が耳に入ると同時に背中にある大剣の柄に手を伸  
ばし振り向く。

そこにはすらっと長い脚に黒い服、挑発的な鋭い眼にミステリアス  
な笑みを浮かべている、眼に見えないがモンスターなら分かつて

つもない邪気を纏った見た目20代前半の男がいた。

「そりやそうだよな。のこのこと現れ、お前を空の王者から地面を這いずり回る人間に変え、拳句の果てに先にツバをつ付けておいた女を取られちゃかなわんよなあ!!」

男は立て続けにリオルグがイラついていたことを見事に当て、モンスターの時の事情も知っていた。

元々、リオルグとレティアはお互いに認め合ったパートナーだった。それを後から現れたあの男が2人の仲を引き裂いた。

今ではリオルグに構うことはめつきり減り、今ではレティアはラグナにべったりだ。

昔のように自分には構ってくれない。

「彼奴のせいだ! 俺は悪くない! 彼奴が俺からレティアを奪ったんだ!!」

ほとんど八つ当たりだった。

地面にひざまずき拳をひたすら地面に叩きつけた。

拳でひたすら地面を強打した。

自分の好きな人を奪われた。

それを受け入れるのはまだこの世に生まれ10数年の少年には難しかった。

「奪われたなら奪い返せばいい!!」

ハッと顔を上げるリオルグ。

「元々はお前の物なのだろう? 奪われたのだぞ? 奪い反して何が悪い!! お前が正義だ! 奴が悪だ! 違つか!」

男のどこまでも黒い、まるで底の無い深海のように黒い瞳に吸い込まれるような錯覚を覚える。

次の瞬間には完全に理性が飛んでいた。

「奪い返す！ どうすれば良い！？」

そこで男はニヤリと口元を緩める。

「俺の仲間になれ……。お前の望む物、望むことをすべて叶えよう！！」

コクリと首を縦に振った瞬間、男の声に引き込まれ、本物のリオルグの心はそこで死を迎えた。

「クックック……。私はどこまでも追いかけてお前らを殺すぞ！」

リオルグが居ないことに気が付いたラグナが到着した時にはすでに、リオルグと男の姿はなかった。

## 黒龍の男（後書き）

アスについては1章・黒龍伝説を見てください。

## 暴食参上

薄暗い部屋の中、小さな口ウソクの光が揺れ、2人の影を浮かび上がらせていた。

「現状では八人、頼んだぞ」

片方の、小さな老人が背の高い青年に話しかけている。

「了解・・・」

幅広の帽子を深くかぶり、スーツ、グラブ、コイル、ブーツを纏い、腰には長剣。

深い青一色で統一した長身の青年は暗い部屋から颯爽と消え失せた。

「ふむ。彼奴も向かわせるか・・・」

意味深な言葉をつぶやきながら老人も薄暗い部屋を後にする。  
老人が部屋から出ると、自然に口ウソクから火が消えた・・・。

ココット村

ココット村はいつになく異様な雰囲気包まれていた。

ラグナの仲間が狩りの途中で失踪。

それは村中に瞬く間に広がった。

「どうなってるんだ？ 目を離れたのはほんの10数分だったはずだが・・・」

ラグナは集会所の机を殴りつけた。  
長らく使われてきたそれはミシミシと嫌な音を立てる。

「モンスターによるものか、人間によるものか分からん今は待つしかなかるう」

ギルドカウンターに腰かけていた村長が特に焦りを見せるわけでもなく淡々とラグナに言い聞かせる。

そんな態度を見て怒りを抑えきれなくなった。

「仲間がいなくなっただんぞ!？」

「だからなんじゃ？」

言い切った。

だからなんだ、と。

何かがブチ切れる音がしたような気がした。

「てめえ何様のつもりだ!!」

勢い余って絞殺しかねないほどに村長の胸ぐらをつかみにかかった。  
それを何の抵抗もなくされるがままにされている村長。

「黙れ若造」

カツと見開かれた老人の目には殺気すらあった。  
直視していれば、それだけで殺されかねない力があつた。  
これが英雄の力。

「騒いだところで戻って来るなら苦労はせんわ！！　落ち着きギルドからの要請を待つんじゃ」

そついうとラグナの手からヒョイと抜け出すと集会所の外に向かっていた。

「霞龍じゃねえのか？」

「確かに。この頃中堅ハンターが各地で行方不明になってるらしいぜ？」

どこからともなく声が聞こえた。

おそらくこの村のハンターだろう。

その声にラグナは閃きにも似た感覚を覚えた。

「それだ！！」

霞龍は姿を周りの風景と同化させ、相手の目を欺く能力を持っている『古龍』。

ゆえに目撃情報の少なさが他の古龍より群を抜いている。

「今すぐ森丘に行く！腕に自信がある奴は付いてこい！」

居てもたつてもいらなくなったラグナは即席でパーティを組み、森丘に向かおうとするが、なかなか即席で戦えるほど古龍は甘くない。

それを知ってか、古参のハンター達はなかなか集まらない。

だからと言って新参者のハンターが太刀打ちできるほど甘くない。

俺ならできると調子づいている新参者を目で薙ぎ払う。

「しょうがない。2人で行く。すぐにクエストを」

支度をするために戸惑っているロクの手を引き自分の家に向かう。腕が立ちそうなハンター達は目を伏せ、新人のハンターは軽蔑の目を向けてくる。

集会所の前に集まっていたハンター達を睨みつけ、道を開けさせる。

「おいあんだ。あたしでよければ手伝ってやろうか？」

決して大きくないが、無視できない声が聞こえた。

後ろを振り向くとまず目に入ったのは、自分と同じデフォルトの防具。

黄色を基調とし、刺々しい雰囲気を纏った轟竜の防具。背中には大剣・ティガノアギト。切るといふよりは引き裂くのほうが表現的にふさわしい武器だ。

次に目を引くのがあらわになっている顔。

歳はラグナと同じぐらいだろうか。

精悍な顔つきに防具と同じ色の髪の色に、切れ目の瞳の色も金色。頬には赤いペイント。恐らく宗教的な意味はなく、モチベーションを上げるための物だろう。

物腰に普通のハンターとは違う何かを感じるハンターだ。

その容姿にはラグナもうわさに聞いていた。

「暴食のティル・・・」

ぼそつとロクが隣で呟いた。

どうやらロクもラグナと同じことを考えていたようだ。

それが聞こえたのかあのハンターはにやりと微笑を浮かべた。

「おやおや、私ごときをご存知でしたか」

冗談半分で手を胸に当てお辞儀をしてくるティル。

「噂だけな。山賊女統領上がりのハンター。確か常にギルドナイトの監視下に置かれてるとか」

暴食の二つ名の理由はここにあった。

村を襲つては食糧・金品を残さず奪い去り、村を焼き払う。すべてを食らいつくす。

そんなハンターがギルドの監視なしに闊歩することができるわけがなく、今はハンターのハンター、ギルドナイトに常に監視されているはず。

「ああ、だが今は外してもらってる。そんなことより早く森丘に向かったほうがいいんじゃないの？」

つねにニヤついているがちゃんと物事を考えているらしい。

「二十分後に集会所だ」

それだけいい残し家に向かって歩き出す。

後ろからレティア追いかけてくる。

「三人で大丈夫？」

顔を覗き込んでくるレティア。確かに三人では難しいだろう。普通のハンターなら。

「大丈夫だ。残念ながらテイルもかなりの腕の持ち主だ」

それゆえ危険なのだが。

そんなことを話している内に家に着き、支度を整える。

いつもの支度に加え、煙玉を持っていく。

そしてラグナとロクが集会所に着いた時にはテイルはすでに集会所の長椅子に座ってくつろいでいた。

「行くぞ！」

クエストを受け、森丘に4人で向かった。

## 暗殺者現る

森丘 エリア8

何かに見られている。

三人で森丘に来てから、ずっと視線を感じる。  
気のせいだろうか？

いや、確かに足音が聞こえる。  
その数2。

片方は完全に気配を消している。

そしてもう片方は足音を隠すわけでもなく、淡々と歩いてくるのがわかる。

しかし二つの足音の主の姿は見えない。

いや、隠れているのだろう。

この状況下で見えない者の気配に気が付いたのは暴食のティル一人だった。

「やつぱりいるなあ」

ぎりぎり2人に聞こえる程度の大きさで呟く。

「何処にいるかわかるか？」

ラグナが聞くとワザと大きな声で

「いや、分かん」

どうやら山賊だった時に身に着けたスキルらしいのだが、意外に役に立つ。

見えない足音に警戒しながら本題のオオナズチを探す。

オオナズチも姿を周りと同化させて見えなくなる能力を持っている。集中力を最大限に保ちつつエリアの探索にかかる。

森丘 エリア 8 高台

敷積った腐葉土に足を滑らせないようにできるだけ静かに移動する。それでも目標の内、一人だけ自分の存在を気取られた。

それに若干嫌悪感を感じながら追跡を続ける。

下に三人の姿が確認できるが後一人が確認できない。

確かに四人いた。

下の三人がベースキャンプから出てきた後、一人青い帽子の男がベースキャンプから出てきたところを目撃している。

その青い男が途中で消えたのだ。

ずっと見張っていたのだが、森に入った瞬間、姿が見えなくなった。いや、正確には姿を消した、のほうがあっているのかもしれない。

自分より気配を消すのがうまい生物が、しかも人間でいたとは驚きだ。

そんな相手こそ後ろから刃を突き立てるのが面白い。

「しかし今はあの兄妹を殺すのが先・・・」

男のことを頭の片隅に追いやり、三人に目を向ける。

「何処・い・・・かる・？」

「いや、分からん」

2人の話し声が聞こえ、どうやらこちらの位置に相手が気付いていないとわかった瞬間、作戦に移った。

足音をできるだけ小さく、できるだけ早く走り、跳躍。

真上から二刀流のナイフを振りかざして三人に襲い掛かる。

一瞬の出来事で例の兄妹は反応できず、首を切り裂かれ絶命。  
そんな作戦が頭をよぎる。

しかし、騙された。

「アタシは元山賊だぜ？ 騙しや殺しは慣れてんだ」

振り向きざまに暴食の手元が光った。

切りかかる前に左の太ももに鋭い痛みと衝撃。

空中で態勢を崩し、地面に背中から落下したが幸い地面は腐葉土で怪我はしなかったが、左の足が言うことを聞かない。

足を見ると白い液が塗られた投げナイフが浅く刺さっていた。眠り投げナイフだ。

手元が暗くなるのを感じ、顔を上げると二人がこちらを見下していた。

「・・・」

「・・・」

黙っている二人の顔を見比べていると、猛烈な睡魔に襲われ、意識

が遠のいていくのを感じながら意識を手放した。

ベースキャンプ

「・・・兄貴！」

何故かお怒りモードのロクにテントの外で待っていたラグナは呼びつけられた。

「どうした？」

近くで見ると余計に怒っているように見える。

なんだか理不尽だ・・・

「・・・兄貴は医学も学んでるはず」

「まあ、危険な狩りには必須だったから教官から教わった、はず・・・」

殺気だけでランポスの群れが逃げていきそうな勢いのロクに少々弱気になってしまうラグナ。

「・・・ちょっとこっち来て欲しい」

ロクに手を引かれテントの中に入るのだから・・・

「俺が入ったらまずいでしょ!!」

そう。

何故か暗殺者の娘は裸で襲ってきた。

今はテント内のベッドのシーツを体にくるんでいるが、それでも中に入るのはマズイ気がしてやまない。

「・・・いいから」

ラグナの手がロクの握力によって握りつぶされる寸前でテントからティルが出てきた。

「コントやってないで早くしてくれ。ラグナ、あんた傷口縫えるか？」

そこまで聞いてやっと状況を理解できた。

「なるほどね。ロク、説明不足・・・」

「・・・ごめん・・・」

腰に手を当て怒ったふりをする、しゅんと一気に悲しそうな顔になったのでこれ以上怒る気にもなれず、テントの中に入る。

たぶん二人はそこまで医学に詳しくないのだろう。

そこで詳しいラグナに傷口の治療と言うわけか。

「ど、どうも」

ベッドにちょこんと座っている少女が今回の犯人。

左ももには包帯を巻いてあるが、血が大部分を赤く染めている。

「結構大きい傷だな。早く治療しないと。腐葉土の上に落ちたんだ

る？　なんか病原菌が入ってないといいんだが・・・」

ベッドの横に備えつけられている医療セットから針と糸を取り出すと、テント横の綺麗な湧き水を口クに汲んで来させ、解毒薬で傷口を消毒。

「あ、アンタにそこまでやってもらう筋合いは無いわ！」

じたばた暴れる少女を無理やり押さえつけて

「うるせえなあ。暴れると目のやりどころに困るからやめろ。それとお前の考えで行くと赤の他人を治療してる病院は何なんだよ・・・」

「

シートが半分以上はがれていることに気付き、バツとシートを体に手繰り寄せる。

左足を口クに抑えさせ、作業を続行する。

口クはまたもやお怒りモード。

「知らないわよ！」

傷口から目を離さずに口を動かすラグナ。

足を押さえている口クはなぜかお怒りモード。

「じゃあ、知らなくていい。知らなくていいから治療を受けろ」

恐らくこの少女は元モンスター。

紫色の瞳と髪。

ステルス

景色同化の二つから恐らくオオナズチ。

なぜ人間になっているのか。

何故ラグナとロクを襲ってきたのか。

それも大元もジークフリード家の血筋のせいだ。

だとしたらこの少女の傷の治療をするものせめての罪滅ぼしだ。  
それが自己満足だとしても。

傷口を縫い終わると急に静かになった少女は、何かに怯える様に眠りについてしまった。

そしてベースキャンプの入り口には、例の黒い男が立っていた。

しかしいつもの不敵かつ冷酷な笑みは口元には無く、苛立ちが隠せずにはいた。

「無能な奴め！ 俺が直々にあの兄妹を殺しに行つてやる！」

男が一步足を踏み出すだけで足元の草は枯れ、塵となって消えていき、『運命の黒い翼』が男の背中から姿を現した。

が、方翼。

その方翼で乱暴な風を巻き起こしつつベースキャンプへ入っていく、その時。

「そこから先は通すわけにはいかない」

いきなりの奇襲。

男の黒い翼は細身の長剣によって切り裂かれた。

## 対古龍狩人

漆黒の羽が宙を舞う。

騎士剣によつて切り落とされた黒龍の翼がヒラヒラと影より黒い羽を散らしながら地面に落ちる。

いきなりの奇襲に一瞬思考が停止するアス。

劣化していようが、伝説の黒龍の翼を一太刀で切り落とすなど普通の人間に出来ることでない。

恐るべき敵を見ようとアスが振り向く、より早くアスの脇腹に刺突剣が突き刺さる。

「あの血筋を根絶やしにされるのは困る。お前らの存在を消せる唯一の存在だからな・・・」

どすの利いた声が耳元で聞こえる。

視界の端に見えるのは幅広の青い帽子に金の刺繍。

「奴らの本当の存在理由までたどり着いたのか？やるな人間」

痛みと悔しさでさらに顔がゆがむ。

いつの間にかアスの首筋には黒光りする鋭利なナイフが鈍く光っていた。

「ここで引くなら生かしてやろう。しかしこれ以上あの2人を狙うなら・・・」

レイピアを脇腹から一瞬で引き抜き、ブロードソードがアスの足の腱を断ち切った。

足のコントロールを失ったアスはその場に膝をつく。

「この場で殺す・・・」

戸惑いの無い言葉に一瞬ひるむアスだったが、すぐにいつもの不敵な笑みが口元に浮かぶ。

「今のお前では無理だ。たかが4割なら勝てるっても？」

そう言うアスは立ち上がった。

ギルドナイトの男・キリルは目を細めた。

おかしい。

確かに腱を断ち切ったはず・・・。

「古龍の自然治癒力を甘く見たな？」

そう言う背中からタクティクスを片手で軽々と抜き放った。

「ギルドはどこまで知っている？」

「何のことだ？」

真顔で返すとアスは痺れを切らしたように

「あの兄妹の力の存在理由だ！」

激昂した。

「お前らを殺す力だろう？」

訝しむキリルはそれだけを答えた。

「所詮ギルドは懐刀にはその程度しか教えてないのか？」

やはり不敵な笑みで口をゆがめているアスは楽しそうに語り出した。

「なぜ古龍の生態が明らかにされていないのか分かっているのか？」

「知らん！ 調査部の連中がサボってるんだろ！」

「お前、腕は立つが頭がわるいなあ」

表情一つ崩さずに両者の会話は続く。

「死体が無くなるんだ。ばか」

「・・・」

冗談とも本気とも嘘ともとれる言葉を黙って聞いているキリル。

「解体すれば炎王炎妃の連中が何故炎を纏っているのか、テオテス ナナテス鋼龍の奴クシャルタオラが何故風を纏って天候を操るのか、何故、オオナスデ霞龍は姿が消せるのか。全部分かるとは思わないのか？」

「それは・・・」

アスの言っていることは正論だ。

普通なら少数とはいえ古龍を狩ったハンターも居る。

それなのに未だに生態がはっきりしないなどおかしい。

「なぜ死体が無くなるか？ 簡単だ。死んでいないからだ」

「!？」

一種の冗談だろうか？

ここまで前振りの長い冗談は無いと思うが・・・

「死んだのではなく死んだふりだ。人間ときには絶対殺せない。だからと言って殺しても殺しても沸いて来る人間相手に戦つてもこちらが疲れる。だから死んだふりをしてるんだ。しかし馬鹿な狩人<sup>ハンター</sup>共は勝手に殺したと思いこむ。そしてクエスト達成後にギルドの回収班が来るころには飛んでおさらばつてことだ。どうだ？ 筋が通つてるだろ？」

キリルはひどく狼狽していた。

今アスが言っていることが本当なら今まで古龍は遥かに人間をしのぐ存在と言うことだ。

「普通の人間には殺せない。ならば人間に変え、能力を著しく奪つた後で殺すとなれば、話は別だ」

そこまで聞いて気付いた。

それがあの兄妹に流れる血筋の本当の理由。

モンスターを人間に変える本当の理由。

「分かったようだな。殺せない者を殺すための能力。神を殺す力だ。俺達古龍の間では対古龍狩人<sup>レイエンドハンター</sup>と呼ばれている者達だ。だから年の割にはあの兄妹は強い。今となつてはあの2人しか対古龍狩人は居ないがな」

対古龍狩人。人間の切り札にして最終兵器。

色々な言葉がキリルの頭の中をぐるぐると回る。

「良い話を聞かせてもらったな・・・」

いつの間にかにやにやが消えているアスが目の前に立っていた。

「翼と脇腹と今の講座代は」

腕を振り上げるアス。

振り上げた右手には黒龍の漆黒の甲殻と鋭すぎる爪が付いていた。

「お前の命で十分だ」

アスの右腕が風を切り裂いた。

## すれちがい

腕一本なら安いもんだ・・・

左手をかばいながら痛みで顔をしかめるキリル。

あの暗黒の腕が振り下ろされる直前、右に回避をとったのだが、流石は元黒龍。

モンスターだった時の四割程度しか力がないと言っていた。

それが不幸中の幸いだった。

青いグラブを血で赤に染めながらどうにか目の前の脅威から生き延びるすべを考える。

「先ほどまでの威勢は何処に行った？」

左手にはテクティクス。

今は黒龍の力を抑え、右手には神ヶ島を構えている。

「もうじきあの兄妹が気付くと困るのでな」

そう言うのと拡散弾LV1のショットシェルを三発、神ヶ島に装填すると続けざまに連発。

一瞬で空薬莢を弾き出すと空中に放り投げた拡散弾LV2を装填、息つく間もなく乱射を再開。

普通なら反動で連射、再装填はあんなに早くは出来ない。

「もうじき・・・」

願うように走り続けるキリル。

目の前の標的を拡散弾の連射と言う人間離れした攻撃で圧倒しているアスだが・・・

六回目の再装填。

「ちょこまかと!」

拡散弾LV3を装填、狙撃した瞬間、

「なあ!？」

神ヶ島が爆発した。

手元で拡散弾LV3が三発爆発。

「・・・」

息を切らし、肩を上下させるキリルはもうもうと立ち昇る煙を見つめていた。

別に神ヶ島が弾詰まりを起こしたわけではない。<sup>ジャム</sup>

いくらアスが耐えられても、銃が反動に耐えられない。

今の音を聞きつけてベースキャンプから暴食のテイルが慌てて出てきた。

「なんだ!？」

続けてラグナ。

最後にロクと三人とも今の爆発に気づいたらしい。

テイルはキリルを見つけると何故かにやにやし始めた。

「あれえ〜？ <sup>ミッションパーフェクター</sup> 任務達成率100%のキリルさんじゃないですか〜」

わざとらしく大きな声でキリルのことを呼ぶテイル。

「見つかつてはいけない奴に見つかってしまった・・・」

青い幅広の帽子で顔を隠そうと手を頭に持っていくが先ほどの戦いでどこかに落としたらしく、キリルの手はむなしく空をさまようだけだった。

「確かギルドから監視を付けるってほざいてたけど、もしかしてキリルのことだったのか？」

頬を赤く染めながらうつむいているキリルに容赦なく話しかけるティル。

「そうだ。それとこの黒い男が各地でハンターをさらってるって話しだったからな。そいつも確保に来たんだが・・・」

そう言うとき先ほどまで煙が立っていた場所を指さす。三人がつられてそこを見ると

「お前ごとくでは役不足だったな」

いつもの黒い服が少々乱れているアスが立っていた。ダメージは見られない。

「アスッ!!」

「あッ・・・!!」

ラグナロク  
兄妹はそこにアスが立っていることに今きずいたらしく、背中から2人同時に自分の得物を取り出す。ジャキン!と言う音と共に切るというより引き裂く、削り取ると言った表現のほうがりくる

崩刀ウコトカムルバスを抜き放つロクはたから見ると本人より大きい太刀を持っているのはいささか面白い。

一方では火花を散らしながら斧頭がスライドして柄の先端で固定される。超重量のそれは黒と赤のコントラストをまがまがしく醸し出していた。

「久しぶりだな。お前らには殺し合ってもらって一人になったところを殺そうかと思ったんだが・・・」

寄り添う2人を交互に見るといつものニヤニヤがアスの口元に浮かんでいた。

「兄妹愛か・・・」

一瞬、アスの不敵な笑みが苦笑いに変ったような気がした。すると手に持ったタクティクスを背中に戻し、破損した神ヶ島を川に投げ捨てる。

「四人同時はこちらもただじゃ済まないか。今回は見逃してやる」

そう言うのと四人に背中を向けて、再び森丘に向かい始めるアス。足元の草花が枯れ、塵になり風に乗って消えてゆく。

「リオルグを攫ったのはお前か!!」

足を止めて肩越しに振り返ると

「リオルグ？ あの小僧のことが。攫ったわけじゃない。勝手に付いてきたんだ。なあ」

ボン、と手を置いたと思ったらそこにはリオルグが居た。

リオルグは邪魔そうにその手を振り払うとラグナをにらみつけてきた。

「リオルグ？」

うめき声のように声が出てしまう。

アスから対古龍狩人のことを聞かされたリオルグは怒りに燃えていた。

「お前、俺の大切な人まで奪って、最後には俺達を殺す気か？」

「何言ってるんだ？」

自分達がレディエンドハンター対古龍狩人と言うことを知らないラグナは何を言っているのか理解不能だった。

「しらばっくれるな糞野郎！」

恐るべき跳躍力で飛び上がると背中が無骨な獲物、ボーンスラッシュでラグナに切りかかる。  
それを手で掴んで受け止めるラグナ。

「何を言われた？」

ぎろりと殺気に満ちた目で睨まれたリオルグは思わず腕の力を抜いてしまう。

「何を言われた！！」

刃の部分を掴んでいたラグナは手が切れることも構わずボーンスラッシャーを握りつぶす。

刀身から柄までひびが走り、数秒後リオルグの手には何も残っていなかった。

「お前は人さまに言われたことに振り回されて、どれだけレティアと皆を心配させたと思っただるんだ!!」

いきなりの怒声に体をすくめるリオルグだったがすぐに恐怖から怒りに表情が変わった。

「お前のせいだ! お前があいつを奪うから! お前が俺から大事な人を奪うからだ!!」

「レティアのことが」

何故か自分で言うておいて急に気恥かしくなってきたリオルグ。顔が熱くなるのを感じて慌てて下を向く。

「あいつが俺の近くに居た理由は俺から狩りの技術スキルを見て盗むためだ」

「な、なにを・・・」

「狩りは話して分かるようなものじゃない。聞くより見る。見るより実戦だ。それで出来るだけ俺の近くに居るようにしたんだろう。なんでだと思っつ?」

考えてみる、とラグナに言われた。何故かアスがいつもの顔でこちらを見ている。

それはただ単純にラグナの近くにいたかったからなのでは？  
そんな考えが頭をよぎった瞬間ラグナが口を開いた。

「狩りとは仲間との信頼と絆が勝利を作るものである。と言っても俺と組むなんてジンくらいしいしかなかったけどな」

苦笑いをしながら説教臭いことをつづったラグナ。

「・・・？」

「男女では実力の付く速度が違うからな。お前との実力差を感じてたんだろ。出来るだけお前に頼れるハンターになるんだって、頑張ってたぜ？」

俺のため？

俺のために頑張ってたのか？  
しかもこの考えは・・・。

「良かったな」

そんな声が聞こえてきた先に居たのは意外に意外な黒ずくめの男だった。

「お前がリオルグをここまで追い詰めたんだろ！！」

「ち、違う！　違うよラグナ！」

慌てて止めに入るリオルグ。  
怒りに支配されているラグナは視線を向けられただけで死に絶えると言つ恐怖に支配される。

「ん？ ああ、すまん」

「アスは最初からそう言ってたんだ・・・」

「はあ？」

リオルグの話を以外にも聞いてくれたのはアスだった。

冗談混じりにもそう言っていたのはアスだった。

しかし自分でその怒りに付けこみ、リオルグを操ったのに、自分で解決するとはどういうことなのだろうか。

疑問に思いながらアスの方を見ると草花の枯れた跡が道のように見えないところまで続いていた。

## 赤・青・黄・白の四姉妹

一つの狩り場に舞う赤・青・黄・白の影。

まるで蝶チョウのようにヒラヒラと舞うそれらは沼地の將軍・シヨウゲンギザミの長く、鋭い爪を危なげも無く避け、手に持った一対、合計八本の双剣がまるで鏡映しのように硬く鋭利な甲殻種の体を切り刻む。

毒、麻痺毒、氷の刃が哀れな獲物の命を削り取る。

自分が狩られる側だと気付いた時には既に遅し。毒が体を蝕み、麻痺毒が自由を奪う。

先ほどまで人間とは比べ物にならないほどの生命力を誇っていた生き物が今、力尽きた。

手に持った一対の剣を背中におさめた四人は剥ぎ取りを終えると四人全く同じ足取りでベースキャンプに戻って行った。

ココット村

この頃朝起きると体が重い。

別に疲れているわけじゃないし、寝不足なわけでもない。

この重さの原因は・・・

「おい」

「・・・」

しかもとある理由でアイマスクを付けて寝ている。

決して広くはない家の中にこの頃では六人で住んでいる。

もうじき村長に頼んで改装してもらうか、新しく立てるつもりだが、

今はそんなことはどうでもいい。

アイテムボックスとベッド以外何もない質素な部屋のなか、はたから見たら独り言を言っているか、危ない人に見られかねない声の大きさで、重みを感じている腹の上に話しかける。

「居るのは分かってる。だっておナズ、重」

重いまで言う前に顔面にパンチが飛んできた。

「重くないもん!!」

「いい加減に服を着てくれ・・・//」

いきなり目の前が色白の肌が現れたと思ったら紫色の瞳が印象的な少女・命名ナズの顔がラグナの目の前に現れた。  
しかも裸で・・・。

「その嬉し恥ずかしいイベントのせいでロクがブチギレる原因になることを知ってやってるんだろ！ 確信犯だ！ おまわりさん！」

「だって面白いんだもん」

元モンスターだからなのか服を着ていなくても堂々と動き回るので目のやりどころに困る。

服を着ないのは服までは透明になれないらしく、裸じゃないと気付かれるから、とのことだが。

「腹減ったからどいてくれ」

「やだ」

駄々をこねるナズを腹の上からどかそうとして手が止まる。  
理由は簡単。何か凄い殺気が近づいてきているからで。

「兄貴！！」

ドアを蹴り破って入ってきたロク。

クワッ！と目を見開いた先には寝ているラグナに裸で抱きついて  
いるナズとそれを嬉恥ずかしそうに（押しのけるための）手をナズの  
肩に置いているラグナ。

「・・・」

ナズが部屋に入ってきたと、この頃、アグレッシブ元氣なロクに殺される。

昼食後、

酒場で朝食を済ませたラグナ達は集会所前のベンチで一息付いてい  
た。

そこに、どこぞの軍隊のように足並みをそろえた人影、その数4。

村人たちの注目を集めながら集会所に向かう四人。

注目されている理由はその容姿と防具とアホ毛。

防具を烏竜種で統一している四人組。

しかし普通の防具ではなく、Sシリーズだ。

普通の防具を限界の近くまで強化することで出来るのがSシリーズ  
だ。

次に鋭い通りの顎に、通った鼻筋、燃える赤色に蒼穹の青に太陽の  
黄に粉雪の白の瞳＋四色のアホ毛がびよこびよこと風になびく。

一切乱れぬ足取りでラグナ達の前に仁王立ちで立ちはだかった四人。

赤い髪の少女が、

「勝負だ！ ラグナ、いや破壊神！」

いきなりの宣戦布告に怪訝な顔を浮かべるラグナに、意味も無くたいていして無い胸を張る四人。

一般人が見ると駆け出しハンターを思い浮かべさせる四人だが、ラグナは一目でかなりの腕ということを見抜いていた。

「ひとまず名を名乗ろうか」

ロクとテイルから冷たい目線を感じるがひとまず置いておこう。

「長女のイース」

「次女にラースよ」

「三女のネスです」

「四女のノースだ」

名前を一通り言った後、アイコンタクトをとった四人はまた喋り出した。

「四人一組で」

「闘技場の指定」

「モンちゅターをどちらが」

「早く狩れるか勝負だ！」

ラグナの話をガン無視で話を勧める四人。ちょっと一人噛んでいた

がまるで打ち合わせをしてあったかのように四人でちょうど良く区切って話す四人の話し方を聞いていて軽い頭痛を覚えるラグナだが一応これでもボロ雑巾のようなプライドはある。

「やめとけやめとけ。勝負なんかしたって何も得が無い」

ティルがごもつともなことを言うが、少女の挑戦を断っては破壊神の名がすたる。

「俺が勝つたらなんか良い物もらえるの？」

ロクが心配そうな顔で見えていたが大丈夫と頭をなでて四人に顔を戻す。

「もちろん！」

「何ももらえるの？」

「それは」

「言えないな」

「勝つてからの」

「お楽しみ」

なんだかかなり胡散臭いが一応受けておいて損はないようだ。

「受けて立とう！」

「ちなみにそつちが」

「負けたら」

「あたし達の」

「お嬢さんになってもらうから覚悟しておきなさいよ！」

## イースの起点

不毛の灼熱地獄 火山。

そこに生息する赤い悪魔の群れ。

通称イースと呼ばれる毒を吐く鳥竜種。

その中でもひととき大きな個体・ドスイースと呼ばれる個体が群れをまとめる長として君臨する。

しかし、鳥竜種走竜下目最強と言えどそれは飛竜種、金獅子や炎王には遠く及ばない。

火山の頂点に立つ存在・グラビモス。

オルタナティブ・ラーション テオ・テスカトル  
規格外の金獅子や炎王など居るものの生まれたばかりの子供は見たことも無く、やってきたとしても大人のイース達に巢の奥に追いやられてしまうのだ。

そこでまだ何も知らないイースは金獅子がやってきたと言う噂を聞き、こっそり巢の外へ抜け出した。

幸い途中に誰にも見つからずに済んだ。

そして、見た。

黒い四肢は前足だけ異様に発達、破壊に特化したようにイースには見えた。

そこに変わったハンターが一人現れた。

砂色のどこぞの祭りで使うような防具を纏ったハンターは腰に一振りの剣。

周りの空気が張り詰めるほどの冷気を纏った剣を腰に、氷の結晶を思わせる盾が手に握られていた。

それに気付いたラーションは怒りがいきなり沸点に達した。

金色の衣をまとったラーション。

まさしく獅子。

「すごいッ！」

思わず歓声を上げていた。

地面を削りながらのラリアットやグラビモスにも劣らぬ威力のブレスを立てつづけに繰り出す。

空高く飛び上がった金獅子は自分の体を球体にすると自分自身雷を纏まとうと一気にハンターめがけて急降下。直前までハンターが居た場所が砕け、周りにはスパークが唸りを上げる。

距離が開き、防戦一方だったハンターはポーチから何かを取り出すとラージャンが自分に振り向くタイミングをはかって地面に叩きつけた。

しかしラージャンはまたしても空高く跳んでおり、閃光玉の効果は無かったのだが。

その命の駆け引きをぽかんと口をあけて凝視していたイースにはこれでもかと言うほど眼球にその光が直撃したわけで……

「あれ？」

何故か視界が狭くなったが立体的に前が見えるようになったことに気付きふと自分を見してみる。

人間です……。

胸のあたりにある微妙な膨らみは、なぜか隠していないと気恥かしい気がする……。

その後ラージャンがエリアを移動。

自分達の巣があるエリアの方向に向かっていくところを見て顔を青くするイース。

慌ててハンターの後を気付かれないように付いて行く。

別エリアへ

しかし・・・

（見つかったッ！！）

エリアに入った瞬間にラージャンがハンターに向かって突進してきたのだ。

そのさいに後ろにいたイースは見つかってしまったのだ。

（こゝ殺される・・・）

必死に逃げようとするイースの前に一飛びで追いついたラージャン。自分達の縄張りに侵入してきた外敵を排除するために兵隊役の大人達たちと長がイースの存在に気付く。

イース、ハンターと金獅子きんしゅてきに向かって攻撃を開始したイース達。しかしラージャンとハンターの手によってイースのところまで来ることはなかった。

見知った大人達がハンターの冷気を帯びた剣により凍死、もしくは斬殺され、金獅子の攻撃を喰らい、砕けていく。

そして群れの長にしてイースの父であるドスィーオスもラージャンの拳をこめかみに受け、動かなくなった。

「ッ！！」

声を上げようとしたが、今声を出すと自分も殺される。そんな恐怖がイースを支配していた。

（たぶん、今は生かされてるんだ・・・）

自分のことなどハンターを殺した後でも腕の一振りで殺せる、とでも考えてるのだろう。

お構いなしにハンターとラージャンの攻防は続く。

土煙を上げ熱気を切り裂きながらハンターを狙い拳を振りおろす。それを金獅子の下に潜り込むことで避けると腹の下で剣をためらわずに振り回すハンター。

血しぶきを上げるはずの傷口は冷氣により凍結、血しぶきは芸術的な形で固まっていた。

いきなり視界から消えた敵を探し、<sup>ハンター</sup>恐ろしい巻き角が付いた頭をせわしく動かすラージャンを挑発するようにワザとラージャンの目の前に出ると顔に剣を一閃。

バキンッ！と巻き角の片方が軽々しく切断された。

恐らくイースが来る前から戦い始めていたのだろっ。改めてみると所々今のものではない傷が複数見られる。

巢のほうからドスイーオスがやられたことによる混乱の声とイースを探す声が聞こえる。

「セイヤアアアア！」

体ごと地面にたたきつけて圧死させようとしていたラージャンの背中にハンターは飛び乗りその頭に剣を振り下ろした。

グラリと体が揺れて地響きを立てて金の獅子は動かなくなった。

結局その後ハンターに保護され、近くの村にそのハンターと住むことになった。

人間の言葉は分かるし、特に不便なことはなかった。  
むしろ楽しくさえあった。

仲間が目の前のハンターに殺されたことに目をつぶれば。

グロムバオムという村に住み始めて一か月。

ハンターになることに特に拒絶感は無かった。

自分の群れを狩ることはできないが、それ以外なら特に繋がりも無く、仲間でもないモンスターは逆に敵でも有った。

「そう言えば」

「・・・？」

例のハンター・レーバはいつも朝食は野菜しか食べないという変わった食習慣だ。

「モンスターを人間に変える能力を持ったハンターの情報手に入ってたよ」

「ほんと！？　どんな？」

元イーオスと言うことを隠している。

今の生活も楽しいが、いつかはモンスターに戻りたいとは思っている。

そこでモンスターを人間に帰ることができるハンターなら自分をモンスターに戻せることが出来るとおもったのだ。

残念ながらレーバは今まで閃光玉を使っても特に変わったことは起こっていないと言っていて、この前のは偶然だったのか、なにかの条件下でたまたま効果が表れただけなのかは分からない。

「名前はラグナ・ジークフリード」

何やら個人情報載っているらしき紙を真剣に見ながらため息をついているレーバ。

「すごいな・・・。大型モンスターの狩猟数が半端じゃない。名前は知っていたがここまでとは・・・」

何やらものすごい人らしい。

この村にはバードともう一人のハンターしか居ないためどのくらいがすごいのか分からないがレーバがここまで賞賛するところなど見たことも無かった。

「しかも見てみるよ」

一枚の写真を渡され、それを見ると一人の男が写っていた。

「か、カッコいい・・・／＼／」

「しかも稼ぎが滅茶苦茶良いし周りの村からだけじゃなく困ってる遠い小さい村からの依頼もこなすらしい」

熱っぽい溜息が出てくる。

「稼ぎが良くて心が広く、しかも見た目も良いと。良いやつそうじゃないか。知り合いにこいつのダチが居る。お前のこともどうにかしてくれるんじゃないか？」

こうしてイースの二つの目的の旅が始まった。

## ラーズの原点

「はあ？ 結婚？ 嫌よそんなの。めんどくさい」

「いい加減に相手を決めてくれないと俺も母さんも安心できないだろ」

アバン家の一人娘として生まれたラーズの両親は2人ともハンター業をしていることもあり、ラーズ自身も物ごろついた時にはハンターになっていた。

ラーズの両親は特に優れたハンターではなく、ただただ村のためにコツコツと頑張るハンターだった。

そんな家庭に生まれたのは男ではなく可憐な見た目が台無しな男勝りな女の子だった。両親共に男だったらハンターを、女だったら普通に家事をさせるつもりだったらしい。ハンターはいつ命を落としてもおかしくない職業なのだ。普通に考えてそんな危険な職業に可愛い一人娘を放り出すわけにはいかない。

しかしラーズはバリバリの現役ハンターだった。

ハンターになった十四歳から二年足らずで両親以上の活躍ができるようになり、瞬く間に村の未来を担うハンターになっていたと同時に、両親の不安は増していった。

優秀になればそれだけ危険度の高い依頼が回って来る。

そんな危険な狩りばかり娘を出すわけにはいかない。

そこでラーズの両親は少し早い結婚の話を持ち出したのだ、が

「一か月以上断りつづけてるじゃないか！ この前の大商人の息子も断ったし、有能ハンターも断った。一体どんな相手なら良いんだ？」

とうとう父親が痺れを切らして声を荒げる。

まあ、当然と言えば当然である。

両親が持つてくるお見合い話を全て実績を見るだけで断っているのだ。

すでに20人近くも。

「あたしより強くてあたしとならんでも見劣りしなくてあたしが認める人」

ニヤリと笑いながらハードルの高い注文を出すラース。

「お前より強いハンターなら腐るほどいるだろう？ 見劣りしないとなるとかなり絞られるがお前が認めるとはどういうことなのだ？」

父親はどうしてもハンターを可愛い一人娘にハンターをやめさせたいらしく、かなり必死に相手を探しているようだ。  
念入りに注文を聞いて来る。

「私がこの人だ！つて直感した人ってこと」

「んな無茶な・・・」

いくら父親でも娘の直感なんて分かるはずもなく、頭を抱えていた。

「最後の注文は無理としても前の二つが当てはまるハンターを探して来る・・・」

沢山連れてく居れば一人ぐらい良い人が居るだろうと覚悟を決めた父親はまた家を出て行った。

母親がにこやかな笑顔をたたえて楽しげに椅子の上で揺れているラ

ースに近ずいてくる。

「あなた、もしかしてもう好きな人が居るんじゃないの？」

ぴくんツ！と一瞬動きが止まるリースだったがすぐに「ツ！と笑うと母親の顔を見返した。

「何言ってるの母さん。そんなこと無いよ」

「さしずめこの前村に来たラグナさんじゃないの？」

「・・・」

「ほら図星」

「ち、違うよ！？ あんな女みたいな奴のこと好きになるわけ無いじゃない！ 違うんだよ！？」

わたわたと手を顔の前でせわしく行き来させるリース。先ほどまでも余裕がすでにどこかに消えてしまっていた。

「じゃあ、今度お父さんが連れてくる人たちから選ぶか、ラグナさんを選ぶ。どっちが良い？」

ニヤリと嫌な微笑をたたえる母。リースの原点ここにあり。

「ま、まあそれならしょうがなく、ラグナとかって奴の方がいいと思うけど？」

頬を桜色に染めながらそっぽを向くリース。

「やっぱラグナさんが好きなんじゃない」

「か、勘違いしないでよね！ 別に写真と情報だけの相手より、実際に見たことのあるあいつのほうが良いだけだからね！」

はいはいと軽く流された。

流石母親。考えていることは見透かされていたらしい。ずっと駄々をこねて見合いを断わり続ける。

父親が諦めて自分で相手を探しに行つて来いと言つたらさっそくジヤンボ村に行つてラグナを婿に迎えるつもりだったのだが・・・。

「強いし！優しいし！！稼ぎも良いし！！！！ 三拍子揃つててお母さんは賛成ですよ？」

「べ、別にあいつが良いってわけじゃないし！」

改めて言われると猛烈に恥ずかしい。顔中を赤く染めて首を横に振る。

心を読まれているようで気持ち悪いので一応否定はしておくがぶっちゃけマジで半年ほど前に自分たちではお手上げ状態の依頼を受けにこの村を訪れたラグナのことが頭から離れなくなっていた。寝る時など特に必ず考えてしまう。入浴中なども知らず知らずに彼のことを考えている自分に気付いていた。

たった二日間だけだが一緒に過ごした日のことも今でも鮮明に覚えている。

「良いじゃない。ラグナさんのところに行つておいで！ あんたがラグナさんと結婚して大人しくなってくれるならそれであたし達は満足だから」

「お父さんは？」

さきほどラースの困った条件に頭を抱えてまたしてもお見合い相手を探しに行った父親のことが心配になった。

「あたしから説明しておくわ。だから行っておいで」

母親特有の何故か心が休まる笑顔で言われると無性に残りたくなる。しかし自分の恋と両親の願いが同じものなら一石二鳥だ。このままラグナを婿に迎え入れれば両親は安泰。自分も幸せな家庭を築けるような気がした。

「分かった！ 言って来るね！」

最低限の荷物をポーチに詰めると村を飛び出し、竜車を捕まえた。そこで出会ったのは自分と瓜二つの顔をした年上美人。それがラースとイースの出会いだった。

## 異端の双子

「すごい！ 鉄製のスプーンをここまで簡単に！！」

村の住民は一気に活気づいた。

理由は単純にして簡単。

ハンターズギルド非公式の狩猟グループへの賛同。

異端能力者だけを集めた狩猟集団・聖なる力の経済能力はすさまじく、異端能力者を一人でも献上すれば一気に村はかつてない繁栄を遂げるだろう。

それが2人もこの村から出るのとなればなおさらである。

現代で言う超能力者の集まり。

超能力を駆使してモンスターを狩るグループは極めて少数だったが、今となつてはハンターズギルドの弾圧と異端能力者の人数の少なさにより聖なる力以外のグループは消滅してしまった。

そんなごく稀に生まれてくる貴重な人材は双子だった。

両親は異国の地からこの地にやってきた異国ハンターで、妹は父親、  
姉は母親の血を濃く受け継いでおり、姉は金髪<sup>ブロンド</sup>、妹は銀髪<sup>プラチナ</sup>という対照的な双子が誕生した。

両親は6歳の子供を残し、村を守り、死亡。

幼い双子は村の住民全員で大事に育ててきた。

村の存続をかけて・・・

「今日から君達の保護者になるロノウエという者だ」

7歳の誕生日と共にギルド非公式、見つければギルドナイトの聖剣によって存在したい末梢されてしまう危険性のある組織に入団。

入団式には団員全員の注目を浴びながら新しい暮らしに飛び込んでいく双子。

「姉のネスです。よろしく願いします！」

総員13名の聖なる力は双子を加えて15人になる。

それでも十五人しかいないとなるとギルドとまともに衝突したら二日持たないだろう。

「妹のノースだ。以後よろしく頼む」

七歳とはとても思えない口調でいきなり挨拶をぶちかましたノース。双子とはいえ妹なのだが、超能力はノースのほうがネスより格段に強い。

ネスが頑張ってスプーンを曲げている時には既に、大気中の湿度を操ることさえも可能になっていた。

今、この団で期待の新人ということだ。

「副団長のガーブってんだ。よろしくなお嬢ちゃん達」

気さくにあいさつを返してくれたのは軽く2メートルを超える長身の老兵、副団長のガーブ。

仲間内では団長より信頼されているらしい頼れる人物だった。

「嬢ちゃん達、ちょっと良いか？」

入団式が終わり、2人の部屋に案内された時にガーブが2人が部屋に入ろうとして所を呼びとめた。

聖なる力本部は崖の中腹をくりぬいて作っているため、壁は岩が露

骨にむき出している。

「この団の規則はさっきの入団式で聞いたよな？」

顔を見合わせた双子は再びガープの顔を見てくくんとうなずきノースが答える。

「えつと、一つ・決して仲間を裏切らない。一つ・聖なる力は神のために。一つ・神への敬いの心を常に持つこと」

超能力は神の力。

それが団長の考え。

神を敬いながらも悪魔の名前を持つ団長の。

「よくおぼえてるなあ。その一つめだが、それを破っている者がいる。異能力者で有りながらハンターズギルドの人間が」

2年後

「お前から神様って信じるか？」

二年と言つ子供には長いようで短い時間がここに来てからたつていた。

ここの暮らしも慣れ、すでに自然になっている食堂での食事中にガープとガープの弟子・ランドがネスとノースの向かいに座る。

「いきなりどうしたの？」

ネスがごもつともな返しをする。

「はは！ ごもつともだ！ まあ、団長の言う神様ってのは、実際の所ただの人間なんだよな」

「・・・師匠！」

「まあ、いいじゃねえか」

何やら難しそうな話をしているが、こちらには何を話しているのか分からない。

「神はジークっていう人物なんだ。そいつを団長は神と敬っている。そいつはギルドも必要とするほどの力を持っている。いや、人間はそいつが居ないと絶滅だ。だが、そいつが居るとモンスターが絶滅する可能性もある」

「団長はその人との認識はあるのか？」

相変わらずどこぞの軍隊さながらの口調でノースが疑問をぶつける。

「ない。ただの熱狂的な信者だ」

7年後、

ガープの警戒もむなしく団員第参席の実力者が団を裏切り、ギルドへ聖なる力への攻撃命令を下した。ギルドナイトが本部を襲ったのだ。対人間用訓練を積んだ、人間を狩るものたちによって仲間は今々と殺されていく。

「おい！お前たちは逃げる！ラグナの奴の所に行け！アイツならギルドもつかつに手を出せないはずだ！」

目の前のギルドナイトを切り伏せながら2人の退路を切り開きながら、2人を逃げさせるガープ。

必死に逃げた2人はいつの間にか居なくなっていたガープに気付いたのは、一晩明けてからだった。

逃走中～回想～

ジークが行方不明、代わりにラグナという名前の子供が居ることが判明した。

その男に何故そこまで団長が引かれたのか。

理解が出来ない。

しかしそれを知っていたガープが何故この団を抜けなかったのか。それはそのラグナと言う男の器の大きさに引かれたかららしい。

「あいつは破壊神なんて物騒な肩書を持っているが、別に戦神でもなければ殺戮マシーンでもない。ただの心優しい、ハンターだ。一度あいつに会ってるが、良い奴だった。写真もあるぞ？」

ガープが胸から取り出したりオレウスの皮で作ったパスケースには女にも見える中性的な顔の持ち主が写っていた。

「お前らも絶対あいつの器の大きさに引かれるぜ？一度会えば分かる。一度会ってみたらどうだ？」

ガハハッ！と豪快に戦国武将のごとく笑うガープの顔が今でも脳裏

に浮かぶ。

逃げる途中、街や小さな村でも必ずと言って良いほどラグナの活躍を耳にする。

困っているならちいなさ村依頼でも時間をかけてやってきて受けてくれる。

そんな会っても居ない人物に、2人は引かれつつあった。

そして、やっとの思いでラグナの居場所を突き止めた2人は途中の竜車で思いがけない出会いを果たす。

自分たちと瓜二つの顔を持つ気の合う2人。

イースとラースと名乗る2人と姉妹の契りを交わし、ラグナの元へ。

後に百花繚乱と言われるパーティーの誕生であった。

## 百花繚乱

闘技場の中、ズドンと地響きと土煙を立てながら崩れおちた鎧竜は見るも無残な姿をしていた。

腹の甲殻は砕けたというより無理やり剥がされ、甲殻と組織は繋がったままえぐられていた。

土煙が晴れた時それを見降ろしていたのは一人の男。

「ふう。切れ味がそれほど良くないこの武器じゃ不利だったな・・・」

「

「クエスト終了だ。戻ってこい」

教官の声が闘技場に響く。

グラビモスも教官が捕獲した物だ。

それを闘技場に放して訪れたハンターに狩らせる。

この闘技場も初心者に狩りを教えることが生きがいとなっている教官が用意してくれた。

「ちなみに今のでお前の三連勝だ」

四人の挑戦は長女イス曰く「四回の内、私たちが一回でも勝てば私たちの勝ち。四回貴方が勝ったら良い物を四個あげる」らしい。

「お、あつちも今終わったぞ」

闘技場の上から縄梯子を投げ入れてもらい、一度闘技場から退場する。

「あと一回は俺が相手を決めて良いんだよな？」

「いいわよ！」

「なんで怒ってるんだよ……」

「一対一で狩猟時間を競っているわけではない。」

「四対一で三回も狩猟時間が一のほうが短いとは普通に悔しい。」

「そんな中最後の狩猟はラグナがモンスターを決めて良いとのことだった。」

「じゃあ教官。最後はフルフルで」

「え？ フルフル？ アイツを二頭用意するのはかなり難しく、一頭でもビリビリ！って怖いのに二頭も捕まえるとかちよつと無理臭いというかなんというか……」

「教官ってなんでも捕まえられますか？　すごい！　憧れちゃいます！」

「やりましょう！」

「なんだかんだで最後の標的はフルフルに決まり、対決は二日後になった。」

ラグナの家→ラグナの部屋

目標モンスターを教官が捕まえて来るまで休戦になるため、その間

結構ヒマだったりヒマじゃ無かったり。

結局対決を始めてから二週間。

地味に長い時間が経っており、ラグナやロクやティル、キリルの権力によりギルドより人を呼びよせてこの期間でラグナの家、もとい貸家はかなり大きくなっていた。

と言っても一番外側の部屋と廊下の壁をぶち抜いて、そこに無理やり新しい部屋や廊下をつなげただけの即席の貸家だ。

しかも風呂が大きいが一つしかないというちょっと嬉しいオプショ  
ン付き。

「ええっと、これは？」

「お邪魔してます」

闘技場帰りのついでに消耗品やアイテムを買って帰ってきたのだが、  
何故か心休まる家には例の四姉妹が・・・

「おい。俺の部屋だ出てけ」

「へえ。あ、そう」

「おい！　ここは貸家だから別に居ても構わんが、なぜ俺の部屋に  
いる！？」

「他に部屋が空いてなかったから」

「嘘つきだ！　改装したばっかだぞ！　そんなに人が湧いて出てく  
るはずないだろ！　不法侵入者だ！　おまわりさ〜ん！」

「嘘じゃないわ。今は大商隊がこの村に来てるらしくてここの空き

部屋を使つて部屋がないらしいの」

本気と書いてマジと読みそうなイースが真剣な顔を近づけながら事情を説明して来るのでつついっ流されてしまった。

「わかったよ。ここはお前らが使つていいぞ。俺は適当な奴の部屋に泊まらせてもらう」

そう言つてポーチに必要最低限の物を入れ、部屋を出る。  
無駄に長くなつた廊下を一人さびしく歩いて行く。

「キリルにでも頼むか・・・」

キリルの部屋の前

「残念ながらそれは無理だ」

「おい！キリル、早く酒持つてこい！」

何故か奥の方からティルの声が聞こえる。

「おい！早く早く！！」

「と、言うことだ。他をあたつてくれ」

ボタンと言う乾いた音と共にドアが閉まつてしまった。  
また一人で廊下をうろついているとリオルグを見つけた。  
チャンスちゃうの？

「おい、リオルグ。今晚お前の部屋に泊めてくんねえか？」

何やらうつろと挙動不審なりオルグは弾かれたようにこちらを振り返る。

「いや、それはちょっと・・・」

「てか、なんでお前自分の部屋の前でうつろついてんだ？」

ふとりオルグがうつろついていた部屋の表札を見るとりオルグの名前とハートマークを挟んでレティアの名前が・・・

「・・・邪魔したなッ！」

その場をりオルグの弁解の余地も無く逃げるように去って行っただけだ。

ロクの部屋前へ

二回咳払いをして、手に汗握りながら自分の妹の部屋のドアをたたく。

今思えばロクの部屋に入るのはこれが初めてだったような気がする。

「・・・」

無言であけられたドアの向こうにはラフな格好のロクがいた。以外にも中はピンク色系統の家具や小物で統一されていた。

「なに？」

何やらいつも見ない姿に自分の妹ながらトギマギしてしまう。

「いや、俺の部屋が例の四姉妹に占領されちゃってさ。今夜泊めてもらえないか？」

一瞬口クの頬が赤くなったようなような気がしたが気のせいだろうか。

「別に良い」

「ホントか！？」

見知っている男の使っている部屋が二連続で断られているだけあって、かなり嬉しい。

「てか、四姉妹あいつ一つの部屋でせまくないのか？」

「早く入って」

「あ、わりい」

改めて入ってみると何故か落ち着かない。

きっと今まで女の子の部屋に入ることがなかったからだろう。

「兄貴、もうお風呂入った？」

「いいや」

「もうじき入浴時間終わっちゃうよ？」

早くしないと、言いながらロクが指さした先のアイルーの時計は午後9：30をさしていた。

「やべえ！ 早く行かないと！」

ダッシュで浴場に向かおうとしたところでガシッ！とロクに腕を掴まれた。

「あ、あたしも行く！」

「・・・はい？」

浴場へ

「妹だろ！ 何を緊張してるんだ！」

必死に自分に言い聞かせるラグナ。

いくら妹と言ってもつい最近まで存在すら知らなかったし、何より見た目は半端無く可愛い。

そんな美少女と混浴とか他人に見られたら死亡フラグ・・・

なんかこの頃嬉恥ずかしいイベントが多いような気がする・・・

そんなことを考えていたらカラカラと誰かが入って来る音がする。

「ええええ！」

そんな必要ないと思っても何故か隠れてしまう、それが男の悲しい宿命。

湯船が波打つ感じがする。

頭まで湯船につかっているため顔や体は全く見えない。  
いや、見たら何か大切なものを失うような気がする。

そして二回目のカラカラ・・・

「えッ!？」

また誰が入ってきた!？

「ヤバい！ ロク誰か!？」

何故考えなかったのだろうか？

本当はこの時間は女性入浴時間なのだ。

2人以外に誰が入って来ると言うことを何故考えなかったのだろうか。

ぎりぎりの時間だったので管理人に無理を言って入れてもらってる  
のだが・・・

「ッ!？」

「ええ!？」

見覚えのない、詳しく言うと頭の片隅にぼんやりと残っている顔が  
そこにあった。

「もしかしてセレナ？」

百花繚乱（後書き）

セレナについては第13部 老山龍 襲来!!を見てください。

神速（前書き）

遅れました・・・。  
大変申し訳ない><

## 神速

砂色一色の闘技場に白い飛竜が一匹、鼻をひくつかせて歩き回っている。

白い悪魔・フルフル。

暗く湿度の高い場所に生息する飛竜の一種で、目が退化し視力がなく、代わりにずば抜けた嗅覚と獲物の動きを止めるために発達した電気袋を活用した電撃攻撃を得意とする。

一節によると体温を感知する器官が存在するという噂もあるが、未だに真相はわからない。

闘技場を一周したあたりで、フルフルの動きが一瞬止まり振り向く。

「こいつをいつ見ても嫌悪感に包まれるのは私だけじゃないはず」

フルフルの先には人影。人だと感知したフルフルは攻撃態勢に入る。体内から口に電撃を集め、複数の敵に電撃を口から3つに分けて放つ。

それを軽々避けるのは四人。

ひらひらとフルフルの攻撃を避け、スキあらば一気に斬りかかる。

「ヴォオオオオッ!!」

たまりかねたフルフルは思わずバインドボイスで敵の動きを止める。

「キャッ!」

「うるさ〜い!」

思わず耳を塞いでしまう四人。これだけはいくことを聞かない本能

とるさくで耳を塞いでしまう理性の2つで身動きがとれなくなってしまう。  
その隙に

「ヴォ・ヴォ・ヴォオオ！」

近くに寄っていた外敵をなぎ払うように自分を軸に電気を撒き散らすフルフル。

イス、ラース、ネスはその電撃に巻き込まれ吹き飛ばされる。

壁際まで吹き飛ばされると不自然にビクつきネスは動かなくなった。吹き飛ばされた二人も言うことを聞かない足を無理やり言うことを聞かせ陣形を立て直す。

「ネス！」

「ヤバイわね・・・」

「ノースはネスの様子を！」

ノースが彼女の性格からは考えられない悲鳴を上げてネスに駆け寄るとネスは気絶しているだけということがわかり、三人は安心のため息をつく。

するとどこからともなく車輪付きのタンクを引いて現れたアイルーたちがノースをベースキャンプまで運んでいった。

「しばらくは三人で行くわよ！ ラースは左翼、ノースは右翼から！ あたしは正面から激突よ！」

視線だけでタイミングを合わせ一気に土煙を上げながら散開、ノースとノースは大きく回りこみフルフルを挟み撃ちに。

「もらったあああ!!」

「いつけええええ!!」

大きく踏み出した一歩で双剣を抜き放ち、勢いを殺さず一対の剣を突き出す。

交差させてつきだした剣を剥ぎ払うように振り払う。

フルフルが目の中のイースに気を取られているうちに攻撃に出る。

右手の剣を右斜に振り下ろし、次の瞬間には刃を裏返して右上に振り上げ、その勢いのまま左の剣で自分の上半身も回る形でもう一撃。体を捻った戻す勢いでもう2撃。

そこでフルフルが回転を始める。

短いぶん強力な尻尾は誰もいない場所を行き来する。

フルフルの動きが止まった瞬間、三人の雰囲気が変わった。

鬼人化。

双剣使い最大の奥義にして最強の技。

この技が使いこなせなければ双剣を5割使いこなせていないも同然。目にも留まらぬ斬撃を繰り出せるぶん、自分でも感情を制御できないが、使いどころをまちが分ければ間違い無く鬼のごとく力を得るだろう。

「オリヤアアアッ!!」

目が赤くギラギラと輝く三人は赤い軌跡を残しながら斬撃を放つ。赤い闘気が溢れてくるのが自分でもわかる。

それぐらい攻撃的になっている。

足の肉を削ぎ落とされ、思わずダウンするフルフル。

それも構わず攻撃の手を休めない三人。

フルフル特有のブヨブヨした皮はすでに切り刻まれ傷のない場所を

探すほうが難しかった。

そして力なく立ち上がったフルフルの頭に三対の剣を突き刺さり、二度と起き上がることはなかった。

「今度こそ勝ったはず！」

「うん！」

「当たり前だ！」

三人が闘技場から出てきた時にはネスも気がついており、特に怪我はなかった。

そしてラグナがいる筈の闘技場には、一度訓練所に戻る必要があるのだが、すでにそこにはラグナがいるという悲しい事実を三回味わっている四人には行くには勇気が必要な場所だった。

「ま、まあ今回は大丈夫！」

「う、うん！ こっちは四人だったし」

「でも私、今回は全然役に立たなかったし・・・」

「気にするな。それより体は大丈夫か？」

「う、うんありがと！ ノース！」

一応ノースが妹なのだが・・・。

そこで訓練所に戻るとラグナの姿はなかった。

「イヤッタアア！　ざまあみやがれあの優男！！」

「いや、あんたのフィアンセでもあるんだけどね・・・」

「でもでも、やりましたね！」

「多少強引だったがこれで幸せな家庭が築けるな！！」

イエーイ！とかハイタッチしちゃってる四人を見つけた教官が近寄ってきた。

「おお！　やっと帰ってきたか！　ラグナはすでに夕飯を食べに家に帰ったぞ？」

バナナをモグモグと食べている教官の一言で四人はラグナの家に殴りこみに向かった。

## 大商人 セレナ

時は四人が教官を張り倒しラグナの家に向かう数時間前まで遡る。さかのぼ

またしても闘技場に放り出されたラグナの勝負はまさに破壊の一言超重量のスラッシュアックスの斧モードでフルフルの頭を狙う、ただそれだけ。

単純にして最強。

ただ重力と腕力、遠心力にモノを言わせて目標の頭を叩き割る。

結果斧が通過したフルフルの頭は綺麗に真つ二つ、とは行かずグチャグチャに潰され、周りに赤い花を咲かせていた。

一時間弱で帰ってきたラグナをむかえてくれたのはロクと、昨夜劇的な再開を果たしたセレナだった。あの後すぐにラグナは風呂から上がり、外で待っていると東洋の浴衣とやりに身を包み長い黒髪を揺らしながらロクと並んで出てきた。

長身に黒髪、どこかさみしげでありながら妖艶な笑みを浮かべるセレナは青い浴衣によって一層綺麗に見えた。

昔の彼女とは違いよく喋るものの、表情が相変わらず固いところは変わっていないかった。

三人は食堂に向い適当な飲み物を注文しロクにはセレナを、セレナにはロクを詳しく紹介した。

今の状況をセレナに話したところ昔の彼女からは考えられない笑顔が見られた。

そして今日も試合があると言ったらついてくることになり……。今に至る。

ギャラリーの大半は余りにも酷い殺し方、残りの少数も勝敗の明確さにどこかに行ってしまった。

「あつちは終わつたかな？」

訓練所の方を見ながら心配そうにつぶやく。  
なにげにこの言葉はここ数日で四回目だったりする。

「お疲れ様でした」

昨日とは違う和服で迎えてくれたセレナ。

今は長い髪をカンザシとか言うもので髪を結っている。

一方のロクは何を血迷ったかアイルーの着ぐるみパジャマ（フードにネコミミ付）を着たままのご登場。

試合が朝早くからということもあるだろうが、確か昨夜は白いワンピースを着ていたような気もしないではない。

「・・・お疲れ様」

やや遅れてロクもラグナをねぎらつてくれる。

訓練所につくとやはり今回もラグナのほうが早かったらしく、四人の姿は見えなかった。

「モテる男は辛いな！ ハッハッハ・・・。 ハア・・・。」

ラグナの腹時計からするともうじき3時。

「ちょっと酒場に行つていいか？」

疲れているので適当に食べ物を食べたいが、今食べると夕食が食べられなくなる可能性がある、がそのまま二人を連れて酒場に向かつて歩き出した。

酒場

無礼講で二人も軽食を頼む。

ラグナはというトリユーノテールを豪快に焼いたものを一人でムシヤムシヤと美味しそうにほうばっていた。

何でも新メニューらしい。額が2000zと高額だが・・・。

「うんめえ〜！ 額が額だけあってうめえな！」

一気に半分近くまで平らげたところでやつと口を開いたラグナ。苦笑いを浮かべながらそれを見ていた二人は未だに軽食は残っている。

「それはなによりです」

ラグナの一言を聞いてそう言い放ったのは意外にもセレナだった。ビールを傾けていたラグナは一度ジョッキをテーブルにドンとおく。

「え？」

ビールの泡を口の周りに付けながら首を傾げるラグナに対し、そうでしたと言わんばかりに笑うセレナ。

一人だけ置き去りにされたロクはつまらなそうに口をとがらせる。

「その食材もうちの商隊が持ってきたものです」

それを聞いてラグナは正直驚いた。

彼の知っている昔の店は生活用品を少々扱っていた小さな店だったのだが、こんなにも高額な食材も売買し、あんな大人数の商隊を傘下に入れている商人にまで成長しているとは。

「すげえな！ あ、そういえばジンがセレナに会いたがってたからジャンボ村に行くことがあったら顔合わせてやって」

「ジャンボ村ですか？ 確か急速に発展した村だったと思いますが？ もしかしてラグナとジンさんがあの村を大きく？」

驚きの表情を隠せない様子のセレナ。

確かに数年であそこまで大きくなった村は他に類を見ない。そこまでかなりの勢いで大きくなったのだ。

それからたわいもない話や、昔のはなしなどで時間を潰し、もう一度訓練所に向かったラグナ。  
あの4人の安全確認だ。

訓練所へ

「すみませ〜ん」

訓練所に入り、大きめの声で教官を呼ぶ。

いつも初心者而今か今かと空中滑空するリオレウスの如く待ち構えている教官、この声を聞き逃すはずもない。

「よくきた！ 将来を担う未来のモンスターハンターよッ！ 吾輩わがはいこそが素人しゅじんから玄人くわじん、初心者熟練者、駆け出しから伝説級のハンターまでもが神と崇めるクック先生的存在！ 教官だ！ 頭が高い！

ドドン！教官の登場が決まったところで、話を切り出す。

「彼女達まだ帰って来てない？」

ラグナを見た瞬間がつくりと方を落とす教官。

「ああ。普通はこのぐらいかかるんだがな？ お前がな？ 早すぎるせいだな？ 可憐な彼女たちのな？ はかない恋とな？ 吾輩のな？ 奴を捕まえる努力がな？ 非情にもな？ 無駄にな？ 終わるんだぞ？」

「そうですか。俺は夕飯食いに帰ります。それじゃ」

「フルフル頑張って捕まえてきたのに一瞬でドタマカチ割りやがって！」

おいおいと泣く教官。

関わるためんどくさいことになるので心を鬼人化させて教官を冷たく突き放す。

「くっそ〜！ 全然うらやましくないもんね！ ヤケクソに昨日コングの巢からパクってきたバナナ50本全部食べちゃうもんね！」

40代のオッサンとは思えない速度で奥の部屋に戻っていった教官。こちらもダッシュで家に帰る。

食堂では軽く20人は入れそうなスペースがあり、一階部分はほとんど食堂と風呂だ。

しかしそんな大きな食堂も大商隊がいるとかなり手狭に感じる。本の一部の商人しかいないはずだがそれでもホントの住人が集まるとほとんど満席だ。

「で、どうだったの？」

手元のサラダを食べているナズがわかりきったことを聞いてくる。

「なにが？」

わかりきっていることなのにわざと素面の振りをする。

「勝負にきまってんでしょ！」

なぜかマジギレ……。

「ごめんなさい……。まあ勝ったよ。四連勝」

本気で謝りながら戦果を報告する。

あの闘いを見ていたらしき商人の数人が口を抑える。  
おそらく、あの惨劇を観てしまったのだろう。

「ほお！　すごいな！」

暴食のテイルが思わず歓声を上げる。

4対1の勝負で四連勝とはさすがにすごい。

彼女の手元を見ると、先ほどまで香ばしい香りを漂わせて焼けていたブルファンゴのステーキ2枚が、きれいに消えていた。

「ぜひうちの隊に欲しいとこだな」

そう言って赤ワインを傾けているキリル。

食事中は帽子を取るらしく、彼の金髪が無駄に眩しく瞬いてた。

「でもナズはそんなこと聞いたんだ？」

レティアに子供なんだからお子様ランチで決定ね？と脅迫に近い形でお子様ランチを注文させられたリオルグ。

まんざらでもない雰囲気でお子様ランチを食べている。

「やっぱ子供ね！ ようするにナズはラグナが好きってことでしょ？」

自分はスパゲティーナポリタンを頼んだレティア。

すでに食べ終わったらしく、今はデザートを笑顔でほおばっていた。

「ちょッ！ な、なんでそうなるのよッ！」

いきなり怒りでなのか赤くなったナズは長椅子の上に立ち上がり、周囲の視線を集める。

それに自分でも気がついたのかそそくさと席に座る。

「あの四人にラグナが取られるのが心配で夜も寝れなかったんですよ？」

リオレウスの隣に赤くなった顔で声を荒げるナズ。

「な、何を根拠に！」

いつてんの！？まで行かず、途中でレティアが遮る。

「あんたの部屋の隣、誰だと思ってんの？」

「は？」

ポカンとだらしなく口を開け、冷や汗をかくナズ。

「あたしとりオルグだよ。ば〜か」

ポカン二回目。

恐ろしい量の冷や汗がナズのシャツを肌に貼り付ける。

「じゃあ、もしかしてのもしかしてだけどあれも聞いた？」

コホンと咳払いをして声を整えるレティア。  
そして

「はあ。恥ずかしいの我慢して裸で部屋に忍び込んでるのに、なん  
でかまってくれないんだろお？」

「アアアアアッ！ アアアアアアアッ！ うあああああ！」

全力でナズが阻止に入った。

先程も食べたリユーノテールを再び夕飯として堪能していたラグナ  
だけ聞き取れなかったレティアの言葉。

ロクとセレナとティルが意味深な視線で見ているのが大変気になる。  
そんな中招かれざる客が。

「オラオラ〜！ ラグナはどこだー！！」

例の四人組だった。

## ケジメ

「ちよつと！ 聞いてんの！？」

「うるせえなあ。俺が勝手何が悪いんだよ。俺の好みはもつとおしとやかな女性なの。お前らみたいなブルファンゴを真正面からフンヌツ！とか雄叫び上げて受け止めるような女の子を俺の中じゃあババコンガと呼んでいる！」

「そんなことしないわよ！」

いきなり殴りこみにきた四人組は満席の食堂の中でこれ以上無いほど邪魔になっていた。

「そついえばラグナが勝つたらなんかもらえるとか言ってたなかったか？」

ボソつとテイルがつぶやいた。

そうだったとあいづちを打つ四人組。

いい加減にどこかに行つて欲しい。

「私たちに一回だけ命令できる権利をあげる」

「じゃあひとまず二度と俺の前に現れないでくれ」

「却下」

「命令聞かねえじゃねえか！！」

たまらず手に持っていたフォークを机に突き立てる。

小刻みに震えて見事に机に刺さったフォークがブーンと鈍い音を立

てる。

「この村の中でできることなら何でもいいわよ。すでに移住も村長の承諾も得てるし」

こんなのと毎日顔を合わせなくちゃいけないのかよ。

先の不安と対処に肩を落としていると、外が騒がしいことに気がついた。

「おい。なんか外が騒がしいぞ？」

ちびちびとワインをすすっていたキリルを肘でこずく。

めんどくさそうにこちらを睨むキリルだが、ギルドナイトである以上は様子を見に行かなくてはならない。

「わかった」

一言残すと席をたった。

それを早足で追いかけるテイルを見ながら四人に視線を戻す。

「命令はまた今度でいいや。ひとまずお疲れ様。ネス、だっけか？ 怪我したとか聞いたけど大丈夫か？」

「はい！ ダイジョウブデス！」

無駄に気合の入った返事に多少たじろぐラグナだったが、怪我が大したことがなくて何よりだ。

「すまんかった。まだ結婚する気は無いんでな」

ラグナが深々と頭を下げると慌てたのは四人の方だった。

「こっちも多少強引だったし。そんなに言われるとなんか悲しくなってくるというかなんというか・・・」

ワタワタと四人が慌てているともっと慌てたキリルが肩で息をしなから現れた。

「リオ夫妻が村の近くで暴れてる！」

いきなりの報告にその場にいた全員が目を剥く。

「はぁ！？」

この時期はそんなことはありえない季節だ。

リオレウス単体でも珍しいし、つがいならなおさら・・・。

「おかしいだろ！ 繁殖期は巣で卵を守ってる時期だろ！ つがいだったらなおさら！」

いまの時期は繁殖期。

草食竜や肉食竜などは仲間を大量に増やす時期だ。

それは飛竜でも同じことで、この時期は子を守るためにリオレイアとリオレウスは一層気が荒くなる。

しかしなぜこの時期に巣を放棄してまでもここに来るのか、それが疑問だった。

「もしかして、ギルドを通さずに卵を盗んだな？」

キリルは商人たちを眼光だけでその場に縛り付けた。

「し、しらねえよ。確かに飛龍の卵は運んでたが・・・」

それだけ言つと商人たちは互いを押し合うように一目散に逃げ出した。

ここにいるのは人を狩ることを生業としたギルドナイトがいるのだから、それは仕方がない。

本当に卵のことをギルドを通していなければ最悪死刑もありうる。

「この商隊のリーダーは」

「セレナだ」

キリルの言葉を途中で遮つたのはラグナだった。

それを聞くとキリルはもう一度帽子をかぶり直し、食堂を後にした。おそれく、事情徴収だろう。

「・・・」

「外に行かなくてもいいのか？」

ノースがつららのような鋭い目でこちらを見下ろしている。

長椅子に座っていたほかの仲間たちも外の鎮圧に向かった中、ラグナと四人組だけそこに残っていた。

セレナが実行犯だった場合、どうなるのかが気がかりで狩りどころではない。

そんな雰囲気を漂わせていたラグナの頭に、それこそつかめば折れてしまいそうな細く、白い手が置かれた。

「お前は困っている人間がいたら助けると聞いていた。自分が一番安全かつ迅速に飛竜<sup>あいつら</sup>を鎮圧することができることがわかっているの

にそれをしない。どうやら、期待違いの男だったようだ」

ゴツ、と軽くラグナの頭にげんこつをかましたノースがその場を後にする。

それに続いて他の三人も食堂からいなくなった。

「さっきまでピーピーギヤーギヤー言ってたくせに、馬鹿にしゃがつて!!」

がたん、と長椅子を倒す勢いで立ち上がると、脇においてあったヘルムをかぶり、急いで外に向かった。  
ひとりでも多くの人を救うために。

## 夜 月光下にて

闇の中、月明かりの下、奴はいた。

蒼い巨体。二本の強力な毒を持った爪を持った巨木のような二本の足。広げれば十五メートルにも達する、空を我が物にする翼。確かにそこにいた。

「蒼火竜、か」

リオレウス亜種。別名・蒼火竜。そうかりゆう

まるで青空のような深い蒼い体が特徴の飛竜だ。原種より更に獰猛かつ凶暴。突然変異で甲殻や鱗、翼膜などが変色し、気性も荒くなっている。

村の自警団が対処しようとしているが、下手に刺激すればかえって犠牲を増やすだけだ。

夜闇にうごめくそれは、悪魔の如く猛威を振るっている。

「ロクツ。自警団の連中を避難させてくれ。俺はこいつを片付ける」

隣にいたロクに自警団の避難を押し付けるとすぐに乱闘の中に飛び込んでいくラグナ。

弱腰に槍や剣、ボウガンや弓で蒼火竜に対抗している自警団の前に飛び出し、すぐに蒼火竜の意識をこちらに向ける。

とにかく住民が巻き込まれないように。

「ゴワアアアッ！！」

そんなこちらの都合など考えてくれるわけもなく、耳をつんざく咆哮を上げて村人たちを震え上がらせる蒼火竜。

アカムトルムのヘルムには咆哮を軽減してくれる効果があるためラグナだけはリオレウス亜種の咆哮に関係なく攻撃を続けられる。と、言っても一気に決着<sup>けり</sup>をつけられる相手ではないのは、ラグナが一番知っている。

後ろの自警団達に注意が向かないように遊撃を繰り返す。

「ハアアッ！」

抜刀の勢いを殺さずに斧を振る勢いに活用する。

横薙ぎに払われた漆黒の斧が、ベストなタイミングで蒼火竜の頭を捕らえるが・・・

「硬ってえ！？」

中型モンスターなら今の一撃で頭を切り落としていいほど完璧なタイミングで通ったはず。

しかしそれが弾かれるとなると剣モードしか通用しなくなる。

「ちょっとヤバイかな」

翼ばかりを狙っていたので気づかなかったが、すこぶる硬い。ここはやはり

「避難が終わったよ！ 兄貴！」

ロクのフォローなしでは勝てそうにない。

太刀の奥義・気刃斬りは弾かれずに攻撃できる。

「行くぞ！」

「うん！」

鏡写しのように左右にわかれた二人は一気にリオレウス亜種を挟み撃ちに攻撃を始める。

二人で狩りをして身についた陣形がこれだ。

正面は頭への攻撃を最大限に与えられる代わりに攻撃される確率が爆発的に上がる。

ならば左右から、というわけだ。

が、

「面白しろそうだな！ アタシも混ぜろおおー！」

先ほどまでおこぼれを与ろうと村に集まってきたランポスの群れをリオルグ、レティアと駆除していたテイルが戻ってきて、いきなり蒼火竜の頭に自慢のティガノアギトを叩き込む。

ギヤリギヤリと嫌な音と火花を散らしながらティガレックスの牙が深い蒼色の甲殻や鱗をはがしていく。

どうやらテイルは防具に調整を加えてスキル『心眼』を発動させているらしい。

弾かれずに攻撃を与えられる最も効果的な攻撃だ。

「行ける！」

たまらず回転尻尾を始めたリオレウス亜種から離れる女性陣。

しかしラグナは攻撃の手を休めない。どうやら足は斧モードの刃が通ることに気づいたラグナは風を切り裂きながら頭上を通過する尻尾に冷や汗をかきながらリオレウス亜種の足元まで前転で移動、立ち上がると同時に抜刀、下から切り上げ、上から叩きつけるように、目の前の足に超重量の斧を叩きつける。

普通なら飛竜の構造上、足のほうが頑丈にできている場合が多いの

だがなぜか蒼火竜はそうでもないらしい。

ひるんだリオレウス亜種の足元で、更に片手で斧を大きく後ろに振りかぶる。

そして一閃、右上から左斜下に叩きつける、さらにその勢いを使い左上から右斜下にもう一撃。

それを何度も繰り返す。

クロス型に何度も何度も繰り返し斧をたたきつける。

ラグナの猛攻にたまらず回転を止めてこちらをリオレウス亜種が振り向いた瞬間、両手で大きく振りかぶった斧が上段から一閃。

ガイイインッ！！

何かが碎ける音に手元の武器を確かめるラグナ。

手元の覇剣斧ムルカムトルムは漆黒の鈍い光沢を湛えていた。

「ガッ！ ガッ！ ガアアア！？」

パニックに陥っている蒼火竜の方を見ると頭のツノが数本まとめて根こそぎ碎けて、消し飛んでいた。

甲殻の下組織がむき出しになっている部分もある。

「行けるぞ！！」

テイルが蒼火竜の傷ついた足にティガノアギトを食い込ませて無理やり傷口を引き裂いて広げる。

その一撃でダウンしたりオレウス亜種の尻尾にロクが斬りかかる。上からの一撃、少し食い込んだ刃を引くように切る。

ロクの立ちはノコギリのような形をしているため、こうして切るのだ。

突を入れ、下からおもいつき尻尾を斬り上げるロク。

そこから奥義・気刃斬り。

大きく遠心力を載せた刃を左右から一撃ずつ、下から左右にクロス型に跳ね上げるように斬りつけ。背中につくのでは無いかというほど振りかぶり、立ち上がりうとした蒼火竜の尻尾に全力を込めた一撃。

上段から振り下ろされた刃は骨ごと肉を切り裂き、尻尾を中半から無理やりちぎった。

平衡感覚を失ったりオレウス亜種は前につんのめり、大きく体勢を崩した。

ジュウツと水蒸気を吐き出しながら肉厚の斧頭おのがしがスライド、柄のすぐ上まで下がり、今まで斧頭の裏側にあった剣先が回転しながら斧頭の上に合体。

ドラグライト鉱石やカブレライト鉱石、最近ではエルトライト鉱石やメランジエ鉱石など比にならないほど硬質な覇竜の素材を使ったスラッシュアックスを構え直すラグナ。

ガルルツと低く唸り声を上げ、こちらを睨むリオレウス亜種。

それに対して腰を低くして剣を構える。

そして、突撃を始めたリオレウス亜種。

カチツとスイッチを押して剣を構える。

一歩一歩大地を揺らしながら進んでくる蒼い巨体。

リオレウス亜種と重なりあう一瞬前、ラグナは剣をつきだした。

「セイヤアアアッ！！」

吸い込まれるように甲殻が無い部分に剣が突き刺さる。  
踏ん張るが押し戻されるラグナ。

地面を滑りながらスイッチを押し続ける。

蒼火竜の傷口から蒼い甲殻を染めるように赤い血が流れ出す。  
そして壁にラグナごとぶち当たる。

「ちょッ！　ラグナ！」

「兄貴！！」

苦笑いが交じるティルの悲鳴とヒステリックなロクの悲鳴が同時に上がる。  
しかし

「ハハハッ！　いいねえ！　ここまで楽しい狩りは久しぶりだあ！」

ラグナは笑った。

強すぎるゆえにここまで追い込まれる狩りはなかった。  
破壊神を破壊したと呼ばれる由来になった狩り以降は。  
ハンターの狩りの目的は多種あると言われている。

名誉、信頼、金、友情、素材、恋人。

ラグナの目的、それはただ、戦<sup>ドレینگ</sup>う喜び。

これはラグナのよって何よりの薬であり快楽である。

それは生命の侮辱に値する、という自己暗示で自分を騙していた。  
人を守ることもまた、ラグナにとって悪いものではなかった。

戦う理由。

感謝されることは嬉しかった。

しかし心のどこかでただただ強い相手を求める部分があったことも認めていた。

それは対古龍狩人で有ることの証でもある。

そして今、自己暗示が解けた。

闘争狂。

何もかも破壊する。  
破壊神。

迸る閃光が一層強まり、返り血を浴びるが、それでも高笑いを続けるラグナ。

「死にさらせエエエ!!」

更に腕力にモノを言わせ、腕までズボツ!と蒼火竜の頭にのめり込ませる。  
ランポスの残党を駆除していたハンター達が何人か口を抑えてしゃがみ込む。  
ガツン!と乾いた何かが弾ける音の後、蒼火竜の頭がはじけ飛んだ。

頭の上部分だけを失った蒼火竜は浜辺に打ち上げられた魚のように痙攣を起こし、地面にひれ伏した。

「ハハハツ! やってやたぜ!」

剣モードのスラッシュアックスを地面に突き刺すラグナ。

初めて見る破壊神の本当の姿を見た全員は呆然とその場に立ち尽くした。ロクさえも。

「あ、兄貴?!」

「バーサーカーねえ。なるほど」

「はあ!?!」

「闘争狂だよ。脳内麻薬が異常分泌されて恐怖や痛覚が麻痺する。  
アドレナリン  
ショート

だから死ぬことや怪我を恐れなくて他者を傷つけることだけが快樂になる。それで持つて火事場の底力。人間の力は絶対7ゝ80%しか出せないようになってるんだ。100%の力を出すと体がついていけないんだ。だけど、あそこまで筋力が強くなるわけじゃないんだがなあ」

そんなことを聞いてもわからないことも多いが、そこまで優しかった兄があそこまで豹変するとは考えにくかった。不気味な高笑いを上げているラグナを振り返ると、桜吹雪が舞った。そして、ラグナが

「兄貴!!」

消えた。

## 月光花

夜桜というのも乙なものだ。

特に花に興味があるわけでもないアスは、ツガイであつた蒼火竜を殺された怒りで我を見失つた桜火竜を見ながらそんなことを思つていた。

ガツンツ！と強い衝撃の後に、視界が揺れ、痛みが後から追いかけてくる。

「ッー!!」

声にならない叫びが喉まで出かかるが、自分でもそこまで痛いとは思わなかった。

おそらくノルアドレナリン脳内麻薬の分泌により寸前にどうにか受け身をとっていたらしい。

自分でも気づかずに。

「フウフウ!!」

すでに興奮状態が最高潮まで達しているらしく獣のようなうめき声を出している。

ラグナを巻き込みながら倒れこんだ桜火竜はすでに距離をとったラグナに向き直ると不意打ちのプレス。

業火をまとう炎の3つの球体は容赦なく地面を焦がし、夜の平原を一瞬明るくした。

爆風の先には直撃したはずのラグナが・・・立っていた。

人々は驚愕に目を見開く。それはロクやテイルも例外ではない。それも当然、右手を前に出すだけで他の動作は一切していない。

それだけであの紅蓮の業火を打ち消したのだ。

「オラアアアッ!!」

ありえない高さに飛び上がったラグナはそのまま落下の勢いを使い桜火竜の頭に超重量の斧を振り下ろす。

バキィ！と桜火竜の頭の甲殻を根こそぎそぎとると続けざまにラグナが一回転、それについてくるように斧が一回転する。

それも風を巻き込み、ありえない速度で。

もう一撃横から斧が桜火竜の顔にのめり込み、甲殻や鱗を引き裂き、眼球まで達する。

痛みに狂ったように頭を振る桜火竜。

その内に斧モードから剣モードに己の武器を変形させると片手剣のように軽々振り回すラグナ。

今までモンスターを人間に変える際の、モンスターから奪った力。自由に脳内麻薬を作り出せる特性・モンスターから奪った力を応用し他者を圧倒、無残にも切り刻まれる桜火竜は抵抗すらできないまま傷が増えて、草むらを赤く染めていく。

「おいおい。なんだありゃ」

セレナのところに事情徴収に向かったキリルが戻ってきた。

後ろには少し遅れてついてきたセレナの姿もあった。

「見てのとおり、ラグナだ。ちょっと頭がおつむイツちゃってる感じだけだな」

苦笑いを浮かべながらわかりきったことを言うティル。

「犯人がわかったぞ。セレナさんのキャラバンに同行してきた小さ

な商隊が犯人だった。今拘束してきたが、最初はこの桜火竜をどうにかしないとな」

そう言つてリオレイア亜種の方を見るとかなりラグナとの距離を置いているリオレイア亜種の姿があった。

すでに翼膜がボロ布のように破け、左足を引きずっているように見える。

「アハツハツハ!!」

耳が痛く鳴るような高音域で高笑いをしているラグナを見て、すでに自警団の大半が巻き込まれないようになり遠くまで逃げている。そしてその時がきた。

突撃を開始した桜火竜に対して微動だにしないラグナ。

直撃寸前まで惹きつけて両手を前に突き出し、

「う、受け止めたあ!?!」

キリルが幽霊でも見たような声で叫ぶ。

草むらにくつきりと竜車の通り道のような跡を残し、リオレイア亜種を受け止めたラグナ。

もがくりオレイア亜種の頭を片手で固定、もう片方の手で剣モードのスラッシュアックスを持ち直し、一突き。

上から突き刺された剣は頭から顎まで、突き抜けて、地面に突き刺さった。

誰もがこれから起こることを予測できず、身構える。

もしかしたら人間を殺し始めるかみしれない。そんなことが頭をよぎったキリルも対人戦専用の武器を手に構える。

紅い花を咲かせたラグナは剣を桜花から引き抜くと、コンパクトに折りたたみ、ヘルムをとった。

そこにはいつものラグナの顔があった。

「ふう。疲れた」

その夜は誰もラグナと話そうとせず、ラグナも誰とも話そうとはしなかった。

次の日、

食堂ではち合わせたロクの提案で中半強引に医者にごようになることにしたラグナ。

ロクの付き添い付きで。

診察を受けているとロクが昨日のことを聞いてきた。

「ああ。あれのことは隠しておくつもりだったんだけどなんか昨日はやけにテンションがあがっちゃってね」

特に気にした様子もなく診察を続けてもらうラグナ。  
それを後ろから心配そうに見守るロク。

「特に異常はありませんね」

唐突に切り出した医者は衝撃の一言を放った。

業火の火球を腕で受け止めて、リオレイアの突撃さえも受け止めたのに骨に異常はなく、目立った外傷は無いとのことだった。

ただ、右足の建を痛めているらしく一週間程度狩りは禁止らしい。

それはそれでいいことなのだが、だんだん兄が人間離れしていくような気がしてロクは心配していた

そんな妹の心配をつゆ知らずバリバリ普通に歩いて家に帰るラゲナ。家に帰るとひとまず自分の部屋に一週間、ミノムシ状態だ。

そんな中村の安全に支障がでてはいけないので、例の四人をロクに呼ばせた。

数分後

「はいはい。呼ばれて 飛び出て 即参上」

イスを筆頭に四人が入ってきた。

そんなに広くない部屋に六人入っているので普通に蒸し暑い。

「で？ 命令とは？」

らんらんと目を光らせる四人に申し訳ない事だが

「俺が休養中は村を守ってくれ。というか今後ずっとこの村を守ってくれ。というかいつそのこと自警団に入ってくれ」

「自分の村は自分で守る。すでにここがアタシたちの第二の故郷なんだから村を守るのは当然のことよ。そんなつまらないことでいいの？」

「俺は一向に構わんが」

「つまらない男ね」

「ああ。それは自分でも自覚はある」

「わかってるなら直しなさいよ」

微笑を浮かべるイース。

「別に損な性格でもないしな」

「兄貴は優しい」

フロローに入るロクだが、タイミングが微妙にずれている気がする。

「はいはい分かったイチャラブ兄妹。この村を守ればいいんでしょ？ 簡単よ」

「な、なんだよ。イチャラブって！」

「兄貴、照れないで／＼／」

「照れてねえ！」

「はいはい。それじゃあね」

「それじゃ〜ね」

「お、おじゃましました！」

「解せぬ！」

そう言って部屋を出ていった四人。  
どこか不満を残した顔で。

## 破壊神 休養中

ワイワイガヤガヤ・・・。

リオ亜種夫妻が村の近くで殺されてから4日。

ラグナの住んでいる長屋の前に住民の殆どが集まり、激しい口論を繰り広げていた。

もちろん、ラグナのことだ。

「お前らも見ただろ！？ アイツはあの飛竜と同等以上の力を持つてるんだぞ！」

「だからなんだ！ ラグナさんはこの村を守ってくれたんだぞ！」

「だがあの飛竜を殺すときの表情を見たら？ あの凶殺魔がいつ人間を殺し始めるかわからないだろ！！」

「そんなことはない！ どこに人間を殺すという証拠があるんだよ！」

長屋↳ラグナの部屋↳

激しい口論が外から聞こえてくる。

ラグナはベッドの上で動かない足を弄びながら布団をかぶり直し、ふて寝。

しようかと思っただが、誰かがドアをノックした。

「兄貴、ごはんもってきた」

本当は歩く程度は大丈夫だったアキレス腱も武器の手入れをと愛斧

兼愛刀の超重量の覇剣斧ムルカムトルムを持った瞬間、ぷちつとこ  
う、ね？

というわけで暇な女子ズが代わりばんこに飯をもってきてくれる男  
としては嬉しいオプシヨン付き。

例の姉妹も見た目は少なくとも可愛いし、なにせよく話してみると  
一人ひとり性格が違う。あたりまえか。

今日はロクのばんらしく、どうぞ、と入室許可を出すとふらふらし  
ながら一生懸命お盆をもっているロクが部屋に入ってきた。

「・・・はい」

ててと歩いてきたロクはベッドの脇にあったテーブルに飯を置く  
とベッドに腰掛けた。

沈黙が流れる。

再びラグナ、ふて寝。

「む・・・」

言葉どおりむつとした顔になったロクはポフッとベッドにのり、ペ  
しぺしとラグナを叩いてくる。

「なんだよお」

「ごはん食べなきゃダメ」

「分かった分かった」

ひとまず外の声を聞きたくなかったので再び布団に潜り、ロクの様  
子を伺う。

光を浴び輝くロクの濁りなき銀髪が目眩しい。

黙ってドアのほうを見つめているロク。  
少し布団を下げて、盗み見るラグナ。

（改めて見ると綺麗だよなあ）

最初は勢い余ってラグナをぶち殺そうとした腹違いの妹だが、改めて見ると妹ながらロクはすごい美人だ。

今は表情の変化が乏しいが、雪のように白い肌に、アイスブルーの瞳、本物の銀も濁って見える銀髪、整ったデフォルトの顔。

じっと見ているとローズピンクの唇が少し開き、何かを思いついたように手と手を打ち合わせる。

女の子座りを崩したロクは運んできた食事をトレイごとベッドに置き、スプーンでスープをすくう。

「何やってんだ？」

素朴な疑問を自分の妹にぶつける。

「・・・兄貴」

少し赤くなっているロクを見つめる。

何か嫌な予感が・・・。

「ん？」

「は、はい、アーン」

「なんですと!？」

齡20にもなり、15歳の妹に飯を食べさせてもらうなんて、破壊

神、ハンター、男以前に兄としてのプライドが許さなかった。

「あ、アーン……」

なかなか食べてくれないからなのか、恥ずかしいからなのかちょっと涙目になっているロクのさし出すスプーンを凝視する。  
そして

「わ、分かったよ」

ぱく、と食べるとロクがラグナロク以降見せなかった満面の笑みを  
見せてくれた。

これぐらいでロクが喜んでくれるなら、まあいいか、と次々と差し  
出される食事を食べていく。

ラグナに食べさせている間、ロクはずっと笑っていた。  
という夢を見た。

「って夢オチかよ!!」

すでに暗くなつた外では未だに口論が続いているらしく自分の罵詈  
雑言が聞こえてくる。  
うごん

キリルの声も聞こえることから暴動が起きたのだろうか。

（この村ももうじきだな……）

拠点を移動することを考え、首だけを動かし視線を彷徨わせる。  
するとテーブルに空になった食器がトレイの上に適当に積み上げて  
ある。

「んッ……」

「ん？」

そこで布団が不自然に盛り上がっていることに気づく。  
ガバツ！と布団をはぎ取ると、ロク。

「ふみゆう・・・」

布団を取り返そうと手で周りを探るが見つけられずにロクの手は虚しく空を切っている。

「お、おい！　なんで布団の中に入ってきてんだよ！」

「・・・眠い・・・」

ラフな短パンとシャツ一枚のロクが寝ぼけて体温を求めてラグナに抱きついてくる。

おいやめろいやちよつといいかもいやいや自分の妹に何言ってるんだ  
しっかりしろ自分！と脳内で30人のラグナが乱闘を起こしている  
内にガチャ、と誰かがドアを開けた。

「おいラグナ。お前の在住許可もらってきたやつた。ありがたくお・  
も・・・え・・・」

「・・・よ、よう」

「・・・」

「ありがとう！　キリル！」

キラ と星が飛ぶような笑顔をキリルに向けるラグナ。  
飛んできた星をブロードソードで一刀両断したキリルは真剣な目付きで。

「神機武装・侍の副団長のレーバが黒い男に殺された」

## 狩人祭閉会式典

ハンターズギルド2大猟団の一つである神機武装。

正確にはこの猟団は6の猟団から成り立っている。武器別に猟団を分けているのだ。

それぞれの武器を極めた幹部猟団の神機11将の傘下に、熟練の大剣・太刀使いを集めた<sup>グラディエーター</sup>猟団、侍。

片手剣・双剣使いの剣闘士にハンマー・狩猟笛の撃墜、ランス・ガ  
<sup>パラディン</sup>ランスの聖騎士、<sup>スナイパー</sup>ボウガンの狙撃手、弓の遊撃。

6つの猟団は総人数200人を超え、狩人祭には恐ろしい活躍を見せる猟団だ。

その猟団の内の一つである『侍』の副団長・レーバが黒い男・アスに殺された。

「もしかして、レーバも俺たちと同じ<sup>レディエンドハンター</sup>対古龍狩人だったってことか？」

考え事をしていたラグナは、下げていた顔を上げてキリルの方を向く。

「そりゃそうだろうな」

何をいまさら、という顔で返してきたキリル。

少しも驚かないキリルはそのまま部屋を出て行ってしまった。

それと入れ違いになって入ってきたのは暗い顔をしたイスだった。いつもおねえさんぶっている彼女にしては珍しい、というか初めて見る表情だった。

「今話してたこと、ホント？」

無言で頷くと、そうと言って部屋から出ていってしまった。

少ない期間といえど、世話になった知人が死ぬというのは悲しい事だ。

ラグナでさえ、まだなれない。いや、慣れてはいけないのかもしれない。

ハンターなら、なおさら。

しかし

「殺されてもしょうがねえ。俺でも一人じゃ太刀打ち出来ない相手だからな」

二週間後

モンスターの自然治癒力は凄まじい。その力を複数頭から奪ったラグナもまた、恐ろしいまでも回復力を見せた。

完全に回復したラグナのもとにキリルを通して一通の招待状が届いた。

何でも二ヶ月に及ぶ狩人祭の決着がついたらしい。結果紅竜組が勝利を収め、激戦の幕を落としたらしい。

その閉会式典にラグナロク兄妹も呼ばれたのだ。

絶対的な力の象徴であるラグナとその妹はハンターから見れば英雄ヒーローでもある。

そんな二人が出席しないなど考えられないとかなんとか。

そして結局中半強制的にギルドの紋章のついたゴテゴテしい馬車に乗り込み、ドンドルマに向かった。

「なんでティルまでいるんだよ」

キリルの隣で豪快なイビキをかいているテイルを見る。

馬車の発車から二分で深い眠りに落ちた彼女はいつもの凶暴な雰囲気  
のレックスシリーズをまとわずに、普通の衣服を着ている。

ここにテイルがいることを疑問に思ったラグナ。

めんどくさそうに親指をテイルに向けるキリル。

「俺はこいつの監視役だ。俺が離れるわけにはイカンだろ？」

そう言うときまた腕組みをして黙りこむキリル。

足と腕を組み、幅広の蒼帽子を深くかぶっているため素顔が見えない。

以外に狭い竜車の中でキリルは長い足を組んでいるのではつきり言  
って邪魔だ。

「そつえば閉会式典って何やるんだ？」

急ぎで出発したため、肝心なことを聞きそびれていた。

横にラグナに張り付いて座っているロクもコクコクと首を縦に振っ  
ている。

一つため息をつくとき帽子を親指で少し上げるキリル。

「入魂制度 1は知ってるな？」

曖昧に頷くとキリルは話を続ける。

ラグナもロクも私服で乗っているがやはりギルドナイトの正装であ  
るギルドナイトシリーズは私服の三人と比べても違和感が無い。

「狩人祭 2開催期間中の最多数獵団の表彰から、運搬彰・狩獵  
彰・個人成績までかなりの数をやる。その後は金持ち共が集まって  
もう一度パーティーを開くらしいが、今回はお前もソツチにも参加

してもらっ」

ふーん、と聞いていたラグナだが最後の一文を聞いて待ったをかけた。

「俺はそんな金持ちの着るような服は持ってねえぞ？ この服じゃぜってえ周りから浮くだろ」

「・・・私も」

一テンポ遅れてロクも同じ心配をする。  
キリルも少し表情を曇らせる。  
そこで竜車の御者が笑って

「お二方の服はこちらで用意させてもらいます。ご心配なく」

少し安心したラグナとロクはその後もたわいもない会話を続ける。

5日後

ジャンボ村よりちゃんとした街道があるココット村からドンドルマまでは5日で着いた。

すでにドンドルマはお祭り状態だった。

それに加えてラグナロク兄妹まで到着したということで更に盛り上がりギルドマスターに挨拶をしに向かった酒場では数人の顔見知りもいたが、話が長くなりそうだったので手短にギルドマスターに話をつけようとしたのだが・・・。

「そ、村長!？」

ギルドカウンターに座っている老人は確かに村長そっくりだ。  
しかし村長？はカッカッ！と笑うとその細い目からこちらを見  
てきた。

「彼奴はワシの兄妹じゃ。まあそんなことはどうでもよい。それよ  
りよくぞ戻ってきてくれた。我々ドンドルマハンターズギルドはお  
ぬしら兄妹を歓迎するぞい」

後は二人の到着を待つだけの状態だったらしく、ドンドルマに到着  
した翌日には閉会式典が開かれた。  
メゼポルタ広場で行われた最初の閉会式典では荷台に載せてきた防  
具をそれぞれまとったラグナロク兄妹が参加したことで大いに盛り  
上がった。

「お前らがいるだけでここまで盛り上がるんだな」

横に控えていたキリルが耳打ちしてきた。  
それに対してラグナは苦笑いしか出来なかった。

数時間後

「おい！ 何だこれ！？」

閉会式典を終え、俗にいう二次会というやつを行う時間になり、着  
替えを渡されたラグナはキリルに文句を言っていた。  
渡された服は限りなく黒に近い紅いろのスーツ。それに金色のギル

ドの装飾が縫いつけてある。  
こんな服を一回も着たことのないラグナ。ネクタイのつけ方さえも知らない。

「おい！はやくしろ！」

会場はギルドの本部に移され、個室で着替えるように言われたラグナは一応着替え終わると急かされるままにキリルを追いかける。  
数分、どこまで行けば会場につくのかと疑問に思っているとやっと会場についた。

「ラグナ・ジークフリード様をお連れしました」

「様！？ お前、熱でもあるのか？」

キリルの方を向くが彼は一向に顔をあげない。

会場を見渡すと数十人の人間が手にグラスを持ち、話を中断してこちらを見ている。

全員の視線を軽々と受け止めたラグナ。

周りを見渡すと溶け込んでいるようで少し浮いた存在を発見した。

ロクだ。

真っ白なドレスに身を包んだロクがこちらを心配そうな顔でこちらを見つめている。

その隣にティル。

こちらは確かゴシックロリータとかって言う奴を着ている。

なぜか似合っているのだが、本人は何か気恥ずかしそうにしきりに服をいじっている。

「すまん遅れた」

二人に近づき謝罪を述べるとキリルのいた方を振り向く。

「来客様も揃ったようです。では、ごゆっくり・・・」

そう言うときリルを含め、脇に控えていたギルドナイトが一斉に暗闇に姿を消した。

詳しくは知らないが全員が揃わない限り、飲食禁止らしい。ラグナが来たことでそれぞれが話を交えて食事を始める。それに乗じて軽い演奏が流れ始めた。

「なにすりゃあいいんだろっな？」

素朴な疑問に、いつの間にか戻ってきたキリルが答えた。

「パーティーと言ってもそんながいがいしいことはしない。ただ楽しめ。後からダンスがあるようだがくれぐれも相手の足を踏むなよ」

「へいへい」

手近にあった軽食を口にする。

恐ろしく細々とした装飾をされているが、うまいのかまずいのか微妙な味がした。

「金持ちの食うモノはわかんねえな」

隣ではロクが周りをキョロキョロしている。

「なんかスウスウするな・・・」

未だに服をいじっているテイルが顔を赤くしながらラグナの背中に

隠れる。

いつも豪快なだけにギャップがすごい。

いつまでも挙動不審なティルに一声かけるラグナ。

「別に变じゃないぞ？ 普通に可愛いし」

「か、可愛いだと！！」

いや、なぜに怒鳴られなきゃいけないんだ。

そしてロクがなぜか俺をずっと睨んでいるんだが・・・。

時間が流れ、それぞれがダンスの相手を見つけている内に、ラグナはすみのテーブルまで移動していた。

ロクとティルは速攻でエスコートを受け、断れずにどこかに連れてかれてしまった。

その時、会場がざわめいた。

異形の姿をした二人が会場に入ってきたのだ。

身長は160センチ程度だろうか。はっと息を飲むほど美人の女性は紅と黒のドレスをまとっている。

そしてもう一人はおそらく男性だろう。漆黒の鎧を全身にまとった身長2メートル近い男が入ってきたのだ。

社会交流の一環でもあるパーティーに完全武装の男が入ってきたのだ。それは誰でも警戒する。

しかしだからと言ってギルドナイトもうかつに手を出せない。会場で血を見せてはいけないのだ。

女性の後ろにぴたりとくっつき歩いている様子から女性の護衛だろうか。

その女性はこちらを見るやいなや、まっすぐこちらに歩いてくる。そしてラグナの目の前で止まった。

「じぎげんよう」

「は、はあ」

妖艶な笑みを浮かべる女性は、とかくで見るとかなり若い。若いというか幼さが残る顔つきをしている。

17と言われも嘘か本当なのかわからない。

「私と踊っていただけませんか？」

後ろの黒い騎士がぴくつと動いたような気がしたが、気のせいだろうか。

断る理由もなく、了解をしたラグナは結局その女性と踊る事になってしまった。

音楽に合わせてくるくる周り始めた瞬間、会場にまばゆい閃光がきらめく。閃光玉だ。

ほとんどの人間が目を焼かれ、激痛と恐怖でのたうちまわっている中、ラグナの相手の女性は余裕の笑みさえ浮かべている。

閃光の後にはギルドナイト・近衛隊などが会場になだれ込んできた。その先頭にはキリルがいる。

「ラグナ！ 離れる！ そいつは人間じゃない！」

それを聞いた瞬間、手を振り払い、バックステップで距離を取る。遅れてスカート揺らしながらロクとテイルも駆け寄ってきた。目を焼かれた者の叫びが耳障りだ。

「あら？ 今からがいいところだったのに」

急におなさい言葉遣いでしゃべりはじめた女性。  
後ろの騎士が一步前へ出る。  
それに合わせてキリルも前に出る。

「殺人及び殺人未遂の現行犯で拘束する！！」

ビツ！とキリルの指先が二人に向けられた途端、後ろに控えていた  
ギルドナイトと近衛隊が二人を取り囲む。  
それでも無邪気な笑みを受けている女性。

「何人かかろうと同じだよ？」

一斉に斬りかかったギルドナイトを女性の背中から出現した紅い翼  
がなぎ払った。

災の紅い翼。

ミラバルカン。

「お前も古龍か！　なぜここにきた！」

ラグナが噛み付くように訴える。

それをギルドナイトを軽くさばく女性は笑いながら返した。

「私の名前はルカ。ご覧の通り、ミラバルカンよ。あなたを殺しに  
来たの」

## 狩人祭閉会式典（後書き）

1 モンスターには決められたポイントが振り分けられる。そのモンスターを狩ると振り分けられたポイント・魂がもらえる。この魂を自分のチームに入れ、最終的に魂が多いチームの勝利になる。

2 狩人祭は二チーム、紅竜組と蒼竜組に別れポイントを競うイベントの事。参加は獵団単位で参加することができる。

## 紅龍の姫君

黒い騎士が剣を振るうことに血しぶきが上がり、ルカが翼をはためかせることに超高熱の熱風がギルドナイトと近衛隊を数メートル近く吹き飛ばす。防具を付けずしたたか壁にたたきつけられたラグナの息が一瞬止まる。

「私たちは忠告に来たの。このまま対古龍狩人、レディエンドハンター貴方達で言う対古龍への切り札が増え続ければ、いずれモンスターは絶滅、それに伴いハンターズギルドも自然消滅。ハンターは廃業よ？」

今の話を聞いてもまずはそんなことはありえないだろう。

モンスターの数と生態系はギルドが徹底的に管理している。

飛竜の卵の数からテロス密林の草食竜の数まで正確に管理しているはずだ。

そんなかモンスターを滅ぼすような真似はできない。

「信じてないね？ いいよ別に。人間が滅びても困ることはないし」

ひらひらと舞うようにスカートをはためかせながら背中の中紅い翼を振り回すルカ。

薄暗い会場の中には音楽の代わりに呻き声と叫び声が響いている。

「騎士を取り押さえる！ あの娘は無理だ！」

キリルが目標を黒騎士に向けた。  
しかしそれさえも無駄に終わる。

一斉に跳びかかったギルドナイトをブロードソードで一撃で黙らせるとVIP達を守っている近衛隊を切り伏せる。

人間離れしたそれは言葉通り人間ではない。近衛隊のランスを正面から受け止める。いや、止めていない。

手のひらで受け止めたのだ。

まるで何か見えない壁があるような硬さだ。

そこまで見ていたラグナは何か嫌な予感がした。

「おい！ キリル！」

キリルの方を向くとギルドナイトが睡眠弾の一斉射撃体制に入っていた。

その先頭にいるのはキリル。

みるみる内に戦闘不能の状態に追い込まれるギルドナイトの危険を感じたキリルがどうにか状況を落着かせようと撮った策だろう。

だが、それではこの状況は収まらない。その逆だ。

しかしここではもう、止まらない。引き金にかかっていた指がカチツ！と引き金を引いてしまう。

残った数人で睡眠弾を発射。

小型のライトボウガンの銃身から発射された睡眠弾は吸い込まれるようにルカに向かって飛ぶ。

まっすぐルカに向かったはず、だが。

風が巻き起こり、軌道がずれる。

いや、ズレたわけではない。

跳ね返ってきたのだ。

まるで鏡写し。

それも銃口に戻らず全てギルドナイト本人に当たる。

強力な睡眠薬をもろに被ったのと同じ効果がある睡眠弾を受けたギルドナイトたちは一人、またひとりと睡魔に襲われ倒れていく。自分の放った銃弾で。

「お怪我はありませんか？ お嬢様」

黒騎士が初めて喋った。

そこ声音は明らかに女性のそれだった。

硬質な響きを連想させる声。

「そんな事しなくてもいいのに。でも、ありがと。シャル」

シャルと言われた黒騎士は恐ろしく大きいアームをはめた手を胸に当て、一礼した。

彼女に近寄る敵がギルドナイト旋風によって宙高く舞う。

「いえいえ。お嬢様を守ることが私の使命ですから」

一例したシャルと呼ばれた彼女は腰に剣を収めると、くるくる回りながら片っ端からギルドナイトを吹き飛ばすル力の後ろまで歩いて行く。

あらかた近衛隊とギルドナイトが気絶すると、攻撃の手を止めるル力。

彼女の美しい顔は、満足そうな笑顔を浮かべている。

「今日はこの程度にしておくわね？ でも、今度来るまでに考えておいてほしいことがあるの」

片目をつむって可愛らしく小首を傾げるル力。

今ここに残っているのはギルドマスターとラグナ、ロクとティルだけだ。

そのラグナとロクを指さす。

「今度来たときには、その二人をこちらに引き渡してもらおうわ」

それまで端のテーブルに腰掛けてパイプをプカプカ吸っていたギルドマスターが目を開く。

とてもこの歳の老人から放たれているとは思えない眼力がそこにいる全員の自由を奪う。

「して、どうしてかの？」

「それは言えないわ。でも、拒否権はなくなつてよ？　ここにいる私の騎士様ナイトと同等の腕の持ち主があと5人いるわ。あとバカな弟が一匹……」

「……？」

次はギルドマスターが小首をかしげる。

はて？　最後が聞き取れなかったわい、というように。

コホン！と咳払いをひとつすると話を再開するルカ。

「古龍が七匹＋ゴミが同時にこの街に襲撃してくると言っても間違いないわ。こんな街、一日で落としてみせる自信があるわ。シユレイド城より守りは薄そうだし」

シユレイド城という言葉に一瞬反応を示したギルドマスターだが、そのあとはいつものマイペースにパイプを吹かしていた。

「考えてはおく」

しぶしぶギルドマスターが口を開くと満足そうに笑顔をみせているルカはカツカツと会場の中心まで歩いて行く。

「話が早くて助かったわ。それじゃ、またねえ」

ルカが、ひらひらとコチラに振っていた手を天井に向ける。  
ドン！という音の一瞬後に、振動がやってきた。  
立て続けに爆発音が響く。

2、3秒後には天井に穴が開いていた。  
ちようどルカだけに陽の光があたり、まるで独奏者のようだ。

「おい！」

「・・・?!」

いきなりの呼ぶ声にビクンと肩を震わせたルカ。  
呼んだ本人のラグナはその様子をみて少し拍子抜けする。

「なによ。レディを呼び止めるなんて重罪よ。しかも、おいってあんた」

ぶつくさいっているルカを話を遮って話を切り出す。

「俺たちが力を制御できなくなった時、覇竜と崩竜になった。なぜあの二頭なんだ？」

自分の話を遮られたのと、呼び止められたので少し怒っているらしいルカは口を尖らせる。

「飛竜の『<sup>ルーツ</sup>原点』』ということを追求してけば答えは出る」

ひらひらと手を振るとその小さくたたんだ小悪魔のような紅い翼で  
なんの妨害もなく穴の開いた天井から外に出たルカ。

金属質の翼でルカを追うように天井から姿を消したシャル。

それをただ、無力に見ているだけのラグナ。

肩に何か当たり、後ろを振り向くといつの間にか近づいてきていた  
ギルドマスターが机に立ち、パイプでラグナの肩を叩いていた。

「ギルドマスター招集をかける。おぬしも出席してもらっぞ」

## マスターズ招集期間（前書き）

通っていた塾の先生が軍曹と呼ばれていたことと、俺がゴリラが好きという至って普通の原因からゴリラ軍曹は生まれました。

ちなみに9月25日はゴリラ軍曹の誕生日です。

来年の夏休みには空から女の子が降ってくることを祈るとしようか。

ちなみに今回の話は特に意味は無いので興味のない方は無視してくれて構いません。

## マスターズ招集期間

「すぐに使いのものを走らせます」

胸に手を当て深いお辞儀をするキリルを横目に、何を使用としているのか理解出来ないラグナロク兄妹。

ギルドナイトに誘導され、散々な目にあつた会場を後にする。来客用の部屋でギルドマスター招集のことをソッチ関連に詳しいギルドナイトに聞いた。

通称マスターズと呼ばれるその会議では各街の最高責任者がこのドンドルマに集まり、様々な議会を開くというお偉いさんだけで開く会議みたいなものらしい。

「なんでそんなもんに俺が出なきゃいけないんだ？」

「そんなもんつてお前・・・」

未だにゴスロリ姿のティルは腕組みをして壁によりかさっている。なにげにそのポーズが様になっている。

「山賊の時にもあつたぜ、そのマスターズに似た集会。大げさに言えば国の代表が集まるんだ。しかも議題はお前の事だろうよ」

「どうせ俺の意見なんてお構いなしに話をすすめるんだろ？」

だろうなあ、と苦笑いしながら肯定してくるティル。

ラグナの隣の椅子ではロクがラグナにもたれ掛かって寝ている。起こしては悪いので立ち上がることもできない。

「お前ら端<sup>はた</sup>から見ると彼氏彼女の関係に見えて仕方が無いんだが」

自分で言っておきながら恥ずかしかったのか少し顔を赤らめるティル。

ラグナ自身、ただ単に口クをかわいがってるだけなのだが。

「そつえばお前、元はジャンボ村のハンターだったらしいな」

「ああ、そうだが？」

なぜかいきなり猛烈に喋りだしたティルの質問に適当に返す。

「ジャンボ村にはココット村と同じように伝承があることを知っているか？」

いつの間にかティルはニヤニヤした微笑を顔に張り付けていた。  
なるほど。『お宝』の話だからそんなに嬉しそうなのか。

「昔々、あるところに一つの村がありました。その村は最初、小さかったが、どんどん繁栄をしていき、かなりの大きさまで貼っていました。しかし、なんということでしょう」

いかにも悲劇、というように語るティルをみて微妙に引く。

「そこはなんと老山龍の通過ルートの真上に作られていたのです」

「今も昔も変わらんな。人間は」

所詮自然の災害には抗うすべはない。

できるのは逃げるか、最小限の被害に抑えるか。

このどちらかだ。

そして踏み潰された街の上にまた村、村から街へと発展を遂げた頃、  
また天災はやってくる。

悲劇の螺旋スパイラルを食いとめられることはできるのだろうか？

無理だろう。いや、自分たちの力を使えば・・・

「しかあああしッ！！」

「声でええよ」

地味にシリアスな考え事をしていたラグナは自分の思考を大げさな  
ナレーションに一気に焼き切られたことに腹を立てる。

「そこに一人の竜人族の勇者が立ち上がったのです！！ はいッ！  
拍手！！」

隣ではいつの間にか起きたロクが目をキラキラさせて拍手している。  
お前こっぴうの好きだったのか。

「彼は仲間から授かった宝剣を手に、ラオシャンロンとの激戦を繰  
り広げました」

「と言っても一方的に攻撃してただけだろ？」

「話の腰を折るな！」

「兄貴！！」

ロクにまで怒鳴られたラグナは、しゅんと一回り小さくなると黙り  
こくってしまった。

「双方弱り切った状況、勇者の後ろには村の皆が！ マズイ！ このままでは！！と思った彼は渾身の全力でラオシャンロンの額めがけて剣を投げつけたああああ！！」

テイルの奇妙な盛り上げに寿司のネタの如く載せられたロクの興奮は最高潮に達し、椅子の上で立ち上がって体を左右に揺らしている。お、おい。落ちるぞ。

「勇者を丸呑みにしようとしていた老山龍も額を下げていたのが幸い、宝剣は老山龍の額に突き刺さり、見事老山龍の退治に成功！しかし！彼の闘いは始まったばかりだった！次回『かっぱえびせんって本当にかっぱが作ってるの？』乞うご期待！」

ぱちぱちと猛烈な拍手を送っているロクを無視してテイルの方を見るとやってやったぜ！という顔をしている。いや、何したんだお前。

「今の話本当なのか？」

「ああ。裏もとってある。かっぱは本当に存在する！」

「いや、そつちじゃねえよ」

「本当にラオシャンロンの頭蓋骨に突き刺さってるらしい」

「ラオシャンロンを殺せる宝剣ねえ。それは絶一族と滅一族の話とは関係無いのか？」

「今のところ関連性は見つかっていないなあ」

伝説の龍殺しの剣を作る一族。

絶一族と滅一族。

彼らが関与していない宝剣。

ラオシャンロンを殺せるとなると絶や滅を超える宝剣だろう。

興味が無いわけではないが、そこまで興味が有るわけでもない。

どちらかと言えば無い。

それより今はマスターズだ。と言っても他のマスター達が到着するのは数日かかるという事らしい。

それまでにル力達が攻めてくねければいいが。

今まで隣でうんうん唸って何かを考えていたロクがいきなり

「兄貴！」

「だめです」

「・・・まだ何も言っていない」

「どうせ『今から宝剣を探しにジャンボ村に帰ろう！』とか言ってもりだったんだろ？ だめです」

ふぐのようにほっぺをふくらませたロク。

そのほっぺをつついて遊んでいるといきなりドアが空いたので少々ビビった。

先ほどまで気持ち悪いほどラグナを敬っていたキリルが戻ってきた。

「頭が高い！」

がたん！と椅子から音を立てて立ち上がるとズビシ！と人差し指をキリルに向け、調子にのって上から目線で命令してみるが・・・

「だまれカスが」

罵倒された。

「あれえええ？　ちよつと態度変わりすぎじゃありませんこと？　キリルさん？」

「俺はあの時の屈辱を忘れない。なにが『ラグナ・ジークフリード様』だ！　恥ずかしくてしにゆかと思つたわ！！」

「いま、しにゆつて言つたぞこいつ。ぷぷぷ」

「う、うるさい黙れ！　重度シスコン野郎！！」

「兄貴、やっぱり私の事を・・・／＼／」

「違う！　誤解だ！　ええい！　破壊してやんよ！　表<sup>おもて</sup>へでなキリル！」

「どこまでも愉快的奴らだな」

元女山賊の頭であるテイルがまともに見えるというカオスな状況。そんなこんなで数日があつという間に過ぎていった。

そしてマスターズの日。

暗い階段を降り始める。

## マスターズ

「さすが山を丸ごと街に変えただけあって、洞窟が長いな」

ラグナが文句にも賞賛にも取れる言葉をつぶやく。

街の位置はモンスターの襲撃を受けにくく、なおかつ大きな道の上などに作らないことを前提に作られる。

このドンドルマは山という天然の要塞に人間が住み着いているようなものだ。

「足いてえ・・・」

後ろのほうでロクと並んで歩いてたテイルが愚痴をこぼす。

ガッシャンガッシャンと鉤爪の着いたブーツでわざと大きく足音を鳴らしながらついてくる。

ロクは少し寒かったらしく等間隔で壁に付けられている松明をむしりとりとて一人だけ温まっている。

「ギルドマスターを4人も呼ぶからの。警備が万全な最下層の議会議室につくまでの辛抱じゃ」

とか言いながら他のギルドナイトとは違う、キリルと同じ一回り大きく、繊細な装飾を施した正装に身を包んだギルドナイトに担がれているギルドマスター。自分の足で歩いてから辛抱とか言えよ。

その後、キリルと適当に駄弁りながら歩いていくこと小一時間。やっとの思いで着いたそこは、装飾を一切取り除いた質素な場所だった。

中央にはこれまた石を削り出して作ったらしきテーブルと椅子。

その数7。

ドンドルマのギルドマスターも合わせると合計5人。  
2つ席が余るが、やはりギルドマスターは全員集めると7人になる  
のだろうか。

そんな知らない疑問を抱いていたラグナはキリルに引っ張られ、ド  
ンドルマのギルドマスターの背中に着いた。

円状の石のテーブルにそれぞれ集まっていた4人のギルドマスター  
が着席、それを確認したドンドルマのギルドマスターが続いて着席。  
ラグナはふと周りを見渡すとぎょっと目を見開いた。

それぞれのギルドマスターの後ろには最低二人。最高5人程度のギ  
ルドナイトらしき騎士がついていた。それも完全武装で。

「おい。アイツら何なんだよ」

小声で隣の見事に直立不動で立っていたキリルに問いかける。  
キリルはわざとらしく大きなため息をついた。

「各ギルドの護衛のエリートとでも言っておこうか。ウチで言うところのギルドナイトだ」

「強いのか？」

「まともにやり合ったら二秒後には三途さんずの川をモーターボートであ  
の世に向かって爆走してるところだよ」

「んなこたあねえだろ」

「少なくとも彼らをハンターと呼ぶのなら、君と同等、それ以上の  
実力者だ」

かなり高いプライドを持った彼がここまで言うのだ。  
すげえやつが居るもんだな、と感心しているとふと思いつく。

「なんでアイツらアスを捕まえに行かないんだ？」

そこはかな腑に落ちない。

普通危険視しているならそれに見合う、それ以上の腕の持ち主をぶつけばいいだけの話だ。

「それは失敗した」

「はぁ？ 対人戦最強なんだろう？」

少なくとも今のアスは一応人間だ。

キリルもいいところまで追い詰めたらしいが、それならなおさら。

「だから！ 俺がこの街で一番強い！・・・はず・・・。。。」

なんで最後尻つぼみになってんだよ。

それにしてもこのキリルがギルドナイトのお偉いさんだったなんて知らなかった。

いっつもテイルの尻に敷かれてるくせに。

何やらがいがいしい挨拶が終わった所でキリルとの話を打ち切り、ギルドマスター達の話に耳を傾ける。

「今日集まってもらったのはこの」

ウチのギルドマスターが振り返り、二人を指さす。

「ラグナ・ジークフリード、並びにロク・ジークフリードの身柄をどうするか、というものじゃ」

静寂に包まれた議会議室にマスターだけの声が響く。

「知つての通り、黒の男・アスに次々と我らの切り札が消されておる。かなりの腕の持ち主までもがあっけなく消されているところを見るに、対人戦については諦めようと思うのじゃが」

そこで手を上げたのはドンドルマのギルドマスター。

「対人戦は元から期待しておらぬ。じゃが、その二人ならアスを殺せるのなら話は早い」

他のマスター達もしきりに頷いている。

「しかし数日前襲撃をしてきた古龍と思われる二人組はアスを凌ぐ力を持っていた。それに逆らえば他の古龍も引き連れこの街を落とすとのことじゃ」

ドンドルマのマスターは結局どちらの味方なんだ？

少しイライラして会議を見守っているラグナ。

それを見守るロク。

「かくまえば街を潰される。かと言って二人を渡せば我々には打つ手がなくなる」

ああでもないこうでもないマスター達が言い争っている内に数時間経過し、すでに疲労もかなり溜まっていた。これなら狩りに出てたほうがまだましだ。

そう思った瞬間、キリルが気を効かせてくれた。

「どうせお前の意見は反映されない。結果は俺が報告する。お前は先に上がってろ」

その言葉に甘え、とつと堅苦しい議会室をロクと後にした。

意見が無視されるのはイラつくが、それもたくさんの命がかかっている。

仕方が無いことだと割り切り、適当なギルドナイトを捕まえて地上にでた。

久しぶりの外は満月の綺麗な夜だった。夜風が頬を撫でるのが気持ちい。

月から前へと視線を戻し、そして

「はあい。ご機嫌いかが？」

紅と黒を基調とした、スカートが広がったゴシックロリータの服を綺麗に着こなした美少女と、それを取り囲む六人の騎士。

悪夢を見た。

## シックスナイト

ひらひらと手を振っているルカの後ろには六人の騎士。

鉄製のスカートを履いているところを見ると内2人は女性だろうか。そう言えばあの黒騎士も女性だったか？

一人は真紅。ルカのような紅ではなく真っ赤な真紅の鎧を足腰腕、それとマスクのような真紅の甲冑をつけている。どうやら防御を殺し、スピードと攻撃を全面的に押し出したスタイルのようだ。

「さて、決まったかしら？」

カツカツと足音を鳴らしながら近づいてくるルカの後ろにはぴったりと六人の騎士が張り付いている。

「しらん。いまお偉いさん達がひいこら言いながら会議してるのだ」

そう言うのと特に気にした様子もなく手にした日傘をくるくると回し、後ろの騎士と何かを話し始めるルカ。

いま夜なのになんで傘なんかさしてんだよ。

空をもう一度見上げるとやはり満月の綺麗な夜だった。

「お前らは俺とロクを殺しに来たって言ってたな」

「今や貴方と妹さんをぶっ殺して一件落着いてわけにも行かないのよね」

いみわかんねえ、と足元にあった石を蹴り飛ばす。

石畳の階段を跳ねながら落ちていった石は数メートル飛んだ所で止

まる。

「この前は高らかに殺<sup>や</sup>りにきた宣言してやがった奴が何いってんだよ」

「このままじゃあ人間との全面戦争になるかもしれないし。そうなのとこつちも都合が悪いのよ」

「話が咬み合ってねえ。お前ら人間がイなくてもいいんじゃないか？」

「別に困らないわよ。でも面倒くさいの。あなた達がいなくなったら誰が自然界のバランスを保つと思ってるの？ 当然私達。大体何人いるのかわからない人間なんか相手してたらやりきれないわ」

そこまで話した所で痺れを切らしたように蒼騎士が声を上げた。ドレスのように蒼甲冑を組み合わせた作りの防具を着ている。

「この殿方が『あの方達』のご子息でしょう？」

どこぞの貴族のような喋り方のこの女性も古龍なのだろうか。少し幼さの残る声であの喋り方は反則だと思う。

「ならとつととさらつちまおうぜ？ 別に殺すわけじゃないんだから」

蒼騎士に続いて真紅の騎士。

コチラはラグナに似たがさつな喋り方だ。

どすの利いた低めの声で蒼騎士を肯定する。殺すわけじゃないって、どういうことだ？

「言葉に気をつける。仮にも『あの方達』の子孫。我々の主に当たる人物だ」

忍者のような姿をした人物が突然目の前の二人の間に現れ双方の肩に手をおく。

どこか落ち着きのある低い声音の人物。

確か東洋の女暗殺者つくノーとかって言うんだっけ？ とつぶやいているラグナを見る女性。

「仮にも、な」

どこか嫌味っぽい棘のある言い方だが、少なくとも敵意はなさそうだ。

「私達はあなた達を保護しに來ただけでございますよお」

一番最後尾に居た灰色の鎧を着た女が近づいてくる。

背中には意味不明なほどかい十字架に刃をつけたような大剣を背負い、長い黒髪が月光を受けて、瞬いている。

「保護？」

後ろでウトウトしているロクをデコピンで起こすと妙に引っかかった言葉を繰り返す。

「あなた達が『あの方達』の子孫とわかってしまいましたからねえ。今更殺すわけにもいかないのですよお」

こまりましたねえ、と言っている女性は大きく困った素振りを見せ

ず微笑んでいい。

あの方達？ 誰のことだ？

「じゃあ、会議が終わるまであなた達をナイトに監視させるわ」

唐突のルカの提案に黒騎士と白騎士を除いた4人の騎士が振り返る。

「人間を待つのですかあ？」

「時間の無駄だぜ」

「どうせ人間たちは私達に従うしか無いのです。ですから待つ必要など」

「ルカ様の命令だぞ！ 従わないのなら、お主らでも切るぞ？」

何やら仲間割れが始まった様子を暇そうに眺めるラグナとロク。  
かくいうルカは額に手を当て、ため息をつく

「黙れクズ共！ ぶつ殺すぞ！」

一言で静寂を取り戻した。

ビリビリと殺気だけでモンスターを冗談抜きで殺せるんじゃないか  
と思うほどの圧迫感。

先ほどまでのへらへらしていたルカと同一人物とは思えないほどだ。

「ごめん遊ばせ。頭が弱い子ばかりで困っちゃうわ」

ラグナとロクに笑みを浮かべると、次に四人を見て、

「あなた達のような出来損ないに監視を任せるとでも思ったの？  
自惚れるな。あなた達の代用品なんていくらでもあるわ」

オルタナティブ

クルツとスカートをはためかせ半周回ると後ろに控えていた二人に  
「忠実な部下が二人もいなくなるのは困るけど。今回はリン・シャル。頼まれてくれるかしら？」

リンと呼ばれた白騎士はコクリと頷き、シャルと呼ばれた黒騎士は  
うやうやしいお辞儀をすると

「お嬢様の仰せのままに」

と一言。

「よろしい！　じゃあ頼むわよ？」

一気に血の気が引いた四人の騎士はリンとシャルと呼ばれた騎士を睨  
むとルカの後ろに戻っていく。

それを苛立った表情で待っているルカは手元の傘をくるくると回し  
続けている。

「監視中は片時も離れないこと。危害は加えないこと。できるだけ  
命令に従うこと。あとは・・・会議が終わり次第、例の『はじまり原点の場  
所』に知らせに戻ってきてね。このくらいかしら。じゃね」

そう言う例の小悪魔のような小さなコウモリ状の翼で飛び立つル  
カを追うように、それぞれ翼を広げる。

蒼騎士は蒼い炎をまとった翼。赤騎士は赤い炎をまとった翼を、く  
ノ一は無色透明になると闇に消え、それを追うように灰色の騎士も

ステルス

闇に消える。

残った二人の騎士がコチラに歩いてくる。  
自分の得物に手を伸ばすラグナとロク。  
だが、それにも動じず、ラグナの後ろにはリン。ロクの後ろにはシヤルがぴったりくつつくと動かなくなった。

「お、おい。何やってんだ？」

「監視です」

リンと呼ばれた騎士はどうやら女性だったらしく、鈴を転がすような声で返事が帰ってきた。

「いや、お前ら会議を監視しないでいいのか？」

「結果は必然的にラグナさん本人に伝わるはずですから大丈夫です」

どうにか引き離そうとしたが、表情が読み取れないほど棒読みの見本みたいな棒読みな言葉がかえってくるだけだった。  
疲れたラグナは部屋に戻ろうかと思ったが、

「やべえ。自分の部屋とつてねえ」

地下の部屋は客室を占領して数日をしのいでいたが、地上の宿なんて取っていない。

「じゃあねえ。宿取りに行くか」

ドンドルマのハンターなら自分の部屋が支給されるが、あいにくい

まはココット村のハンターと言うことになっている。

結局宿屋に向かい、部屋を4部屋取る。

監視役だろうと古龍だろうと女性と一緒に部屋というのもやばいの  
で一応部屋を取る。

そして部屋の鍵を渡し、自分の部屋にはいるラグナ。  
夜は一人でゆっくりできるはずだったのだが・・・

「ルカ様の命令ですので」

いつの間にかラグナの部屋にリンが居座っていた。

## ハーフタイム

「お前自分の部屋とってやったんだからそこで寝てくれ」

一日の大半を堅苦しい会議で費やした後、自分を誘拐するだのしな  
いだのと言い争いを聞いた後、やっと自分の部屋でゆっくりできる  
と思ったのだが、結局監視役のリンがつきまとう。

「片時も離れないこと、と命令されています」

「いや、だからって風呂までついて来ようとするなよ」

がつくり肩を落とすラグナ。

たまりに溜まった疲れをゆっくり風呂でも入って解消しようと思っ  
たのだが、入って二分。いきなりリンが入ってきた。裸で・・・

「鎧が錆びると戦闘に支障をきたします」

と鎧の中には何も着ていないという既成事実を爽やかに報告してく  
るリン。

少し幼さが残る顔に切れ目に通った鼻、淡い蒼がかかった銀髪にど  
こまでも白い肌をした美少女だったが、それ以上に無表情のほうが  
印象的だ。というよりもロクに似ている点が多い。

というか元が麒麟だったらしく風呂に入ると感電してラグナが目  
を覚ましたのは次の日の朝だった。本人曰く頭に生えている角は人  
間になっても短くなるが、なくなりはいし、電気の調整ができ  
ないらしい。

未だに麻痺して動けないラグナはいま、今までにないピンチに陥っ  
ていた。

風呂場で感電したのでリンが気をきかせてベッドまで運んでくれたらしいのだが、なぜか服を着ていない。

それを隣で鎧姿で眺めるリン。

布団をかけてくれているがこれはなんというか、まずい。

まずいぞラグナ！！

「あのお、リンさん？ できれば自分の部屋に即お帰りいただきたいのですが？」

「片時も離れないこと、と命令されていますので」

「・・・」

空気読めよ！キリン擬人化娘！

「いやですね、君みたいな美少女がそばに居てくれるのはありがたいけど、いまの状況は誰かに見つかる社会的に死んでもおかしくない状況であってでだな。お前さんは俺が死んだら困るんじゃないのか？」

「危害を加えるな、という命令は出ていますが、守れとは出ていません」

「・・・」

なぜか空気が濁っている部屋をため息をつきながら見渡す。

日はすでに高く登っているのか、日に焼けたフローリングに眩しい光が差し込んでいる。

ヘルムを脇の机において自分はベッドの隣に椅子で座っているリンと目が合う。

ロクと同じアイスブルーの瞳がラグナの赤い瞳を通し、考えていることが読み取られような錯覚に陥る。

そんなことはないと思いいながら、布団をかぶるろうとするが、手がしびれて動かなかった。

「寝る。静かにしていてくれ」

元々息をしているのかも不思議なほど微動だにしないリンに念を押すと再び目を閉じる。が、モロ顔面に直射日光が降り注ぐため、寝付けない。

「カーテン閉めてくれ」

ラグナが言いつと、すぐに立ち上がり、シャーッとカーテンを窓にかけるとまた椅子に腰掛け、ラグナを見ているリン。

若干暗くなった部屋の中でリンの頭の青い閃光をほとばしらせる小さい角が、光っていた。

前日、ロクの部屋、

ラグナと宿を取ったが、結局四人に部屋が割り振られ、別々の部屋で過ごすのかと思ったのだが、なぜかシャルがロクの部屋に押しかけ、面倒をあれやこれやと見ている。ぶっちゃけ、ロクの本心はむかついていた。

「お嬢様、お食事はもっと栄養価の高いものをお食べになっとうですか？」

このシャルは誰に対してもお嬢様という癖があるのか、先程から口クのことをお嬢様と呼んでいるが、当の口ク本人はむず痒くてしょうがない。

「・・・」

食事くらい好きにさせろ、と言わんばかりにシャルの小言を無視して肉を口いっぱい頬張る口ク。

向かいには何が楽しいのか、満面の笑みを浮かべたシャルが座っている。

「お嬢様は私達から見れば、お姫様です。あのルカ様をも跪つひまかせるほどの高貴な」

と、唐突に語りだしたシャルの顔を弾かれたように見るが、先ほどと変わらず満面の笑みだ。がその目は笑っていない。

「『あの方達』のご子孫であるあなたが皇帝・女帝にふさわしい」

「・・・あの方達って、だれ？」

「すべての原点、とでも言うっておきましょうか・・・」

どこか懐かしむような表情になったシャルを握ったフォークを握りつぶしながら凝視する口ク。

「お行儀が悪いですよ、お嬢様」

再びニコニコ笑顔にもどったシャルは、かえのフォークを口クに差

し出す。

それをひったくるように受け取ると、再び目の前の肉にかぶりつく。

「ラグナ様は、上品な女性が好みらしいですよ」

「・・・」

一瞬動きが止まったロクは、いきなり手元にあったナイフを使って肉を丁寧に取り始める。

そして本日

自分のところにシャルが来ているのなら、ラグナのところにはあのリンとか言う白騎士がいるはず。

ラグナの精神的危険を察知したロクは慌ててラグナの部屋に殴りこみに行く。

「兄貴！」

ドゴシャアッ！と木製のドアを粉碎しながら部屋に前方宙返りで乗り込んだロクの目に飛び込んできたのは

「・・・」

「・・・」

なぜか裸の自分とキャラのかぶった少女と、薄暗い部屋に、ベットで横たわる己の兄貴の姿だった。

「あれ？ 社会的に死んだんじゃない？」

ハーフタイム？

「いや、その、これは」

しどろもどろに言い訳を始めるラグナ。  
鬼の形相で自分の兄貴を睨みつけるロク。

「何を慌てているのですか？」

全裸のままコチラを向いているリンを見て、一瞬たじろぐ。  
そして、気づく。  
リンの胸と自分の胸を見比べて

「………これが、DNAの差……」

チツ！と舌打ちをするとハツと我に返ったロクは再びラグナを睨みつける。

「兄貴……何やってんの？」

「いや、ね？ 同居人が部屋の中、完全武装で動き回られてちゃあ、  
こつちも威圧感でつかれちゃうわけでありましてね？ だから適当に普通の服に着替えてくれまいかと頼み込んで着替えてもらっているところにあなた様がかけた、とこういうストーリーになっています。アー ユー オーケー？」

「……」

「オーケー？」

「・・・」

「お嬢様、リンとは長い付き合いですが、私欲に乏しく命令に従順なやつです。心配しなくても大丈夫ですよ」

さり気なく後ろからラグナのフォローを入れるシャル。

不機嫌そうな顔をしていたロクの顔が少し和らぐ。

すると今度はリンの方を向くと腰に両手を当てて

「リン。早く服を着てください！ はしたない！」

キツめにシャルが言うと、リンは素直に頷き、すぐに着替えに入った。

酒場

全身麻痺していたラグナが、すっかり腹を空かせ何か食べたいと言い出したので酒場に行くことに。

情報と食事、依頼が集まる酒場はいつもハンターで満席なのだが、ラグナロク兄妹の姿を見たハンターが席を開けてくれたお陰ですぐに席を確保できた。

「さて、依頼でも見てくるか・・・」

いつもの癖で席を立とうとしたラグナを隣に座っていたリンが手をにぎって阻止する。

向かいの席でロクが息を呑む。

「いつ議会が終わるかわかりません。いま狩りに出るのはご了承願いたいところです」

てを握ったままじつとコチヲを凝視してくるリンになぜか恥ずかしくなったラグナは顔をそらす。

「分かったよ。つい癖でな・・・」

渋々再び席に着くラグナ。

逃亡防止なのか未だにラグナの手を握っているリンをみてロクが歯が砕けかねないほど力強く歯ぎしりをする。

「お、おい。なぜかロクの機嫌が急激に悪くなっていくのがわかるんだが!？」

すでに黒いオーラさえも醸し出しているロクを横目にシャルを見る  
と満面の笑みです。はい。

「リンはよほどあなたのことを気に入っているようですね。普通なら縛り上げて部屋に監禁するはずなのに」

「え!？ 命令で危害を加えないようにって言われてるんじゃない?」

「ルカ様の危害というのは死なない程度、ということです」

「ええ!？ 俺の感性とかけ離れた感情をお持ちのお嬢様なんだな、  
アイツ・・・」

そう言いつつも再びリンの方を向いてしまいうラゲナ。  
無表情のまま虚空を見つめているリンは未だに自分のてを握っている。

「おませしましたあ、え？」

その場に流れる空気に異常を感じたのか料理を運んできた受付嬢はそそくさと料理を置くと、カウンターに戻ってしまった。

結局その後、気まずいまま食事を終えた。

ずっと近くに居るリンの存在感が明らかに食事前と後では大きく変わった。

「俺はもう寝るか」

外がすっかり暗くなったところに部屋に戻り、武器の手入れをしていたのだが、それも終わるとやることがない。

ランタンの光では細かい作業をする調合も出来ず、防具の手入れもしようかと思つたが、前に手入れをしてから狩りに出ていない。

そこで寝ることにしたのだが、やはりベッド横の椅子に腰掛け、動かなくなるリン。

何を考えているのかも読み取れない表情のまま、虚空を見つめている。

「疲れたら自分の部屋に帰ったらどうだ？」

なにげに気を使ってみるが

「命令ですので。しかも疲れてなどいません」

いつものように命令命令と口うるさい。

「そっか」

それ以上の会話は意味を成さないことを悟ったラグナはそのまま眠りに落ちた。

数時間後

「兄貴！」

直してもらったばかりのドアを蹴破り再び入ってきたのはロク。いつも異常に怖い顔をしている。

ふとベッド横の椅子を見るとリンがいない。別に寂しいわけじゃないがなんだか不審だ。

「兄貴！ 古龍だ！ 街の正面門に古龍が！」

それに続きシャルが入ってきた。

「我々も交流のない新種の古龍だ！」

## 極龍

「お前たちと交流のない？」

訝しげに防具を着ながらシャルに聞き返す。

「そうだ。本来ならばルカ様に齒向かう者は容赦なく殺されるが、アイツは新種、というよりこちらでも最近存在を確認した」

軽くうなずいて話を終わらせると急いで宿を後にする。

向かうは城門。

いま新種の古龍が攻めて来ている場所に走って向かう。

その後をリン、ロク、シャルの順番で三人が追いかけてくる。

「お前らはどうするんだ？」

少し減速してリンと並ぶラゲナ。

一切息を乱さないリンはこの自体に興味がないのか無表情だ。

「まさか古龍同士で戦うわけにはいかないだろ？」

瞳だけコチラに向けるとその小さは口を開く。

「私たちはルカ様に選ばれた存在。ルカ様に逆らうあのようにはぐれは抹殺します」

サラッと殺害宣言をすると一層走る足を早め、城門に向かう。

住宅街を抜け、酒場の前を通り、露店広場を駆け抜けけると、大きな鉄製の城門が姿を表す。

分厚い鉄製の扉の横にある、石でできた壁の虫食いのような穴に飛び込む。

城門の中は狭い通路で行き来できるようになっているのだ。

複雑な構造をした通路をひたすら突っ切り、外に飛び出すとテラスのようになっているバリスタの狙撃台に出た。

そこから下を見ると

「なんだアイツ!？」

半透明な黄色の翼膜。全体的に黄色を基調とした姿で、やはり四足歩行に翼を持ったスタンダードな古龍の姿。頭には黄金の一角が生えている。

そして黒い砂嵐。

「おい！ 何だあれ!」

リンとシャルを振り返り、情報を集める。

狩りでの情報量は自分の実力とイコールでつなぐことができる。目標の情報量が多ければ多いほどコチラが有利になるのだ。

「名前は極龍<sup>ルコティオラ</sup>。特別な力を使い磁力を使い磁場を操る事ができる。もちろん身の回りの鉄製の物も」

「チツ！ 厄介だな」

リンの説明が終わるかどうかの所で舌打ちをしながら物騒なテラスから下の戦場へと飛び降りるラグナ。高さにして十五メートル弱を砂埃をたてながら着地すると前転して衝撃を殺す。

立ち上がりざまに腰から愛刀兼愛斧の覇剣斧ムルカムトルムを引きぬく。斧頭がスライドして先端へと移動して、金具に固定され火花

を散らす。そのズシリとした重さを手の内に確認すると爆発的な脚力でルコディオラとの距離を潰すと大きく振りかぶった斧を頭目掛けて振り下ろす。ウンツ！と風を切る鈍い音を立てて振り下ろされた斧は

「入った！！」

直撃ではないもののルコディオラの顔面にのめり込み、怯む。

ダメージではなく、いきなりの奇襲に驚いたものだと思えるのが妥当だ。しかし最初の一撃が入るのと入らないのはモチベーションに大きく関わる。いまのでかなりモチベーションが上がる。しかし安心はできない。頭は最大の弱点だ。それで完璧に切れないとかなりの硬度をもったモンスターだ。

「グオオオオツ！」

奇襲をかけてきた外敵を煩わしそうに片手で吹き飛ばそうとするルコディオラ。しかしそれを黙って見ているラグナではない。

見をかがめルコディオラの強靱な腕の一撃をかわすと斧を突くように突き出す。

「もう一発ツ！？」

だがその甘い一撃はルコディオラの強固な鱗にはじかれ、一瞬の隙ができる。その隙を埋めるように

「はあああッ！」

純白の一閃。白銀の光が煌き、眩しく光を反射するほど輝く、儀式用と見間違えるような装飾の剣を一閃。

青白い光をまとった剣は的確に、隙ができたラグナに一撃を繰りだそうとしていたルコディオラの腕に突き刺さる。すぐとなりを通過した剣の持ち主を見ると、そこには銀髪をヘルムの後ろからなびかせたルカが立っていた。

「あなたの実力はその程度ですか？」

リンの作ってくれた隙にバックステップで目標との距離をとっていたラグナをわざわざ振り返り、挑発。ふつつと自分の中に何かが込み上げてくるのがわかる。

「そんなわけねえだろ？ 俺を誰だと思ってんだ」

再び超重量の斧を両手で握り直し、目標に向ける。

敵との目則距離約20メートル。

攻撃が弾かれないように斧から剣モードに変形させると、プシュッ！という蒸気を吐き出す音が手元から聞こえる。

作戦をあれやこれやと考えている内に、あることに気がつく。

「閃光玉ないと勝てないんじゃないか？」

「今頃気付いたのですか？ 貴方が猪武者の如くバカなので妹さんとシャルに取りに行かせています」

ラグナの独り言にリンが呆れ半分怒り半分の声音で返してくる。

そうだ。閃光玉がないとアイツを殺せないじゃないか。

なにやってんだ俺。

機転のきくリンに感謝しながらリンの隣まで走っていく。

「サンキュー！ ひとまず弱らせるぞ！」

「了解しました」

無表情のまま、頷くとルコディオラの側面に移動するリン。

それに合わせてルコディオラの気を引くようにわざと大きく動くラゲナ。

側面は比較的攻撃を受けにくく、一方的に攻撃をしやすい場所だ。ボジション

基本攻撃に特化した双剣やハンマー、太刀が居る位置だが、今は二人しかない。ふたりとも位置につくと、一気に攻撃に移る！

「ゴワアアアアッ！！」

アイコンタクトで攻撃のタイミングを合わせ、斬りかかった瞬間、ルコディオラの周りの地面に不自然な輪が浮き浴び上がる。サークル

それに伴い周りの古龍撃退用の鉄製のバリスタの弾や、鉄塊がサークルの上を浮遊し始める。

「これが磁力つてやつか！？」

「気をつけてください。アレに触れると磁石のように吸い寄せられてしまいます」

「厄介な相手だなあ・・・」

サークルの上を浮遊している鉄塊など当たるだけで重傷を負いそうな大きさだ。

そんなのが複数浮遊しているサークルに飛び込むなどかなりの技術と度胸が必要だが、やるしか無い。

勝つためには。

「行くぞ！」

「どうぞ。援護します」

自身も浮遊を始めたルコディオラに向かって走りだす二人。

複数の鉄塊がコチラに飛んでくるがどうにかかわす。

少々のダメージは覚悟し、小さいものは手で払いのける。

そして、サークルに差し掛かると、一気に巨大な鉄塊がラグナに向かって襲いかかる。

「ウオリヤアアア！」

左右からの鉄塊をしゃがんで避け、正面からの鉄塊はジャンプ、着地前に飛んできた鉄塊を叩き割ると、とうとう本体の目の前に着た。そして空高く飛び上がり、剣をルコディオラの頭目掛けて振り下ろす、瞬間

ゴバアア！

地面から漆黒の槍が生えた。

見事にラグナを捉えた槍はラグナを吹き飛ばしたすぐ後に風にのって消えてしまった。

吹き飛ばされたラグナはサークルの外まではじき出され、リンの足元まで戻ってきてようやく止まった。

「ゴフツ！　ゴフツ！　さ、砂鉄の槍、かッ！」

むせながら立ち上がるラグナ。槍がぶちあたった腹部を震える手で確認するとどうやら出血は無いらしい。

ラグナの足が笑っているのを見てリンが肩を借す。

「大丈夫ですか？ 大口叩いて割にはみつともないようにも見えませんが」

わざと挑発的なことを言ってヤル気を出させるのがリンのやり方なのだろうか。

それとは別にラグナの口元には笑みが浮かび上がっていた。不適で不気味な。

「最近楽しい相手が多くて楽しいのやら、嬉しいのやら。クツクツク」

そう言うとしんを自分の方に抱き寄せ、ダンスのように反転。

ラグナがリンを抱き込むような体制になった瞬間、今までリンが居た場所に先ほどの砂鉄の槍が生えた。

引き寄せた拍子にヘルムが脱げたリンは何が起きたのか理解できていない様子で目を見開いている。

「そこで待つてな」

そう言うとき赤面した放心状態のリンを開放し、ルコディオラに向き直るラグナ。

ポーチから秘薬を取り出すと飲み込むように素食する。

「さ・と・て。お仕事だ」

剣モードの愛刀を肩に載せ、一気にルコディオラとの距離を走って詰める。

もはや鉄塊や砂鉄の槍は見切ったも同然。  
今のラグナには。

ルコディオラの目の前に辿り着いた時、ラグナの周りが砂鉄の壁に覆われた。

「どうするつもりだ？」

返事は帰ってこない一方通行の会話をする。

もちろん返事は帰ってこない。

代わりに帰ってつきたのは砂鉄のやり。

壁に覆われ、逃げ場が無い空間のなか、地面から砂鉄の槍が浮かび上がる。

が、

「しゃらくせえ！！」

拳を地面にたたきつけ、砂鉄の槍ごと地面を叩き割ると愛刀で壁を切り裂く。

ほんの少しできた隙間から外に飛び出すと、一気に飛び上がり、ル

コディオラの頭目掛けて剣を振りおろす。

ギイン！と頭に生えていた角を叩き割り、着地。

痛みと衝撃で墜落してきたルコディオラを見下ろすラグナ。

そこに

「兄貴！ 閃光玉！」

「遅くなりました！」

かなり走ったのだろう。肩を上下させたロクとシャルが戻ってきた。

その手には閃光玉が2個載っていた。

それを横目にルコディオラと対峙するラグナ。

「セリヤアア！」

ルコディオラの尻尾の一撃を難なく側転で回避すると、ルコディオラの強靱な後ろ足にその剣で斬りつける。

後ろ足は柔らかいらしく、かなりの出血量だ。

たまらず反転して今度は先ほどと同じように腕でラグナを弾き飛ばそうと腕を振るうが、それもバックステップで避けられる。

振りかぶりすぎたルコディオラのほんの少しの隙を見逃さなかったラグナはルコディオラの頭に剣を突きつけ、一気に頭に刺した。

ガリガリという骨がこすれる音の次に、ズブズブと剣がみるみるうちにルコディオラの頭に収まっていくのが見える。

「うっ・・・」

シャルが気分を悪くしたように数歩後ずさる。

同族があそこまで酷い殺し方をされれば誰でもそうなるだろう。

柄まで剣が収まり、顎から剣の先が見えているルコディオラの頭を見下ろしていたラグナは、今度は一気に剣を引き抜く。

ベリベリと肉と組織が強引に剥がされるような音が妙に響く。

「さって、お仕事終わり」

愛刀の血糊を数回振って吹き飛ばすと、元の形態に戻し、背中に戻す。

ザッザッバサバサと歩いてくるラグナはどこか狂気に満ちていた。  
例の戦闘狂が再発したのだろうか。

「お疲れ」

と一言口クとシャルに声をかけると再び街の中に姿を消そうとする

ラグナを久しぶりの人物が呼び止めた。

「ラグナ、議会が終わった」

ギルドナイト中対人戦最強であるキリル。

金色に輝く紋章をつけた幅広帽子を深くかぶった彼は、議会の結果だけをラグナに告げた。

「ギルドマスターたちは、お前を古龍たちには渡さない」

## 一人目

今までギルドマスター達を護衛していたキリルが騒ぎの収まった頃を見計らってやってきた。

先ほど頭を頭をぶち抜いたルコディオラだが、未だに死にきれずに手足を振り回している。

「急な話ですまないが、今の襲撃で決まったことだ」

ラグナにそう告げるとシャルの方に向き直るキリル。

その目は殺気すらまとっている。

「期限を守らず古龍が襲撃を仕掛けてきたことをギルドマスターは挑戦と受け取り、私たち人間は全力でお前たち古龍を迎え撃つ！」

高らかに開戦を告げると腰の長剣を引き抜くとその先をシャルに向ける。

しかしシャルの表情は変わらず余裕の笑みを浮かべている。まるで子供の言うことを聞く親のように。

「分かりました」

二三步下がったシャルの背中から鋼のような翼が現れる。

「竜人族の知恵を借りたとは言え、ここまで発達した生物は今後誕生しないでしょう。残念です」

翼をはためかせ、風にのって上昇するシャルの顔にいつもの笑顔はなく、今は冷徹な表情に変わっている。

「では、つかの間の休息をお楽しみください。いきますよリン」

そのまま高度を上げて超高速で姿を消したシャル。

続いてリンも無表情のままシャルの飛んでいった方向に歩き出すが、数歩歩いた所で立ち止まり、振り返る。

「先程はありがとうございました」

一言そういうとまた歩き出すリン。

「次あった時は敵同士。互いにがんばろうな」

返事が帰ってきそうにもないリンの背中に向かって叫ぶラグナ。

自分でも敵に何を言っているんだか、と呆れてしまう。

ゆっくりと、しかし一切の乱れのない歩きで次第に遠ざかっていくリンの背中を尻目にキリルに話しかける。

「思い切ったな。ギルドの連中も」

「ああ。人類滅亡の危機だからな!？」

いきなり声の裏返ったキリルの方を見ると何かに愕然としている。その見開いた目線を追っていくと、そこには

リン

を口に加えている、死んだはずのルコディオラ。そこでやっと思い出した。

古龍の力は強大で、人間では殺し切れない。

しかしその力を著しく低下させ、なおかつ人間以上の力を持つものであれば、殺すことができる。  
それがすなわち、対古龍狩人。

「そうだった！ ロク、閃光玉！」

おろおろとしているロクから閃光玉をむしりとると、一気にルコデイオラまでかけより、リンの細い体を噛み千切ろうと必死になっているルコデイオラの前に出る。

そこでやっとコチラに気付いたルコデイオラは自分に深い傷を負わせたラグナに怒りの矛先を向けた。

ラグナに向けられたその目は血走っており、今まで加えていたリンを放り出し、低い唸りを上げている。

「誰でもいい！ リンを手当てしてやってくれ！」

ラグナの声を聞きすかさずキリルがリンを小脇に抱え、城門に入っていくのが見えた。

それを見たラグナは再びルコデイオラに向き直る。

「今回はバッチし殺してやる！ かかって来いやぁアア！」

腰のスラッシュアックスを勢い良く引き抜き、火花を散らしながら斧モードに変形させる。

黒く鈍く光るそれは、再びルコデイオラの血を吸う事になるだろう。

「ギヤイイイイツ！」

甲高い咆哮をアカムシリーズは物ともせず、突き進むラグナ。

咆哮が終わったと同時にいきなりのプレス。

しかしそれも地面ギリギリまで身を伏せたラグナには当たらず、不発。プレス後の全身の硬直が戻らぬ内にルコディオラの下に潜り込む。その巨体故に目標を見失ったルコディオラ。

ルコディオラが周りを見渡している内に、ラグナはたっぷり助走をつけた剣モードでの斬撃で、足の筋を断ち切る。続けざまに側転し、もう片方の足の筋も切り裂く。

足は硬い甲殻や鱗に覆われていることが多いが、絶対的に動かさなければいけない筋はそこまで硬くはなかった。

いくら古龍とは言え、足の筋を断ち切ればバランスを崩すはず。

そう踏んでいたラグナはルコディオラの下から離脱すると目標の眼下に躍り出る。

そして倒れる、と思った瞬間。

「ガフツ!？」

ラグナの視界がぶれた。と思った次の瞬間には鈍い痛みと衝撃が右脇腹に走る。

少し揺れる視界でどうにかルコディオラを確認すると

「た、倒れない？」

倒れずそこに立っているのだ。

確かに筋を絶ち切った。しかし信じられないことに立っているのだ。ダメージは蓄積しているはず。筋は絶ち切った。なのに倒れない。これが古龍。

だが、更に止めと言わんばかりに巨大な口を開いてラグナを噛み砕こうと顔を下げた時、ラグナはニヤリと笑った。その手には安全装置の紐を引きぬいた閃光玉が握られている。

「悪いが俺の勝ちだ」

手に握った閃光玉をおもいつき地面に叩きつける。

ラグナを噛み砕くために顔を下げていたルコディオラの目には恐ろしい量の光量が入り、痛みさえ伴うだろう。そしてみるみる内にルコディオラの体が縮んでいき、次第には人間の形にとどまる。

手で目を覆うことが出来なかったラグナも軽く目を焼かれ、視界が安定せずに痛みで軽く涙を流している。

「兄貴！」

モンスターを人間に変えることを嫌っているロクにルコディオラに対して閃光玉を使わせる訳にはいかない。ならこの仕事は自分しかできないと思った妹思いの兄に行動に少々不安を覚えたロク。

スタボロになったラグナは再び剣を杖に立ち上がり、ルコディオラの方を見る。

ルコディオラが居る筈の場所には傷だらけの少女が横たわっていた。おそらく彼女がルコディオラだろう。

「まずは一匹か・・・」

剣先を地面に突き刺しながら少女の元まで歩いて行き、剣を振り上げる。

そして、少女の頭目掛けて、漆黒の剣を、振り下ろす。

## 巨竜の進撃

ガシャンツ！と振り下ろされかけた剣が地面にたたきつけられる。杖にしていた剣を振りかぶり、あまつさえ叩き落とされたラグナはその場に膝をつく。

なぜ自分の剣が叩き落とされたのか原因がわかっていないラグナが後ろを見ると長剣を片手に帽子が落ちないように片手で抑えているキリルの姿があった。

そのキリルはラグナと目があうと長剣を鞘に戻し、身なりと整える。

「そいつの身柄はコチラで預かる。いろいろと聞きたいこともあるからな」

そう言うとう上を向き、バリスタの狙撃台の上にいたギルドナイトを呼ぶと、元ルコディオラの少女がギルドナイト二人に担がれ、城壁の中に消えていった。

それを見送ると今度はキリルはラグナの肩を担ぐ。

「アイツは死んで当然のやつだ。なんで邪魔した」

苛立ちを隠そうともせず中半怒鳴りつけキリルの方を向く。

「さきほど言っただろ。いろいろ聞きたいこともあるんだ」

耳元で怒鳴られ、顔をしかめていたキリルは指を鳴らし、暇そうにしていたギルドナイトにラグナを任せ、自分は城門の修復現場の監督を始める。

キリルはキリルで何やら忙しそうだったのでこれ以上追求するのはやめて、おとなしく救護班の手当を受けることにした。

「・・・兄貴」

救護室と言っても城壁の中の大きなホールをそのまま使っているだけのまるで野戦病院のような場所だ。

その中で異様に目を引いているのが一足早く来ていたロクと、その前に横たわるリン。

腹と背中にとどろい傷を負ったリンは白を通り越して青い顔をしている。

その弱々しい顔を見ているのはなぜか辛くて顔をそらすラグナ。

しかし寝かせられた場所がリンの隣だったため、異様に気になってしょうがない。

「その、リンの容態は・・・」

恐る恐るラグナを包帯でぐるぐるしている医者らしき人物に聞いてみる。

その医者というのが無精髭にタバコという医者らしからぬ姿をしている。

「リン？ ああ、その女性か。大丈夫だよ。人間とは思えない回復力を見せている。数日で元気になるよ」

その言葉を聞いて安心したラグナは、ロクの不機嫌そうな顔を尻目に、浅い眠りに落ちていった。

数時間後

「これ以上は無理だ！ 他の救護室に回してくれ！！」

先ほどの医者 of 怒声で目が覚めたラグナ。

周りでは看護婦らしき人たちが大勢忙しそうに走り回っているのが見える。

それを数秒見ていたラグナは薄いせんべい布団から飛び起きた。

「ロク！」

妹の名前を呼びながら周りを見渡す。

今の状況を聞くのはロクが一番だと瞬時に判断したからだ。

しかしロクの姿はそこにはなく、多少顔色の良くなったりリンが横たわっている。この異常な雰囲気の中気付いたことは、この野戦病院にハンターの数が増えているということだ。

今回のルコディオラ撃退はギルドナイトと近衛隊しか参加していないはずだ。だがハンターの姿が増えているということは・・・

「やつべえ！」

隣に外してあった防具を急いで装備すると、愛刀兼愛斧の覇剣斧ムルカムトルムを背中 of フックにかけると、急いで城門の外へ飛び出す。

その先には・・・

「ラオシャンロン  
岩山龍！？」

老山龍は成長過程で周りの物質を取り込み甲殻をより強固なものへと成長させていく。つまりその成長過程で何を取り込んだかでその

老山龍の甲殻の硬度が決まってくる。

そしてすぐ目と鼻の先に居る岩山龍は名前の通り、火山灰を取り込み岩のような高度の灰色の甲殻を手に入れた老山龍の亜種だ。

全長八十メートルの動く岩山。

この岩山龍にはバリスタや大砲は効果を発揮しない。そすると必然的にハンターが近づき直接攻撃を加える必要がある。

それで先程の負傷したハンターが大多数出ていたのだ。

ふと岩山龍の足元をみると、老山龍と比べると米粒のようなハンター達が数十人で攻撃を加え、城壁からはバリスタや大砲の雨が降り注いでいた。

それでも前進し続け、絶対的な力を見せつける岩山龍。

「俺もッ」

きしむ体にムチを打ち、無理やり走って岩山龍に向かっていくラグナ。

しかし先程無茶な動きをしすぎたラグナの体は言うことを聞かず、すぐに足をもつれさせてコケるラグナ。

カッコ悪いと思いつつも、立ち上がるラグナの周りを数十人、いや、百数十人のハンター達が雄叫びを上げながら駆け抜ける。

その後を遅れながら歩いていく11人のハンター達。

「おいおい。何もないとこでコケるとかマジ勘弁だわ。スカウトした俺が馬鹿みたいじゃん」

明らかに普通のハンターとは雰囲気の違い11人の中の一人、黒い東洋の甲冑を纏い大剣を方に担いだ男が笑いながら手を差し出してくる。

その顔には見覚えがあった。

最大規模の獵団『神機武装』の幹部獵団『神機11将』の一角、バルク。

この男こそが神機武装を立ち上げたその人だ。

「俺のユーモアセンスが分かんないとかまじねえわ」

差し出された手を力強く握り返し、勢い良く立ち上がる。

バルクの周りには他に10人が立っていた。バルク本人もあわせてこの11人はドンドルマのハンターの中でもおそらくベスト20にはランクインしている。

そのなかでラグナが面識を持っていないものはいない。誰もがラグナと狩りに行き、絆を深めた仲間たちだ。

「げ、元気だった？」

弓を持った女性・レイリーはいつも顔が赤く、滑舌が悪い。

逆にいつも彼女を心配しているラグナの心の内も知らず、心配の言葉をかけてくる。

「素手でGリオ夫妻亜種と殺り合うくらい元気だったぜ」

「ダハハハッ！ 元気で何よりだ！」

ハンマーを腰に、深いシワと傷が付いた顔に白髪混じりの頭をした古参のハンター、ダーティはバシバシとラグナの肩を叩いてくる。

ちなみに前に狩りに出た時は63歳だったはずだ。今は何歳なんだ？

「さて、お前さんにもひと暴れして欲しいとこだが、ギルドナイトからは事情は聞いたぜ？ 二時間前に一人でルコディオラとやり合っただってな。今は俺達に任せてゆっくりしてろ」

仕方なくバルクの言葉に甘え、再び救護室に戻るラグナ。  
二大猟団の『神機武装』が全員とは行かないものの、撃退に参加してくれる。これだけで安心できる。  
再び救護室に戻ろうとしが、誰かに肩を捕まれた。

振り返ると

「あの餓鬼ルコディオラが目を覚ました。　ついて来い」

それだけを言うと、再び歩き出すキリル。  
その後を足を引きずりながらついていくラグナ。  
立て続けに二頭の古龍が攻めてくるなど、前代未聞のできごとだ。  
これは一体・・・

## 二人目 進撃のマリアンヌ

薄暗い廊下をただ進こと数十分。

隣のキリルが止まったのは牢獄の中でも最下層の最恐の咎人が集まる場所だ。

錆びついた分厚い鉄製の扉がきしみを上げて開かれると、その中は一切の光と温度が遮られた空間だった。

その暗闇の中、キリルのもつ松明だけが煌々と辺りを照らしている。

「こんな所に閉じ込めてるのか」

低い唸り声と罵声が飛びかう暗闇の中、元モンスターとは言え、あんな少女をこんな所に閉じ込めていていいのだろうか、という気持ちもないわけではないが、それだけのことをしたのだ。あの少女は。

「ここだ」

前に行くキリルが止まり、真つ暗な獄中を松明で照らすと、中には薄く光を発する金色の折れた角があった。

ボロ布を体に巻いた少女が何もない石の部屋の中、隅で小さくなっているのが見える。

松明の明かりに気付いたのか、弾かれたように顔を上げるが、ラグナの顔が見えると再び塞ぎこんでしまった。

それに苦笑いするしか無いラグナ。

「すまんかったな。てつきりルカの使い走りかと思っただけでな」

ルカの名前が出た時だけ反応を示したが、それ以外はラグナの顔を見ようともしない。

そこどころが更に露骨に不機嫌そうな顔をしているが、やっと口を開いてくれた。

「あんな自己中女の下っ端だと？ 冗談じゃない。『お前は黙って静かにしている。特に絶対ドンドルマとか襲撃しちゃダメだぞ。絶対だぞ！』って言われたからワザと襲撃してやったんだ。参ったかこのやろお」

そこまで聞いてキリルは深いため息を、ラグナは満面の笑みを浮かべた。

「ははは。なんて露骨に馬鹿な子なんだろうなあ」

つつい出してしまった言葉だったのだが、それを聞いたルコ娘は過敏反応を起こした。

「わ、私が馬鹿だと!？」

「いや、いかにも驚愕って顔されても困るんだが・・・」

グググと唸りを上げるルコ娘だが、獄中ではどうにもならない。

そこで何かを思い出したようで、なぜか勝ち誇ったように微笑を浮かべる。

「そう言えば隣の牢に自己中女の側近が捕まっているようだな。ザマア見る！」

ルカの側近？と首だけ隣の牢に向けると中で青白い閃光が迸っている。

その現象に見覚えがあったラグナは思わず駆け寄ってしまう。

牢の中を確かめたラグナはキリルに駆け寄る。

「なんでリンまで捕まってるんだよ！」

思わずキリルの胸ぐらを掴みかかるラグナ。  
忌々しそうにその手を振り払うキリル。

「アイツは古龍だろ。今暴れだされたら迷惑だからな」

当然のように返されたラグナは、

「ふざけるなよ！」

再びキリルの胸ぐらをつかみ、拳を振り上げる。が、キリルは逆にラグナの手を掴むと足を払い、その場に抑えこむ。

「お前がモンスター相手に武器を振ってる間に、俺たちギルドナイトは人間に向かって武器を振ってるんだ。お前じゃ勝てんよ」

周りの獄中からやれやれと野次が飛ぶが、全く気にせずキリルはラグナの拘束を解いた。

適度に服の乱れを直したキリルは手に持った鍵をラグナに渡す。  
キリルの顔を見返すラグナ。

「お前がそこまで他人のことで熱くなるなんて見たことがない。  
そいつはお前にとって特別な存在なのか？」

「ああ。悪いが」

多少迷った挙句、そう返すと

「・・・そうか」

そう言うのと松明をラグナに渡すとキリルは闇の中に消えていった。それを呆然と見ていたラグナだが、ハッと我に返ると急いでリンの牢の鍵を開ける。

多少ふらつきながら出てきたリンを見ると、ところどころ赤く染まった包帯を巻いている。

「先程の特別な存在とは？」

「き、聞いてたのか？」

気恥ずかしくなったラグナは再びルコ娘の方に向かう。

「嫌でも聞こえます」

なぜか小さい声でそう答えると黙りこむリン。  
何故か気になってリンの方を向くラグナだが、リンはうつむいたまま付いてくるだけだった。

「で、私は出してもらえるんですか？」

「あ、忘れてた」

半分本気で忘れていたルコ娘を確認すると先ほどと変わらない場所ですくまっている。

なぜかかわいそうな気もする。いざとなったら俺がどうにかすればいいか、と鍵を開けてやると驚いた様子で牢から出てくる。

「お前の名前は？」

そう言えば聞いてなかったことに気付いたラグナは一応聞いておくことにした。

「ん？ 名前は・・・無い」

「ナイか。いい名前だな」

「ぶっ殺すぞ」

「じよ、冗談だ。でも面倒くせえな。適当にルコとかでいいじゃね」

「すげえなお前！」

「はは。そんなに褒めるなよ。照れるだろ」

「ネーミングセンスの無さがスゲー！」

「はいはい」

隣でそのやりとりを見ていたリンが少しだけ笑ったような気がした。

地上　城門前

「あら、遅かったじゃないですかあ」

すでに地響きが収まり、撃退に成功したと思っていたが、甘かった。

百数十人のハンターが倒れ、神機11将と数人のハンターだけが残っている状態だった。

それもおそらくアイツの仕業だろう。

前に一度見たことがある顔がそこにあつた。

意味不明なほど馬鹿でかい十字架の剣を背中に背負い、灰色のドレスのような甲冑。

綺麗だったはずの黒髪は返り血を浴びてところどころ赤く染まっている。

「ルカ様の命により、岩山龍 進撃のマリアンヌがラグナ・ジークフリードを保護後します。抵抗はしても無駄ですよお？」

地面を挟る程の脚力で一気にラグナとの距離を詰めたマリアはその十字架の剣を振りかざす。

それをステップで避けると距離を稼ぐためにバックステップを繰り返す。

十字架の剣が斬りつけた地面は物の見事に割れている。それも石畳の地面がだ。

「お前保護って言っただろ！ 死ぬってそれは」

地面深くめり込んだ剣を片手で軽々引き抜くと肩に担ぎ

「そうですかあ？」

と再び剣を振りかざして飛び掛ってくるマリア。

大きな武器ほど攻撃パターンは限られ、一番合理的な攻撃に依存する。

これほど大きな武器なら、縦か横、斜め、あとは側面で叩きつける程度が精一杯だろう。

しかもこの重量なら一撃の後は硬直状態に陥り、動けなくなるはずならば

「ええい！」

可愛らしい声と裏腹に恐ろしい斬撃が繰り出される。  
縦に斬りつけてきたマリア。

想定内の攻撃をラグナはステップで軽くかわす。おそらくマリアは縦切りに依存しているはず。

しかし、相手は古龍。

再びラグナに避けられたことを悟るがすぐ無理やり横に剣を振る。

「マジかよ!？」

振り下ろす直前で無理やり剣の軌道を変えたのだ。

あの剣の大きさであんなことをしたら普通の人間なら手首・肘・肩・腰・膝が砕けかねない。

それを苦なくやってみせる。これが古龍。

想定外の攻撃に対処が間に合わないラグナは両手でその刃を受け止める覚悟を決め、目を硬くつぶる。

「やああ！」

風を切り裂く音が聞こえ、続いて甲高い金属音が鳴り響く。

が、ラグナのもとには衝撃は来なかった。

ゆっくり目を開けると、そこには見覚えのある銀髪がなびいていた。その細身の剣である大きな剣を火花を散らしながら鍔迫り合いを繰

り広げていた。

「きゃッ！」

続けざまにギヤリギヤリと甲冑を削りとられ、蹴り飛ばされるマリ  
ア。

そちらにも見覚えのある銀髪が。

「あなたの力はその程度ですか」

「兄貴！」

二人の少女がそこに立っていた。  
それを見たラグナは

「さあ、反撃開始だ！」

## 狩人の円舞

吹き飛んだマリアは土煙を上げ受身を取り、すぐに体制を立て直す。新たな敵を認識すると、少し驚いたような表情を浮かべ、剣をしっかりと握り前にかざす。

先ほどの様子とは裏腹に、マリアンヌが初めて見せる戦闘態勢に入る。

「ルカ様に一番忠実な貴女が裏切るとは計算外でした。リン」

姿勢を低く、剣を上段にかざすマリア。

先ほどのまでの戦闘では見せなかった本格的な臨戦態勢に周りのハンター達も自分の得物を強く握り警戒を強める。

「それに貴女も。これだから下等古龍は困りますねえ」

馬鹿にするような微笑をルコに向けるマリア。

ラグナの遙か遠くに居たルコは、まんまと挑発に乗り無鉄砲にマリアに殴りかかりに行こうとするが、近くに居たハンターに取り押さえられる。

「リン。貴女の古龍の力は奪われてはいないと言っことは自分の意思で人間側に付いたということですね？」

再びリンに視線を戻したマリアが鋭い目付きで牽制する。

ヘルムを着けず、眩しい銀髪を風になびかせるリンは小さく頷く。

「本来、私はラグナ様の近くに居るべき者ですから」

目線だけラグナの方を何の躊躇ためらいもなく見ながらそう言い放った。  
命令でしか動かないと思っていたリンは今、強い意思を持ち、ラグナを守るうとしている。

ラグナは顔が熱くなるのを感じたが、それ以上に心強さを感じていた。

「ふんッ！ 兄貴は私が守るもん」

ふてくされたようにロクがつぶやく。

「しょうがありません。邪魔者は排除しろ、とのことでしたからねえ。恨まないでくださいね」

唐突に上段から剣を振り下ろし、大地に円を書くように回転するマリア。

誰もが訝しげにそれを見ていた。

「ッ！？」

しかしリンだけが次で出来事を想定し、ロクとラグナを突き飛ばす。

「ウオオ！？」

「キャッ！」

その刹那、何かがラグナとロクの頭上を風を切って通りすぎる。

一瞬の差でリンはしゃがみ、その何かに当たらず、安堵の表情を浮かべる。

「ザコどもはこれで十分ですねえ」

リンにお礼を言い急いで立ち上がると残っていた十数人のハンターが痛みで地面をのたうちまわっていた。

いったい何が起きたのかはすぐに分かった。

私生活の近く存在し、誰が使っても凶器になる物。

大小無数の石がハンターの近くに散らばっている。が

「ガッハッハッハ！ そんな小細工がワシに通用すると思うなよ、小娘！」

「ダーティ！？」

ラグナが見たのは神機11将中、最古参のダーティが額から血を流しながらハンマーを腰ためにマリアに突撃していく姿だった。

「行くぞラグナ！ あんなジジイに任せっぱなしってのも癪に障る！」

どこかぎこちない動きでラグナの肩を叩き、ダーティの後を追うバルク。

彼に続いて他のメンバーも果敢に立ち向かっていく。

それらに対して煩わしげな表情を浮かべるマリアンヌ

「人間風情がうるさいですねえ！」

ダーティが振り下ろした巨大な鉄塊を更に巨大な剣で受け止めたマリアはダーティを押し切ると再び地面をえぐり、石を飛ばそうとするがそれは嵐の如く吹き荒れる矢が許さなかった。

「やらせません!!」

一度に5本の矢をつがえ、それをマリア中心に次々と降らせていくレイリー。

そのえげつない攻撃を巨大な剣を傘代わりに矢の雨を凌ぐマリア。そこに

「いっただいア!!」

横から片手剣使いが滑りこむようにマリアの足に斬撃を加え、離脱。それを援護するようにライトボウガン使いがマリアの背中を狙撃。体が小さくなり状態異常に耐性がなくなったのか、本来なら決してなることのない麻痺状態で身動きがとれなくなったマリア。

その期を逃さずガンランス使いがマリアの目の前に躍り出る。

目の間に敵がいるのに対処ができないマリアは苦痛と怒りで顔をゆがめるが、それに構うことなくガンランス使いは淡々とマリアの胸にその銃口を押し付け、手元のスイッチを入れる。

銃口にいくつもの炎の束が掌握され、陽炎で視界がゆがむ。

さらにマリアの顔が恐怖に歪み、爆発。

飛竜のブレスを元にギルドが開発したガンランス最大の攻撃、竜撃砲が炸裂。麻痺が解けると同時にガンランス使いも離脱。

マリアは、ハンター達の猛攻にたまらずバックステップで距離を稼ぎ、体力回復を図るが、恐ろしいほどの破壊力を秘めたヘビィボウガンが火を吹き、追撃を加える。

まるで最初から打ち合わせをしておいたかのような鮮やかな連携に圧巻するラグナとロク。

「何をしているのですか。私達も続きますよ」

リンの言葉で我に返った二人は、一旦ハンター達が引き、体制を整

えている内に攻撃に移る。

が、明らかにマリアの雰囲気が変わっていた。

「ったく、ちくしょうめ！ 下等生物ごときにここまで苦戦するとは！ 殺してやる！」

すでに浅い傷は治っているマリアは剣を背中に戻し、地面に四つん這いになる。  
そして

「来ます。 気をつけてください」

ハットリンの方を向き、再び標的を見るとそこには

「岩山龍。 元はモンスターだったな」

そう言えばというようにつぶやくラグナを振り返り、

「閃光玉は？」

「2個持つてるがこのデカさじゃダウンさせてから当てないと効果は無いだろうなあ」

この大きさのモンスターをダウンさせるのは並大抵のことでは無理だ。だがここには彼らが居る。  
そう

「話は盗み聞きしてた。なんか面倒なことになってんなあ」

バルクを筆頭に神機11将の面々が近くまで歩いてきていた。

最強の集団<sup>スケット</sup>が。

「残念ながら」

苦笑いを浮かべるラグナに満面の笑みを返してくるバルク。

「手伝ってやろうか？」

「ああ、頼む」

歴史に残る防衛戦、開戦。

## 守るもの

一撃ごとに手が痺れるほどの硬度を誇る岩山龍。名前の通り、岩を斬りつけているような感覚だ。

しかしここで引くわけにはいかない。ダウンを狙えば勝ち目は十二分にある。が

「距離が足りない！ 何が何でも止めるんだ！」

著しく低下した握力を確かめながらラグナが他のメンバーに激を飛ばす。

先程から最前線に出ていた他のハンターも握力と切れ味を回復させるために一度後退する・

「背中じゃない！ 足を狙え！」

ギルドの迅速な対応により、増援のギルドナイト狙撃班が援護に來てくれた。

その彼らに命令を下している神機11将のボウガン使いの二人の聲が遠くから聞こえ、後にバリスタによる鉄槍の雨が岩山龍の前足に降り始める。

その頃、岩山龍の後ろ足では神機11将とラグナロク兄妹、そしてキリルがまとわりつくように攻撃を加えていた。

「シリウス、アキレス、風魔、レイモン、ダーティのオッサンは左を頼む！ 俺、ラグナ、ロク、キリル、サイガ、レイリーは右を！ バロンは後方支援頼んだ！」

即座に一番バランスの良い役割分担をすると、バルクはふたたび岩

山龍の足に食い下がる。

その勢いに当てられたのか、他のハンターも猛攻に移る。が、先程バルクが言った通り、城門までの距離が足りない。

それもそのはず、マリアン又は城門の目と鼻の先で岩山龍に戻ったのだ。ほんの数十分放っておけば城門を突き破って街に絶大な被害をもたらすだろう。

まさに、歩く天災。

しかし城門内でモンスターになっていたらどうなっていたか、想像もしたくない。

せめてもの救いはそこだけだ。

「怯むなよ！ こっちは神機11将と破壊神が居るんだ！ 負けるわけがない！」

こういった長期戦やギリギリの狩猟、防衛戦では戦力・装備・技量よりも、最終的にはモチベーションが必要になってくる。

さすが多くの部下を動かすだけのことはあるキリルはワザと自分たちの本当の力を再確認させるよう、声を張り上げる。

と、そこにバリスタの雨をもろともせず走りこんできた獅子。否、獅子ではない。

獐猛な雰囲気醸し出す黄を基調にした防具には地割れのような赤いラインが入っている。

その人物は・・・

「暴食のテイル、参上！！」

それを見たキリルの表情が一瞬引きつるが、すぐにいつものすまし顔に戻る。

「よおおおし！ 押し返せ！！」

そのラグナの声を発端に、周りのハンター達の動きが極端に鋭くなる。熱っぽい張り詰めた空気の中、ラグナは誰かがいないことに気がつく。

それが誰なのかは興奮状態のためわからないが、明らかに戦力が減っている。

「ウオリヤアアアア！」

そんなことは頭から叩き出すと背中からスラッシュアックスを一息に抜き放ち、その勢いを留めることなく流れるような動きで目の前の巨大な足に叩きつけるが、刃がまるで通らない。岩を叩くような感覚が腕に伝わり思わず武器を落としそうになるがそれをこらえて過ぎの瞬間には火花を散らしながら剣モードに変形、斬撃の嵐を食らわせる。が、岩山龍の足は鱗が何枚か吹き飛んだだけで終わった。

「ダメージは蓄積しているはずだ！ いけるぞ！」

とにかく今は我慢比べだ。ここまで巨大だと動きが鈍い。その分、攻撃は当て放題だが、逆に巨大すぎてびくともしない。

ここで踏ん張れば先には勝利という栄光が待っていると信じて闘う。そうした心の支えが無ければ勝てない相手だが、今回は一味も二味も違う。

「もうじき爆撃班の爆撃だ！ 一旦引くぞ！」

キリルの提案でギルドナイトには狙撃班と爆撃班の2つに別れてもらっている。

狙撃班は名前の通りにバリスタでの狙撃。そして爆撃班は大量の大

タル爆弾Gを一箇所に集中して置き、爆撃。

動きが鈍い分、どのモンスターよりも大タル爆弾を当てやすい。そこを最大限に生かした作戦といえよう。

その爆撃班の準備が整った。

ラグナも一旦岩山龍から離れる。

ふとバリスタの狙撃が止まっていることに気がつく。

そして皆が岩山龍の進行をかたずを飲んで見守る。

一歩、また一歩大タル爆弾Gに近づき、そして

「今だ！」

キリルの合図と共にバリスタの狙撃が一齐に再開され、その一発が一つの爆弾に着弾。黒い煙幕を上げながら次々に誘爆していき、最終的に黒い煙で岩山龍が見えなくなる。

そして、沈黙。

ただ恐ろしいほどの爆音で耳がおかしくなっているだけかもしれないが、何も聞こえない。

ギルドナイトの爆撃班の連中がガッツポーズをしているのがわかる。が、振動。

地面が揺れ、視界が揺れる。

「やはりな」

そう。やはり。ポツリとダーティがつぶやいた言葉は自然と耳から入ってくるようだった。

確かに爆撃班の爆弾は岩山龍の四肢を焼いたが、決定打にはなっていない。

淡々と歩く岩山龍をみた爆撃班の数名はその場につずくまった。

「最後はやはり、あれか」

「ああ。あれだ」

「結局あれかよ。撃竜槍」

ラグナはいつの間にか近くに来ていたキリルとバルクは短いやりとりをしていた。

顔の位置は高すぎて直接は閃光玉の効果はない。

そのためダウンを狙う必要があったのだが、それも間に合わなかった今、最終兵器に頼るしかほかない。

「そう言えばリンとか言った女がお前の閃光玉の一つをどこかに持ってたぞ」

キリルの言葉にハッとなったラグナは今さらながら思い出す。

そう言えば先ほど誰かいないと思ったらリンがいなかったのだ。

ゴソゴソと自分のポーチに右腕を突っ込むと確かに閃光玉がひとつ減っている。

「なにやってんだ、アイツ」

「さあな」

「え？ 誰それ、お前の彼女？」

興味津々というようにバルクが二人の話に首を突っ込んでくる。

それを押し戻すと岩山龍の足元まで再び全力で突っ込む。

出来れば撃竜槍<sup>あれ</sup>には頼りたくはない。何か悪い胸騒ぎを感じ取っていた。

しかし、抵抗も虚しくすでに岩山龍は城門の目の前まで進んでいた。

「やっぱりあれに頼るしか無いのかぁ」

ラグナはどうしても不安が拭い入れず城門の下でウロウロしている。すでに城壁をぶっ潰す気満々の岩山龍を止めることは難しく、と言うかハンターの攻撃では不可能。

結局撃竜槍によりダウンしたことを考えて城門の下で待機しているのだ。

バルクとキリルも城門の上に向かい、今はロクとティルと三人だ。

「落ち着け破壊神」

「兄貴、大丈夫だよ。皆頑張ったんだから」

妹になだめられるとは恥ずかしい。微妙に恥ずかしくなったラグナは壁に持たれてその時を待つことにした。

城門→武器庫

「マリアならやりかねない」

薄暗い部屋の中、唯一の窓から眩しい光が差し込んでいる。

その窓の先には岩山龍<sup>マリアンヌ</sup>。

ここは撃竜槍と地面のちょうど中間に作られた武器庫でここからだと岩山龍の進行が一目でわかる。

そしてここにリンが居る理由は、2つ。

体力回復を図るためと、マリアンヌを倒すため。

ただ正面から彼女と戦つても勝ち目が無いのはわかっていた。

しかし、いま手のうちには勝利の鍵が握られている。古龍の力を犠牲にしても守りたいものができた。昔の自分では考えられない事だったが、なぜか今の自分なら納得ができる。

気がついたのだ。使命や命令など小さなことに感じてしまう感情に。

城門へ撃竜槍スイッチ前

「まだだぞ！」

岩山龍はすでに立ち上がり、一步一步地面を揺らしながら近づいてきている。この撃竜槍は普通なら外さないが、万が一に備えバルクに動かしてもらうことになっている。

動かすと言っても馬鹿でかいスイッチを鉄製のハンマーでぶつ叩くだけなのだが、それも腰を抜かしたりすると押せないものが出てくるのだ。

「もう少し・・・」

テラスに居たギルドナイト達は避難を済ませ、城門上にはこの二人しかない。

「しくじつたらお前とご臨終か」

「それだけは避けたいな」

ちがいねえ、とバルクが笑うとキリルもつられて笑ってしまう。  
後3歩。

「お前、暴食とどういう関係なんだ？」

そう言えば、言うように聞いてくるバルク。

ハンター達の間でもちよつとした噂になっているこの二人。

後2歩。

「ん？ 監視役」

その答えを淡々と待っているバルク。

後1歩。

「と、片思い、かな？」

「ならまだ死ねねえなあ！！」

勢い良く振り下ろされた鉄製のハンマーは大きな赤い龍のかかれた  
スイツチをぶつ叩き、火花を散らせる。

ギヤリギヤリ！と鉄と石が擦れる耳障りな音が響き、蒸気と巨大な  
鉄槍が勢い良く突き出る。

燃石炭と火薬岩を大量に使い、巨大な鉄槍を突き出す仕掛けの最終  
兵器・撃竜槍だ。

並の大型モンスターなら一撃で仕留められる程の威力を持っている。  
やったか？！とラグナを含めたそれを見ていた全員が身を乗り出し  
て期待するが、その期待はいとも簡単に裏切られた。

直撃後一步の所で光が収縮し、岩山龍から人間型のマリアンヌに姿

を変えたのだ。

「ちくしょおおお！」

「終わった・・・」

「まだだ！ 人間になっても閃光玉を当てれば」

「あの素早さでどうやって当てるんだよ！」

撃竜槍を交わしたマリアンヌは飄々とした顔で地面に着地する、筈だったのだが

「これで終わらせる！！」

ダンッ！と小さな窓から銀色の髪をはためかせ飛び出たリンは腰のブロードソードを抜き放ち、空中で体制が整わぬマリアンヌめがけて、突き出した。

「り、リン！？」

ラグナは思わず素っ頓狂な声を上げる。

どこに行ったのかわからなくなっていた人？がいきなり空中で敵に向かって剣を振るっているのだ。

「再び人間になるには体力と一定以上のインターバルが必要だった。そして人間は最後に撃<sup>あ</sup>竜槍を使うことを知っていたお前は最後の最後に人間になると踏んでいた」

初撃をかわされたリンは先程の武器庫で調達した二本目の剣を突き

出し、マリアンヌの脇腹を捉える。

痛みで顔をしかめるマリアンヌだが、躊躇いなく一本目の剣を捨て、マリアンヌの黒髪を鷲掴みにするリン。その瞳には強い決意の色が浮かんでいる。

「何をしているのですか！ 私達<sup>わたし</sup>は仲間でしょ！？」

「私の生き方は私が決める。私はもはやルカの部下ではない。ラグナ様の」

そこでポーチから閃光玉を取り出すリン。

「仲間だ」

それを見たマリアンヌの顔色が変わる。

「それをすれば貴女も力を・・・」

「構わない」

ラグナの力がこもった閃光玉は、まぶたを閉じても防ぎ切れないほどの光量を撒き散らし、リンとマリアンヌからことごとく古龍の力を奪い去った。

## 皇帝 皇妃

「ウオオオオオオオ！」

雄叫びを上げながら二人の落下地点まで爆走するラグナ。

パツと見上空40メートル以上の高さから落ちたら常人なら即死。たとえ残りかす程度でも古龍の力が残っていたとしても下は石畳でできているため、あの速度で激突したら恐らく命は……。

「間に合えええええッ！！」

人間離れたラグナのすぐ後ろに、やはりコチラも人間離れた速度でロクがついてくる。

ラグナについてきていると言うよりかは、ラグナと同じように頭より体が先に動いてしまったのだろう。

二人が一歩進むごとに踏み込んだ石畳にヒビが走る。

みるみるうちにラグナとロクの走る速度とリンとマリアの落下速度が上がっていく。このままでは二人が間に合うかはぎりぎりだろう。その落下しているリンとマリアは力が格段に減少し、落下中ピクリとも動かない。

しかしやはりマリアはあの無駄にでかい剣の重さでリンより落ちる速度が早い。

「行っけエエエエエ！！」

約10メートルに迫った時、背中のスラッシュアックスを投げ捨て、グリーヴの突起など気にせずスライディングをするラグナ。

ガッガッ！と漆黒の棘が石畳を傷つけ、時には引っかかるが、逆に引っかった石を砕きながら滑っていくラグナ。

そして、ぎりぎりの所で・・・間に合った！

マリアをキャッチしたラグナの勢いは止まらずそのまま数メートルほど進んで止まり、後ろを振り向くとロクがラグナと同じような体制でリンをお姫様抱っこしていた。

それを見て安心したラグナは一息つくと、マリアを抱きかかえて立ち上がり、キリルの元へ向かっていく。

その途中でふと思ったのだが

「なんでこいつのこと助けたんだろうなあ」

自分でも不思議になるくらい必死に、さも当然のように全力疾走していたが、リンを助けるだけなら普通に間に合ったし、コチラを殺しにかかってきている輩をこんなにも必死に助けた意味が自分でもわからない。

必死に首をかしげ、落ちている自分のスラッシュアックスを再び腰に引っ掛け、立ち上がると、後ろを歩いていたロクがすぐとなりに来ていた。

「それは、ラグナ様がお優しい方だからですよ」

それは母親が子供を諭すような優しい声色の声だった。

音源をたどるとロクの腕の中でリンが微かに綺麗な碧色の瞳を開いていることに気がつく。

それを見てラグナの中には怒りと安心が同土になだれ込んできた。

「お前！ 作戦があるなら俺に言えば良かったのに」

そう言うとかすかに首を横に振るリン。

それを見てラグナは軽いため息を付いた。

「これは俺達兄妹の問題なんだ。お前がそこまで頑張る必要がある？」

「じゃあ、私があなたのために頑張ってはいけない理由がどこにあるの？」

間髪入れず切り返してくるリンを、ラグナは睨みつける。

モンスターすらすぐみ上がるラグナの眼光をサラリと受け流すリン。

「お前が傷つくとなんだか」

「兄貴」

ついに痺れを切らしたラグナが激昂しそうになった絶妙なタイミングでロクが制裁を下す。

「なんだ？」

目に入れても痛くない妹の話を無視するわけがないラグナは、マジギレ途中にもかかわらす満面の笑みでロクに向き直る。

「女の子にもいろいろあるの」

何を言われたのかさっぱりわからないラグナはポカンと口を開けて呆然と立ち尽くしている。

それを見たロクとリンは顔を見合わせて小さく笑い、先に行ってしまった。

「まったく。なんだよ」

愚痴りながらも、今更怒る気にもなれない。結局、そのままキリルのもとに戻るのだった。が

「あのお」

手元から声がしたと思ったら、いつの間にかマリアが気がついていたらよかった。

お姫様抱っこが恥ずかしかったのか顔を赤くしている。

「なんで私なんかを助けたんですか？ 私はあなた達兄妹を誘拐しようとしたんですよ？」

おずおずと聞いてくる

「別に自分で救える命があるなら、救っておかなきゃ損だろ？」

ぶっきらぼくに返し、そのままマリアを抱えて先を急ぐ。

キリルのもとで何か人が集まっているので何かあったのか心配になったのだ。

急ぎ足でキリルのもとにつくと、人溜まりの中心にはリンが立っていた。

「恐らくマリアが攻めてきたということは、ル力が動き出したということでしょう。ル力は『原点の場所』を拠点に動いています。恐らく今はそこでしょう」

どうやら今後の方針について11将とキリル・ティルとロクで話しているようだった。

自分だけ乗り遅れた話に、すぐに追いつこうとすぐに聞き入る。

「その『原点の場所』とはどこだ？」

バルクが今一番欲しい情報を聞き出す。

「あなた達ギルドでの正式名所で言う所の『塔』と言われる場所です」

キリルが首をかしげ、しきりに鋭い顎をさすっている。

この癖は何度か見たことがあるが何が引っかかっている時の仕草だ。

「だがギルドには一度もミラバルカンが塔に出現したという報告は入っていない入っているのは」

そこでリンが先読みして言葉を遮った。

「白い幻想的な龍を見た、でしょ？」

「・・・そうだ。だが」

「ここ約16年間、その報告は入っていない」

「・・・そうだ」

二度も先読みされたのが気に触ったのか少し声音を低くし、露骨に不機嫌さを出すキリル。

しかし周りの11将とラグナとロク、ティルは話しの続きが気になつてしょうがない。

「ロク様の年齢はおいくつですか？」

「あん？ ああ、確かなことは覚えてないが確か16だったはずだが。なあ？」

「あ、うん」

いきなり話を振られ、俊敏に反応できなく変な返事になってしまったが、そこは問題ではない。

今16歳のハンターは普通珍しいが、珍しい止まりだ。リンがなぜロクの年を聞いたかという事が問題だった。その場に居た全員の視線がロクに集まる。

「あ、あの、私がどうかしましたか？」

「ロク様のお歳は？ 龍が目撃されなくなったのは、何年前のことですか？」

「・・・16年？」

こくんと首を縦に振るリン。

「ロク様は間違いなく龍の原点にて頂点に立つ神のごとく存在、ミラーツであるルーツ様のご子孫です」

「待てよ！」

ラグナがいち早く不自然な点を見つける。

「親父がいなくなったのは20年前だぜ？」

「ええ。コチラで保護しました。しかし近年原因不明の病気にてお亡くなりになりました」

淡々と言うリンを思わず見返す。

いままで死んだと思っていた親が最近まで生きていたとは。

しかし親の話など興味は無い。

今は奴らをどうするかだ。

「じゃあ俺は？　俺が狙われる意味がわからん」

たまりかねたラグナは思わず声を上げる。

「私たち古龍は歴史が深い代わり、歴史に縛られます。それぞれ繁栄した時代には優れた皇帝と王妃がいます。その皇帝の素質を継ぐのがラグナ様なのです。ジーク様がそうだったように」

その言葉によって時間が凍りつく。

何も物音がしなくなり誰もが口をつぐんだ。

「さてよ！　なんだよ皇帝って！」

「わかりやすく言えば私達古龍の統率者です。力ある者たちは更に優れた力を持つもの主に使える。これが私たちの歴史であり、生き方でもあります」

「じゃあこの力がその素質ってことか？」

「クウオーターのラグナ様がそこまで力を持つことはまず無いです。それがそこまで強大な力を発揮できるということは生まれつき。天性の力が備わっていたということです。なにせジーク様のご子息で

すから」

「親父が・・・」

「これも運命です」

生まれつき。

そんな事で自分の運命が決まるのは理不尽だ。

運命なんて適当な言葉で言葉で片付けられるのか。

しかし世界は理不尽であり残酷だ。

だが、諦めがつかない。

もがいても、もがいても、それでも無理なら！！

「いいぜ！」

何かが吹っ切れたようにラグナは声を上げる。

「こんな運命！」

俺の人生を決めるのは誰でもない、俺だ！

「そんな歴史！」

そんなカビの生えたような歴史！

「忌まわしき血筋！」

二度とこんなことの起こらないように！

この破壊神が！

「この俺が破壊する!!」

**皇帝 王妃（後書き）**

総合ポイント200突破！

アクセス数16万突破！

本当にありがとうございます！

## 原点の場所

その日もドンドルマの街は、かなり早起きだった。夜明け直前から商人は声を張り上げ、工房からはトントンカンカンとテンポ良い音が響いてくる。ここまでは特別なことではない。至って普通な光景の中、一箇所だけ異様な雰囲気包まれた場所があった。

城門だ。

この時間帯には決してここまでの人間が居る筈ない場所なのだが、今日は特別だ。

多種多様な武具をまとったハンター達がほんの一台の竜車を送り出すため、見送りに来ているのだ。その中、明らかに浮いているハンターが一人。と言うよりそのハンターの周りには取巻きの二人以外のハンターがいないのだ。

まず見た目は、大きく開いた鉄のスカートに刺々しいアーム。腰には仕様なのか、製作過程で自然にできたのかわからないが、稲妻を連想させる模様が入っている片手剣。かつて別の流派の名家との競争に打ち勝った名家中の名家の名作・絶一門。淡い桜色を基調とした防具をまとっているが素顔は晒している。ヘルムを外しているのだ。スラットとした足にウルフカットにキツめのつり目、整った顔が特徴の野生的な女性だ。ただ胸が残念なだけで頭も切れ、洞察力も優れる知る人ぞ知るハンターだ。

「よお。アイネス。後は頼むぜ?」

最前列に居たそのハンターにバルクが苦笑いしながら近づいていくが、その女性は目だけ動かしバルクを一目見て再びキャラバンの馬車の方に視線を戻す。

「わかつている。・・・ら、ラグナからのお願いだからな・・・う

ん」

なぜか一人でしきりに頷いているこの女性。実はドンドルマの二大獵団・バリアントの団長であるアイネスである。

その腕前と人望、人から頼まれたら嫌と言えない性格が獵団を大きくした。完全にピラミット型で獵団が成り立っている神機武装と違い、完全にフリーな獵団がバリアント、この二大獵団は毎回狩人祭では両組の主戦力として活躍しているライバル獵団なのだ。

「一応下の獵団を残らせておくから使ってやってくれ」

バルクが打ち合わせしているがアイネスはラグナが乗り込んだ竜車をずっと見つめていた。

そのラグナだが、マリアとの話し合いにより『原点の場所』に向かうことになった。

古龍側の計画は落城専門家のマリアが襲撃を行い、4日経ったらマリアがラグナとロクを連れて『原点の場所』に向かう手はず担っているらしく、5日立つと偵察兼指揮のシャルが様子見にくるらしい。なんせ翼を持たないマリアは移動に時間がかかるが風と翼を自由に使えるシャルの移動速度は古龍の中でも群を抜くらしい。

マリアがドンドルマを襲撃してきてから2日目。どうしてもそれ以前に塔に向かい、ル力をぶっ飛ばし、ふざけた歴史と規則、運命を破壊したい。ここで再びシャルが戻ってこないと増援が攻めてくる可能性があるからだ。だからこそ急ぐ。

その間ドンドルマを守ってもらうため知り合いのバリアントの団長・アイネスに頼み込んで引き受けてもらったのだ。

そして、出発。

最高速の竜車でも3日かかるという塔だが、そんな暇は無い。最低限の荷物と共に出発を迎えた竜車。

ラグナとロク、バルクとリンとマリアが乗り込み、キリルが運転していくことになった。

これだけ乗ってもまだ席が余るほど大きいが、これ以上に人が乗ると減速するというので、これ以上の同行はない。しかも生半可のハンターが付いて行っても足手まといになるか、犠牲者を増やすだけだろう。

そんなことを考えている内、大歓声の中走り出す竜車の車輪は、運命と共に回りだす。

竜者の影が見えなくなり、野次馬達が散り散りになっていく中、十数名に及ぶ人影が城門に近づいてきていた。

「ケツがいてえな、おい」

一見普通の防具のようにも見える、太陽の光を浴び金色に光るそれはランゴスタの上等な素材を使った防具を纏い、アームで尻をさするハンターを筆頭に歩いてくる。

「しょうがないよ、ジャンボ村からずっと飛ばしっぱなしだったもん」

最初はおぼつかない手つきで狩りをしていた彼女は順調に腕を上げ、今では上級のレイアスシリーズを使っているようだった。

「この雰囲気はもう出発しちゃったようだね」

コチラも上達し、今では下級とは言えリオレウスシリーズをまとっている少年の姿が。その後ろには三人の仲間。

無愛想だった少年も、仲間と信頼の絆を深め、今では立派にパーテ

イー内で指揮をとっていた。

「さてと！ 久しぶりにマブダチの顔を拝みに塔まで行ってみますか！」

ランゴSシリーズの男は高らかにそういうのだった。

最高速で駆け抜けた竜者は二日目の夕方には塔に到着していた。途中の村でアプトノスを交換し、また全力疾走とかなり無理をさせた運転の賜だ。

ふと高すぎる塔を見上げるラグナ。  
誰が、何のために、いつ作ったのか全て不明。ただ、今は人間ではなく、他の者が支配している場所だ。不用意に踏み込むのは無用心だろう。

雲の上まで続く塔は螺旋状になっており、頂上に行くまでにはかなり骨の折れそうな場所だ。距離的にも警備体制的にもということだ。敵の本拠地なのだからそれなりに覚悟はしてある。

マリアやリンの話によるとそれぞれの階に古龍が控えているらしく、頂上に本来祖龍が居る筈の龍帝の玉座に、今はルカが居るらしい。ルカは他の古龍とは違い、ずば抜けた力を持っているらしい。生半可の実力では軽くあしらわれるらしい。

だが、大丈夫だ。閃光玉も、その素材も持てるだけもってきた。勝つ。そしてルカをぶん殴り、すべてを破壊する。

「行くぞ!!」

ラグナが風を切りながらただならぬ雰囲気醸し出す塔に向かって歩き出す。

向かうは、はるか塔の頂<sup>いただき</sup>！ 龍帝の玉座！

数分歩くと、塔の最下層が見えてくる。

その手前には緑が生い茂り、野生のアプトノスが草を食んでいる。奥には長い長い石造りの橋が見えてくる。いつ作られたのか記録に残っていないほど昔の建造物だが、今だ崩れる気配を見せずしつかりとした作りをしていた。

それを渡り切ると次は塔への入り口。

ポツカリと開いた入り口は奥が全く見えず時々奥で何かが煌くのが見える。

「まだここには番竜はいません。居るのは二階層からです」

リングが早足に入り口に入っていく、それを追いかけるように起こりの全員もついていく。

入ってすぐはまた下りの階段で、床には水が浅く溜まっており、大雷光虫が飛び交っていた。

「いつ来ても幻想的な場所だよなあ」

バルクが思わずと言った顔でつぶやく。繊細な装飾を施された柱と天井は薄暗く、入ってくる陽の光も少ない。その中青く光る大雷光虫はまるで星空を見ているようかの錯覚を覚える。

名残惜しい風景から抜けると少し広い道に出る。

コチラは四角に切り抜いた大きな石をいくつもはめ込み作られてる、塔の脇道だ。落ちたら一溜りも無いだろう。

そしてそこを抜けると少し細い道に出る。

コチラはひとつ前の道を細くしただけのエリアで、周りの風景を楽しみながら進むと、本格的に塔の中に入ることになる。

「準備はいいか？」

そう振り返るラグナに全員が頷き返す。

ここから二階層。戦闘を覚悟しなければ。

心の準備を済ませ、仲間の期待で後押しをし、塔の中に入る。が、そこで止まった。

別におじけづいた訳ではない。ただ、進めない。そこにあつたのは、壁。

業火の壁。燃え盛る紅の炎の壁により、先へ進めない。

「はあ。最悪です」

リンが額に手を当てため息をつく。

最後尾を来ていたマリアは中の様子を見るなり、肩をすくめた。

「最初から、あのかたですかあ？」

あの方って誰だ、と聞く前に、業火に一筋の道が現れる。

道といっても少なからず火に晒され続けるが、その先では更に炎が燃え盛っており、その光量に目が痛い程だ。

そしてラグナは目を見張った。その中に人影を見たからだ。人間の体は1600度を超えると蒸発するのだが、明らかにそれを越して

いる焔の波の中で平然としている人間が、明らかに一人居る。

「待ってたぜエエエエー！！ ラグナああああ！！」

一気に周りの炎が壁際まで押し飛ばされ、炎に囲まれた部屋の中には見覚えのある顔が。

「気をつけてください。アイツは戦うことに関して、私やマリアを軽く凌駕します」

リンが臨戦態勢を取りながらラグナを含め全員に注意を促す。

「デオ・テスカトル炎王のエドガア！ 推して参る！！」

### 三人目 紅炎のエドガア

「マリア！ 相手の特徴は！？」

前衛で相手の攻撃を紙一重で避け続けるラグナとリン。

ラオシャンロン

本来マリアも戦いたいのだが、あいにく本来の姿であった老山龍は火属性に弱いという弱点を持っているため、人間になり、余計に耐性が下がった今では、古龍の力を存分に使える相手の一発で致命傷になりかねない。だからといって後衛に控えているつもりはなかったのだがラグナに止められてしまった。

そこで少しでも力になろうと、控えていたバルクがマリアに敵の弱点を仰いだのだ。

「エドガアは戦闘においては他の古龍を超越した実力を持っているけれど、それはあくまでもその実力はタイムン一対一に限定されるの。でも」

そこまで聞いたバルクが異変に気づいた。

「だが現に今、三人がかりでも互角どころか押されてるじゃねえか！」

そうなのだ。現にラグナ、キリル、リンの三人がかりでかかっても同等、それ以上の戦闘を繰り返しているエドガア。

タイムン

どう見ても一対一を得意とする者には見えない。

コンピネーション

「人間で言うと、仲間同士の意識疎通の問題。普通の狩りなら立ち回りは自然にできてくるけど、対人戦はまだ慣れていないでしょ？」

「ってことは？」

先を促すバルク。

そこで深いため息をつくマリア。

「コンビネーションが取れない以上、一対一に持ち込むか意識疎通がすぐに出来る人物同士を組ませるのが妥当ですねえ」

一対一は相手の得意とする闘いである以上、それは避けたい。しかしすぐに意識疎通ができる人物同士と言ってもすぐには思い浮かばない。

「わ、私と兄貴が・・・！」

「ワリイがそれは無理な相談だ」

ロクがたまらず声を上げるがバルクはそれを却下した。

ラグナはロクが戦うのを異常に嫌うのだ。

恐らくラグナなりに考えがあるはずなのだが。

では誰と誰を？ それともラグナの実力にかけて一対一に持ち込むか？

バルクの頭の回転は減速を始める・・・。

後ろで作戦会議を立てているのはわかるが、未だに名案は出ていないらしく、正々堂々と正面切ってぶつかり合うラグナ。

近づくだけで体力を奪われてしまいそうな灼熱を纏い、テスト・デール・ソルを軽々振り回す化物相手に三人がかりで斬りかかる。

「ハアッ！」

対人戦専門家のキリルがブロードソードで鋭い突きを繰り出し、相手がそれを取り回しが悪い大剣でいなしている隙にもう片方の短剣をエドガアの膝に突き立てるが、その紅の脚甲に阻まれる。

それをきっかけにキリルを狙いだしたエドガアは強引に自分を軸に大剣で周囲を薙ぎ払うと、一気にキリルとの距離を詰めて上段から斬りかかる。

「隙だらけだ！」

愛刀のブロードソードを一文字に構えると横に一線。する前にエドガアの蹴りがキリルの胴体を見事に捉え、数メートル先の壁際まで吹き飛ばす。一瞬の出来事だった。

「キリル！」

ラグナが名前を叫ぶが反応は無い。

しかも壁際はエドガアの炎が未だに燃え盛っているため、長時間あの場所に居るのは危険だ。

「よそ見をしている余裕があるのか！？」

瞬視線を外したただけエドガアはラグナの目の前に迫っていた。またしても中段からの横一闪。ダダン！と足を踏み込み剣を横に振るうが、今度はラグナが姿勢を低くして、エドガアの胴体に蹴りを入れて吹き飛ばす。エドガア自身も勢いついていたため真後ろにあった柱を二本破壊して壁際まで飛んでいくエドガア。

その間に後衛のバルクにキリルの回収を頼み再びエドガアに向き直

る。

リンは仲間との連携を取るのが苦手らしく、どうもタイミングが合わない。

ロクは戦わせない！なら誰が……。

ラグナが思考を巡らせている内にエドガアが土煙の中から再び姿を表す。

「ああ。いいなあ。楽しいぜえ」

ニヤニヤと口元が緩んでいるエドガアは何事もなかったように近づいてくる。

そこで、決める。

「この破壊神がタイマン張ってやるよ。ありがたく思いな！！」

足元の床に亀裂が入るほど強き踏み切ったラグナは瞬時に手元にあ

スラッシュアックス

る得物を剣モードに変形させると柄を短く持ち、小ぶりに連撃の嵐を繰り出す。

奇襲に十分防御の時間が間に合わず、数発もらいながら斬撃をいなししていくエドガア。その口元には笑みが浮かんでいる。

「オラアアアアッ！！」

縦、横へと二回、目にも留まらぬ速度の斬撃を繰り出し、腰だめに水平に刀身を保ったままレバーを引き再び横に一閃。いつの間にか剣モードから斧モードへと変形した覇剣斧ムルカムトルムが再びエドガアに襲いかかる。

手数を考えた軽い斬撃に備えていたエドガアは、近くで見てもいつ変形したのか分からないほど絶妙な変形の後、攻撃力を重視した重い攻撃に耐えかねて肩に一撃もらいながらバックステップで距

離を取る。

[illegible]

肩の傷口から真つ赤な血が溢れてきているエドガアは剣を背中に戻す。

コチラに近づいてくる様子はなく、その場で両手を左右に持ち上げる。

「この人間型ってやつは結構べんりだな。莫大な体力とインターバルをおいたとしても、十分に価値はある。しかもこんなこともできるんだぜ？」

なぜか余裕綽綽のエドガアを見て訝しがるラグナ。

「兄貴！」

「粉塵爆破だ！！」

ロクとバルクの声を聞き、その時初めて自分の周りにキラキラと光るオレンジ色の粉が待っていることに気がつくラグナ。

それも、包み込むようにラグナを中心に集まっていく。

「It a show time!!」

口元が緩んでいるエドガは余裕の笑みを見せている。

鉄のアームをつけていた指を、ギーン！と鳴らす。

その火花に粉塵が引火して、一瞬オレンジ色の閃光を放ち……。

爆発。

常人なら爆死。一瞬塔が揺れた気がした。

パラパラと埃や小石が落ちてくるが今はそれどころではない。ラグナがとうなっているかが問題だ。

皆身を乗り出して立ち込める煙の中を凝視する。

次第に煙が薄くなっていく。

そしてラグナは

「生ぬりい。ぬするぎるぜ？」

鎧の隙間から明らかに周りとは違う黒い煙が出ているが、それでもしっかりと足を地面につけて、立っている。

それを見たエドガアは顔をこわばらせるが、すぐにいつもの顔に戻る。

「最高におもしれエな！ ほとんどの奴なら今ので決着が付いちまう。だがお前は倒れなかった！ いいねえ！ とことんやろうぜエエエエ！！」

再び粉塵をばら撒くエドガア。しかし今度は集中型ではなく部屋全体にばらまいているということだ。

本来なら粉塵爆破は、一定以上の濃度で粉が散布している状態で火が引火する事によって起きる。酸化が恐ろしい速度で進むため爆発が起きるのだ。そのためこの状態が本当の粉塵爆破。おそらく先ほどの威力とは比べ物にならないだろう。

「全然ダメだな。お前、モテねえだろ。固定戦法野郎」  
ワンバターン

部屋全体を粉塵でいっぱいにするにはそれなりの時間がかかる。そ

して粉塵爆破を起こす最低限の条件、一定以上の濃度を散布させる前にどうにかすればいい。

そこでラグナは大きく振りかぶり、入ってきた壁に覇剣斧ムルカムトルムを投げつける。

超重量の斧は回転を加えられ、風を切り裂く音を立てて壁をぶち破る。

「なあ！？」

壁をぶち破るなど普通では考えつかないことを躊躇いなく一瞬で実行してみせるラグナ。

この古い塔ではそんなことをしたらいつ崩れるか分からないのだ。いくら古龍といえどそれは恐れる。

「ロク！！」

「兄貴！！」

まるで事前に打ち合わせをしたように、ラグナが手を横に突き出すと、ロクの愛刀・崩刀ウコトカムルバスがその手中に収まる。

テオ・テスカトルを見ていると分かるように粉塵をばら撒き始めると動きがとれなくなる。そこを見越したラグナの策だった。

「もらったアアアア！！」

「ウオオオオオオ！！」

恐ろしく重い覇剣斧ムルカムトルムと比べるとかなり軽い崩刀ウコトカムルバスをまるで木の棒のように斬撃を繰り返すラグナ。

ラグナのスラッシュアックスと一緒に取り寄せた秘伝書。遠方の太

刀の極意が書かれている秘伝書に書かれていた奥義。ジンいわく使うと目が回る。大回転斬り。

「オラアアアッ！！」

最後の最後に腕で心臓をかばうエドガア。

しかしラグナの狙いはそこではない。

エドガアはスピードを重視したため胴体の鎧をつけていない。狙いは胸ではなく、腹。

右足を踏み出し、左足をもう一步踏み出し固定する。そこで限界までひねった体を解放し、自らが斬撃の嵐となり、エドガアに襲いかかる。

一閃。

ラグナが大回転斬りの都合で背中に剣を戻す。

その時にはエドガアは血の海に沈んでいた。

彼を見下ろしていたラグナはすぐに目を逸らし覇剣斧ムルカムトルムの回収に向かう。

ついでに

「ロク。これ」

崩刀ウコトカムルバスをロクに返す。

覇剣斧ムルカムトルムを回収し、次の階へ向かう。

「やっばスゲエな、お前は」

バルクがいつの間にか隣に来ていた。その背中には今だ意識を取り

戻さないキリルの姿。

「ホントですよ。あのエドガアを一人でやっつけちゃうなんて」

「ほんとにすごい」

「うん！」

マリアとリン、ロクの賞賛に少し照れながら階段を上がっていきうとしたラグナは、恐ろしい殺気に思わず振り向く。

悪魔を思わせる巻角に、血か炎を連想させる赤いたてがみ。凶暴な牙。居た。確かに。

炎王 テオ・テスカトル。

その目は獰猛にギラギラと鈍く光っている。

### 三人目 紅炎のエドガア（後書き）

バカは風邪を引かないらしいのですが、自分、バカじゃないのかも  
しれないです。

風邪引きました……。遅れてごめんなさい……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5744r/>

---

モンスターハンター 破壊神を破壊した男の物語

2011年11月8日02時05分発行